

研 究 紀 要

第 6 号

1989

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

羽状縄文系土器の文様構成（点描）—1	黒坂楨二……1
集落資料集成の一方法 ——縄文時代中期集落を中心として——	石塚和則……29
前方後方墳出土土器の研究	高橋一夫……35
関東地方における竈・大形甑・須恵器出現時期の地域差	中村倉司……95
北武藏における古瓦の基礎的研究Ⅲ	昼間孝志・宮 昌之 木戸春夫・高崎光司……125 赤熊浩一

北武藏における古瓦の基礎的研究Ⅲ

昼間孝志・宮 昌之・木戸春夫
高崎光司・赤熊浩一

第1章 埼玉県西部における古代寺院の概観

今回の古瓦の基礎研究は越辺川以南から入間川流域の県西部を対象に行った。しかし、県内でも古瓦資料の多い地域であるため、今回は坂戸市・入間市・日高町の古代寺院及び関連遺跡を中心に、若干の知見と説明を加えるものである。所沢市等の他地域の資料収集と古瓦の基礎研究の総括は、次回に行いたい。

入間郡には勝呂廃寺が存在する。勝呂廃寺の位置は、毛呂山丘陵の東端で坂戸台地上にあり、北からの都幾川・越辺川、南からの高麗川・入間川の合流点に近い立地条件を持っている。このことは、単に、入間郡の中心的寺院と言うだけでなく、武藏国において重要な寺院であると考えられる。特に、武藏においても7世紀後半という早い時期に寺院の建立が行なわれ、また、軒丸瓦に棒状子葉の文様意匠をもった特殊な瓦は、大谷瓦窯跡・赤沼窯跡・小用廢寺と関連がある。8世紀前半には、女影廃寺の影響で成立したと考えられている(1982高橋)複弁8葉蓮花文軒丸瓦の文様意匠を持つ瓦が検出されている。

高麗郡の寺院成立の背景については、『埼玉県古代寺院跡調査報告書』の中で高橋一夫氏が女影廃寺出土といわれる複弁8葉蓮花文軒丸瓦が茨城県新治廃寺の瓦と同範囲であることから8世紀第一四半期にあたり、この考古学的現象に歴史的事象として、続日本紀の元正天皇建龜二年(716)に7か国から高麗人1,799人を移して武藏国に高麗郡を設けた。前代からの基礎のない高麗郡に女影廃寺・火寺廃寺・高岡廃寺の3寺院が建立され、国家的プロジェクトの要因を窺わせる。

県西部地域で見られる特殊な瓦製作上の技法としては、高岡廃寺出土の單弁6葉軒丸瓦に見られる「高岡技法」である。この技法は、半載した丸瓦部分にあらかじめ瓦当範に押し当てて内区部分だけ製作した瓦当を、丸瓦の広端側のやや内側に懸垂状に接合させ、裏面の接合部分を撫て軒丸瓦とする方法である。この技法は、丸瓦部に瓦当をはめ込む馬騎の内技法の系譜と酒井清治氏は指摘している。また、女影技法は、女影廃寺の單弁8葉軒丸瓦にみられ、粘土を瓦当範に入れたまま輶輪回転を利用して整形された瓦当裏面をロクロナデしている。いずれも、須恵器工人との深い関わりを示唆させる。この他に、国分寺塔再建時に東金子窯跡群で製作された粘土紐一枚造りの平瓦である。これと関連して、鐵川遺跡や八坂前窯跡・女影廃寺に糸切りの残る粘土紐一枚造りも検出されている。

瓦の製作技法の特徴は、いずれも、須恵器工人と深い関わりを持っていることが窺える。こうした傾向は北武藏の様相として捉えられる。

(赤熊浩一)

第2章 遺跡と出土遺物

第1節 寺院

勝呂廃寺

立地と環境

勝呂廃寺は坂戸台地の北東、標高約22mの先端部に位置している。寺域をのせる台地は北東方向から大小の谷が入り、先端付近は台地が枝状になる。台地の北側から東側にかけては越辺川によって形成された冲積地が広がっている。また、寺域をのせる台地の南側は北東方向から大きく谷が入り込んでいるため、緩やかに傾斜する。このため、立地状況から寺域はかなり制限され、東西に長軸を持つ範囲が想定されている。

周辺には、先土器時代から中・近世にいたる間のさまざまな遺跡が存在する。勝呂廃寺の東約1kmに位置する附島遺跡からは、弥生時代後期から平安時代に至る集落跡が検出されている。K-6・8・9号住居跡（9世紀）からは勝呂廃寺所用瓦が出土している。

坂戸市から鶴ヶ島町にまたがる若葉台遺跡では100棟以上の掘立柱建物跡、住居群、土坑などが検出されている。住居跡は7世紀代のものも含まれるが、大部分は8世紀後半から9世紀後半頃に集中している。北東に位置する山田遺跡では火舎（奈良三彩）が出土している。

周辺の後期古墳群は勝呂古墳群、新町古墳群などの6世紀後半を中心とする円墳群が存在するが、雷電塚古墳、駒山古墳、勝呂神社古墳は前方後円墳として考えられている。一方、附島遺跡の南3kmには6世紀後半の須恵器蓋、壺を焼成した西谷ツ窯跡がある。この窯は台地斜面に1基だけ存在するが、その供給先は不明である。

勝呂廃寺の寺域周辺では、過去5度にわたる調査が行われている。その結果、寺域の中心部では掘立柱建物跡、伽藍を区画すると考えられる南限の溝や瓦溜などが検出され、多量の瓦類が出土した。南限の溝は幅約1.5mで、10世紀前半頃には集落が寺域内に形成されることから、9世紀の末頃にはその機能を停止していたことが窺われる。また、周辺の集落では、住居の窓の補強材として勝呂廃寺の丸瓦・半瓦が利用され、「寺」と書かれた墨書き土器も数点出土している。なお、供伴する須恵器の大半は南比企窯跡産から供給されたものである。

出土遺物（第2図～第18図）

軒丸瓦

第1類

1～3は、単弁8葉軒丸瓦である。いずれも瓦当面の大半を欠損しているが棒状子葉を有する同種の瓦を考えられる。1は外区が三角縁を呈し、界線が巡る。蓮弁は先端が反り、間弁もT字状の明瞭なものであるが、弁は平坦である。瓦当面はやや厚手で、側面と裏面にはヘラケズリが施される。2と3の弁は平坦であるが、間弁は高く、Y字状である。1に比べて瓦当面は薄く、周縁は直立縁と考えられる。瓦当面と丸瓦の接合部には、ナデが施される。1は赤褐色、2は青灰色、3は

黒褐色で、いずれも焼成は良好である。小破片であるため、分類を異にしたが、1は第3類、2・3は第4類の可能性がある。

第2類

9は単弁12葉軒丸瓦である。この瓦は小用廐寺出土瓦と同范である。いわゆる棒状子葉を持つ瓦で、中房には1+8の蓮子を配する。弁は平坦であるが、弁の反りは鋭い。10も同類と考えられる。

第3類

5・6は、単弁8葉軒丸瓦である。この瓦は比企郡赤沼窯跡出土瓦と同范で、同窯跡からの供給関係のはっきりした例である。棒状子葉を持つ瓦としては、9に比べやや退化した印象がある。周縁は素文の直立線で、この種の瓦は範型から粘土を抜き取る際、外側に開いた状態になる。中房は低いが、蓮子は高く、1+6を配する。5は蓮子の1つを欠く。子葉はやや幅広となり、間弁もT字状となる。弁はやや平坦で、反りは鈍くなる。直径17.5cm、厚さ2.3cm、胎土に石英、雲母、砂粒を含む。色調は灰色～灰褐色。焼成やや不良。

第4類

7・8は、単弁8葉軒丸瓦である。7・8とも赤沼窯出土軒丸瓦と類似している。(研究紀要第4号参照) 7は周縁と内区の半分を欠損する。Y字状の間弁を持ち、弁の反りは鋭い。中房はやや盛り上がり、1+8の蓮子を持つと考えられる。子葉はやや幅広であるが、弁と弁を区画する隆線は細い。8は素文の直立線と弁の間に2条の界線が巡る。間弁はY字状を呈し、弁の反りは鈍い。丸瓦との接合部分とは、ナデが施される。7・8とも色調は青灰色、胎土に白色針状物質を含む。焼成は良好である。

第5類

4、11、12、13は、複弁8葉軒丸瓦である。いずれも同范である。周縁は素文の直立線でやや開く。中房は高く、1+4の蓮子を配する。弁は細長く、間弁はくさび状を呈し、弁を区画する細隆線は中房より伸びる部分が太く、茎状になっている。瓦当裏面には回転台を使用して製作されたと考えらるロクロの痕跡が明瞭に残っている。丸瓦との接合は、ナデが施されるが、丸瓦の凸面は縱方向にヘラケズリが施された後は未調整である。周縁側面はヘラケズリの後、ナデで調整される。なお、丸瓦は桶巻造り。色調は暗褐色～淡褐色。胎土は石英、長石の他に白色針状物質を多量に含む。完形の11は直径19.3cm、厚さ2.2cm、12は直径18.6cm、厚さ2.8cm。焼成は良好である。

第6類

14は複弁8葉軒丸瓦である。周縁は素文の直立線で、交叉波状文が16周する。弁は細隆線で区画され、丸く、厚みを持つ。中房には1+5+10の蓮子を配する。直径20cm。色調は青灰色。焼成は良好である。

第7類

15は単弁15葉軒丸瓦である。素文の直立線を有するが、天部は範型から抜き取り後の調整のためヘラケズリされ、下端部に比べ薄く造られている。交叉波状文は13ないし14周する。弁はやや細長く扁平で、くさび状の間弁を有する。中房はやや歪みが見られ、高く、1+9+9の蓮子を配する。瓦当裏面はナデが施される。直径20.6cm。17は単弁16葉軒丸瓦である。素文の直立線の内側には交

又波状文が14周する。弁は扁平で、くさび状の間弁を有する。中房は高く、 $1+9+9$ の蓮子を配する。瓦当裏面はナデが施される。直径20.8cm。色調は赤褐色。焼成は不良である。

第8類

16、18-20は单弁14葉軒丸瓦である。素文の直立縁の内側には交叉波状文が12周する。弁はやや細長であるが丸味を持ち、盛り上がる。中房には $1+6+11$ の蓮子を配する。瓦当面は厚く造られ、裏面はナデが施される。周縁側面はすべてヘラケズリされる。完形の16は直径20.8cm、厚み3.9cm。丸瓦部は凸面が縦のヘラケズリを施される。色調は淡褐色-赤褐色。焼成はやや不良である。

第9類

21、22は单弁8葉軒丸瓦である。周縁は素文の直立縁で側面は鉈削りされる。弁は細陸線で区画され、やや盛り上がる。間弁はくさび状を呈する。中房は大きく、 $1+4$ (+4) の蓮子を配する。22は小蓮子を欠くが、同范の可能性がある。21の瓦当裏面は丸瓦との接合部まで、ナデが施されるが、22は、瓦当裏面の中央部に無紋りの布目压痕を残している。色調は淡青灰色である。焼成は良好である。

第10類

23は单弁6葉軒丸瓦である。周縁との内区の一部を欠く。全体に磨滅著しい。弁は丸味を帯び、間弁は退化した、くさび状を呈する。中房は高く、 $1+4$ の蓮子を配する。瓦当裏面はナデが施される。直径20.6cm。色調は暗青灰色、焼成はやや不良である。

第10類

24は单弁8葉軒丸瓦である。周縁との内区の一部を欠く。全体に磨滅が著しい。蓮子の数は不明である。弁は丸味を持ち、間弁は細陸線のみで表現される。瓦当裏面にはナデが施される。色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。

第11類

25は周縁と内区の一部が残在する。素文の周縁及び側面はヘラケズリされる。一条の界縁と周縁の間に珠文帯が巡る。弁の数は不明である。瓦当裏面は、ナデが施される。色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。

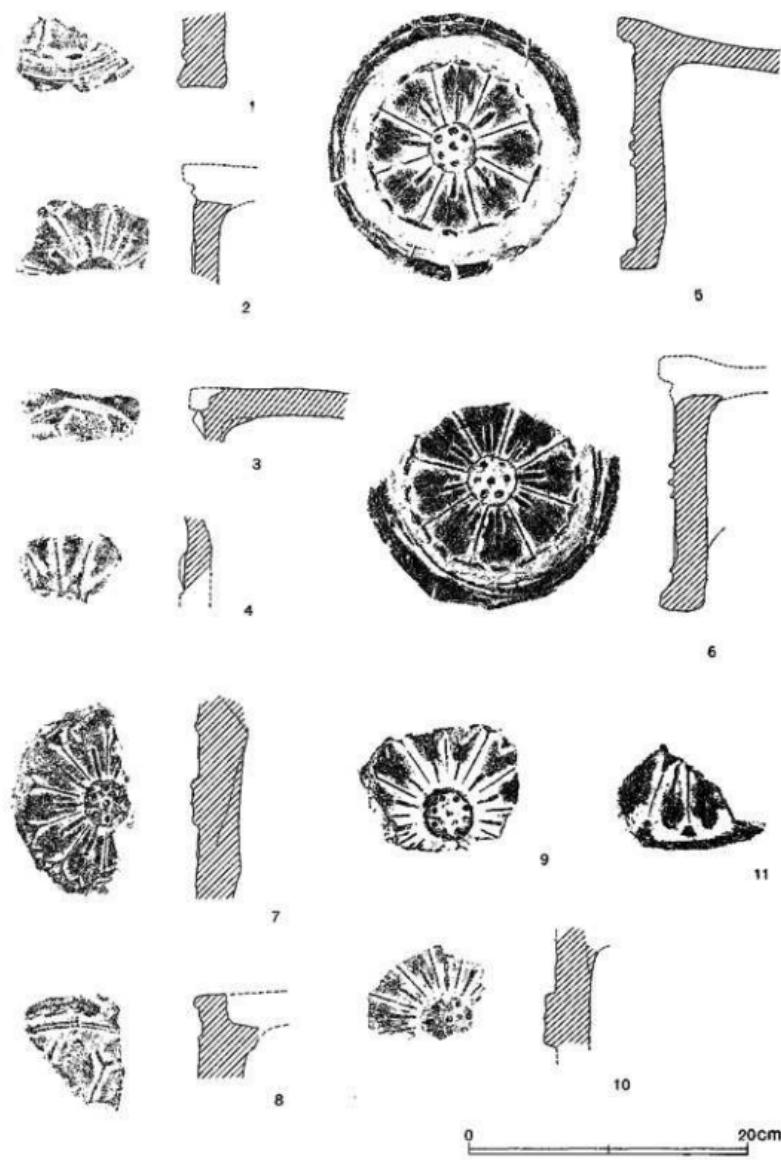
第12類

26は单弁4葉軒丸瓦と考えられる。瓦当面全体は薄く造られ、陸線によって、弁や中房は表現される。直立縁の周縁と連弁の間に一本の界縁が巡る。円と十字で表現した中房内には三角形の蓮子が4個配され、弁を十字に分割したものは子葉の表現と考えられる。色調は淡灰色を呈し、焼成はやや不良である。

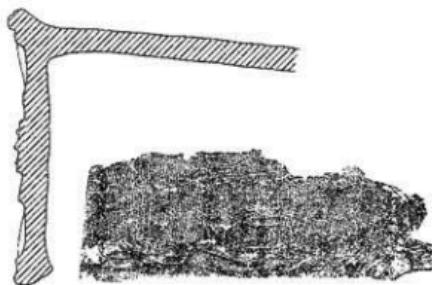
軒平瓦

第1類

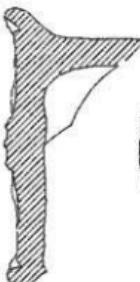
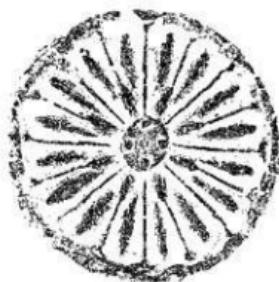
重弧文軒平瓦である。27、29、30、32、33は五重弧文で、いずれも范型によって製作されている。27、29はやや幅広の頭を有し、頭部及び平瓦凸面には正格子の叩きが施され、平瓦部との境はヘラケズリされる。凹面は3cmあたり25本の布目痕を残す。胎土は暗青灰色、焼成は良好である。平瓦は桶巻造りである。30、32、33は頭が短く、凸面にはナデが施される。平瓦部の凸面はナデ及び



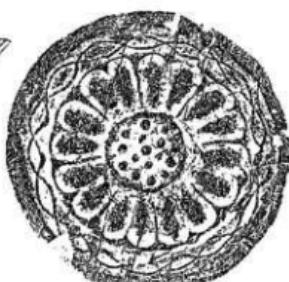
第2図 勝呂庵寺(1)



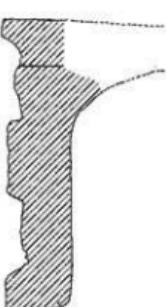
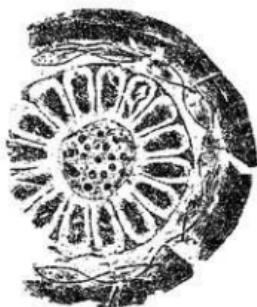
12



13



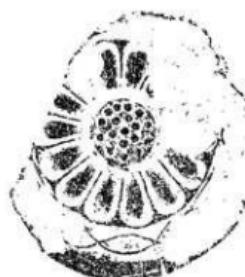
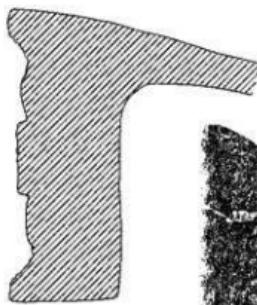
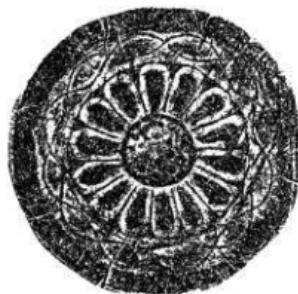
14



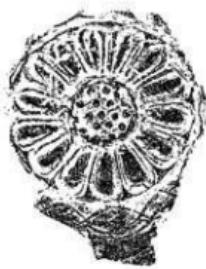
15

0 20cm

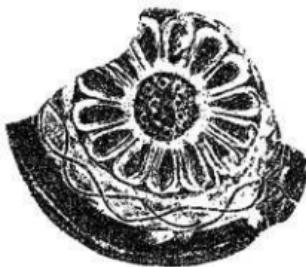
第3図 勝呂廃寺(2)



18



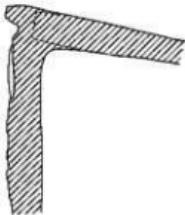
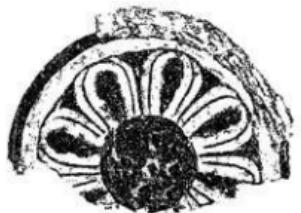
19



20

A scale bar indicating a length of 20 cm.

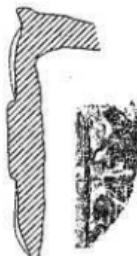
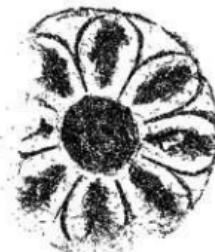
第4図 勝呂廃寺(3)



21



22



23

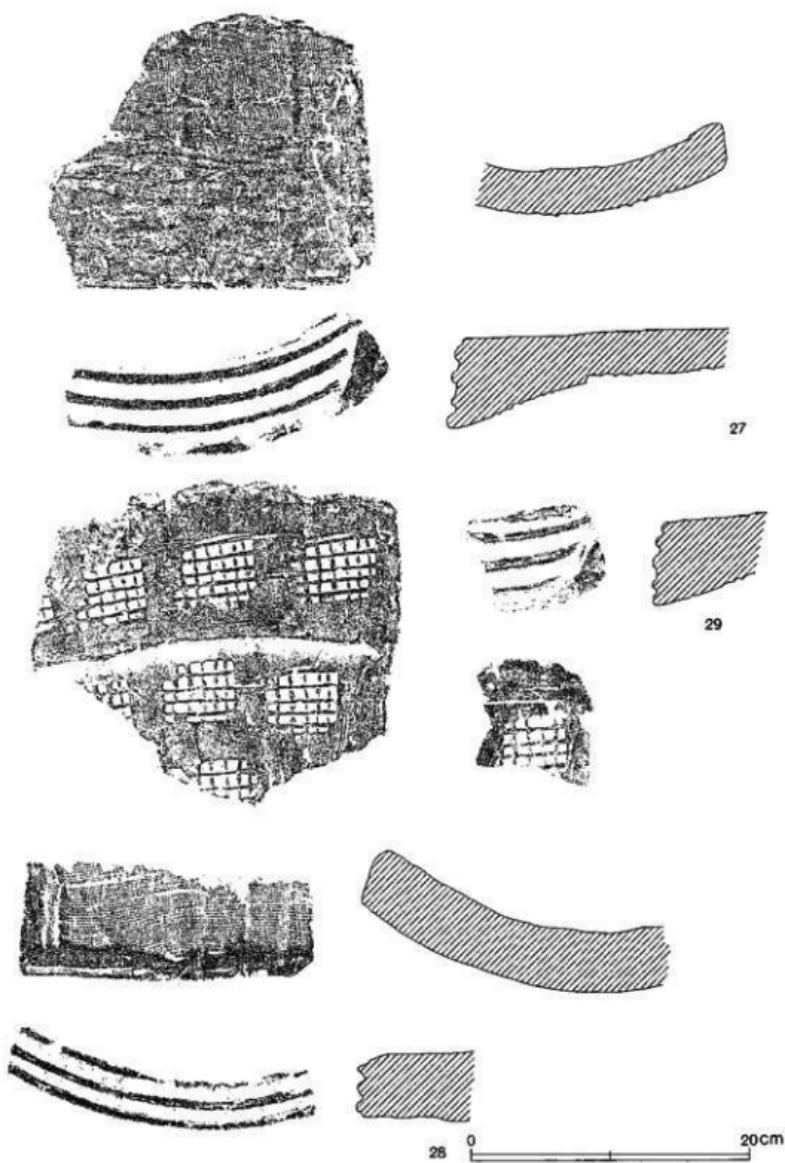


第5図 勝呂廃寺(4)



26





第6図 勝呂庵寺(5)

縦方向のヘラケズリが施される。凹面は3cmあたり25本の布目痕を残す。色調は暗褐色～暗青灰色、焼成は良好である。平瓦は桶巻造りである。31は3重弧文で、笠型によるものである。瓦当面の上部はヘラケズリされている。頸部を欠く。凸面に格子の叩き、凹面に3cm 本の布目痕を残す。色調は灰褐色、焼成は良好である。平瓦は桶巻造り。

第2類

28は3重弧文軒平瓦である。瓦当面は型挽きによるもので、上下端部の調整もなでが施されている。頸はやや幅広の段頸と考えられ、ナデが施される。凹面は端部付近に1cm程のヘラケズリが施されるが、3cmあたり22本の布目痕を残す。色調は青灰色で、焼成は良好である。平瓦は桶巻造り。

第3類

34～36はいずれも重弧文風の格子文を瓦当文様としている。弧に直交する線は上端に比べ下端を広く造る。35の頸の状態から幅広の段頸になると考えられる。残存する頸の凸面はヨコナデが施され、凹面には3cmあたり30本の布目痕を残す。色調は淡赤褐色～青灰色、焼成は良好である。

第4類

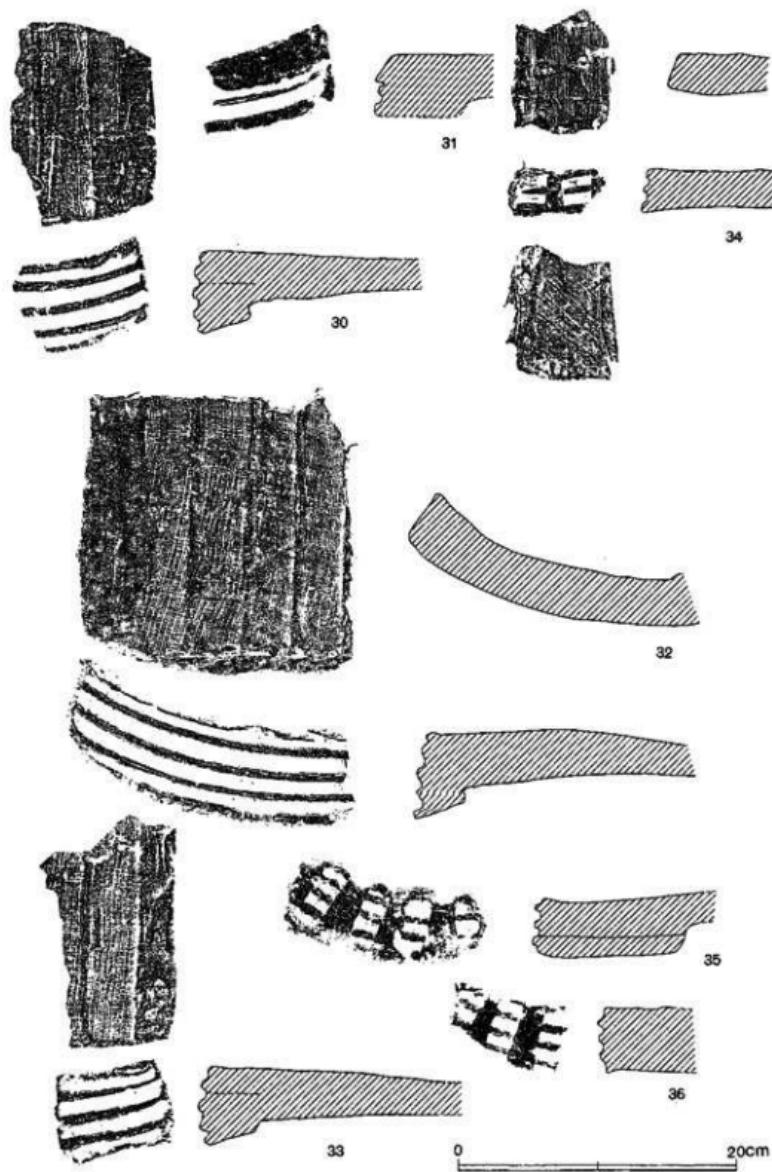
37、44は扁行唐草文軒平瓦である。いずれも笠型によって製作されている。37は頸の短い段頸で、凸面は頸部、平瓦部とも繩叩きが施される。凹面は端部のみ横なでが施されが、明瞭に3cmあたり25本の布目痕を残す。唐草文は細隆線と太線を組合せているが、子葉の巻き込みも小さく、端部も細く、界線も省略され、やや退化したものである。平瓦は一枚造り。色調は青灰色、焼成は良好である。44は頸の短い曲線頸を呈する。凸面端部は幅2cmにわたってヨコナデが施されるが、他はすべて繩叩きされる。凹面は37同様、広端部は幅3～4cmにわたってヨコナデされる。3cmあたり、25本の布目痕を残す。側端部は面取りがされている。唐草文は一重の界線内に配され、子葉の巻込みも比較的大きい。右端の脇区の一部は界線（二重）の一部か、二重界線の可能性があり、同範瓦の確認材料となる。色調は暗青灰色、焼成は良好である。

第5類

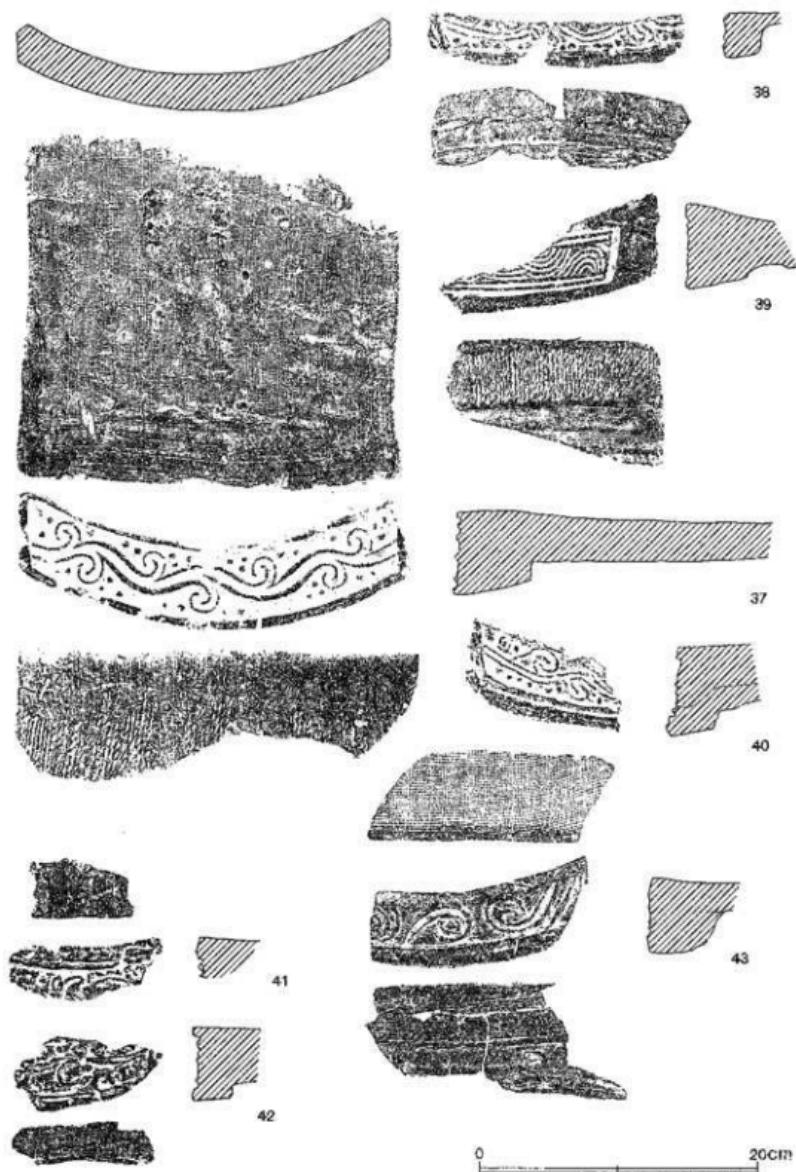
38、40～42は唐草文系軒平瓦である。いずれも型的にはかなり退化しているが、扁平草文で、范型によるものである。38は段頸で、凸面はヨコナデされるが、凹面は剥落している。瓦当文様は隆線による弧を3単位とし、間に飛雲文風の表現を入れている。珠文帯は下端部に限られる。周縁は素文である。色調は暗褐色で、焼成は良好である。41は頸部、42は上端と平瓦部を欠く。ともに磨滅が著しく、瓦当文様は不明瞭であるが、界線で区画された中に右から左へ巻き込み唐草が表現されている。珠文は上下段にある。色調は淡褐色、焼成は良好である。40は短い段頸の扁行唐草文である。上端を欠くが、界線の内側の上下段に珠文帯が巡るものと考えられる。唐草は左から右へ、上下段とも内側に巻き込む。凸面にはナデが施される。色調は淡灰色で、焼成は良好である。

第6類

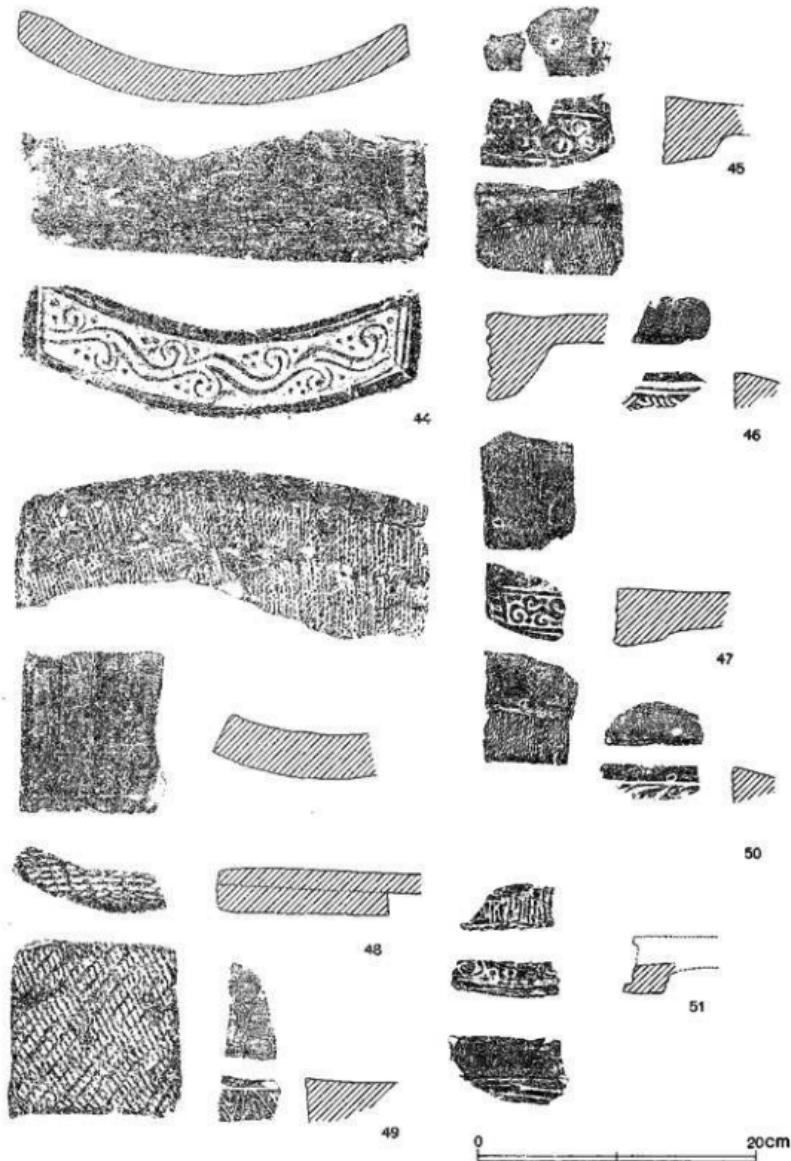
39、46は流水文系軒平瓦である。ともに笠型によるものである。大半を欠損するが、瓦当文様は粘土全体に対して小さく、粘土の押し込みも浅い。頸は曲線頸に近く、繩叩きが施される。凹面は3cmあたり30本の布目痕を残す。広端部は上下ともヨコナデされる。色調は39は淡灰色で、46は暗青灰色で、焼成は良好である。



第7図 勝呂庵寺(6)



第8図 勝呂廃寺(7)



第9図 勝呂廃寺(8)

第7類

43、50、51、55、56は扁行唐草文である。いずれも范型によるもので段顎を呈する。43は2対の子葉が巻き込み、55は左方から連続して子葉が巻く。凸面の顎の部分はナデ、56は縄叩きが施される。51は瓦当文様に珠文帯が巡り、平瓦との接合部には縦方向の刻みが入る。色調は青灰色～淡赤褐色で、焼成はやや不良である。

第8類

45、47は扁行唐草文である。いずれも范型による製作であるが、粘土の押込みは浅い。45は左から右方へ流れるもので子葉は1枚のみである。顎部分は縄叩きが施され、凹面は3cmあたり30本の布目痕が残る。色調は暗灰色で、焼成は良好である。

第9類

48、52～54、60は、斜格子を瓦当文様とする軒平瓦である。いずれも粘土の押込みは浅く、叩き板に押し付けた感がある。48は長方形の格子文で、段顎の部分には斜格子の叩きが施される。凹面は3cmあたり30本の布目痕が残る。端部はヨコナデが施される。52、54は直線顎である。52の凸面は縄叩きされるが部分的に磨り消されている。53は瓦当文様と同系の叩きが凸面に施される。色調は淡灰色～青灰色、焼成はやや不良である。60は段顎で、平行叩きに大型の格子で叩いた様な叩きを施す。凹面は端面がヨコナデされ、3cmあたり30本の布目痕が残す。色調は淡褐色、焼成は良好である。

第10類

49、57、58は、格子文系軒平瓦である。49は沈線で区画された中に山状の連続する文様が構成される。凹面は3cmあたり20本の布目痕が残る。色調は淡灰色、焼成良好である。57は沈線で、区画された中に交叉する鋸歯文で構成される。凸面は顎及び平瓦部とも縄叩き、凹面は3cmあたり22本の布目痕が残す。色調は暗青灰色で、焼成は良好である。58は筒状工具によって浅い沈線で構成される。凸面はナデ、凹面は3cmあたり25本の布目痕、模骨痕を残す。

第11類

59は大形の珠文で構成される軒平瓦で、曲線顎である。凸面はナデ、凹面は3cmあたり20本の布目痕を残す。色調は青灰色、焼成は良好である。

九瓦

第1類

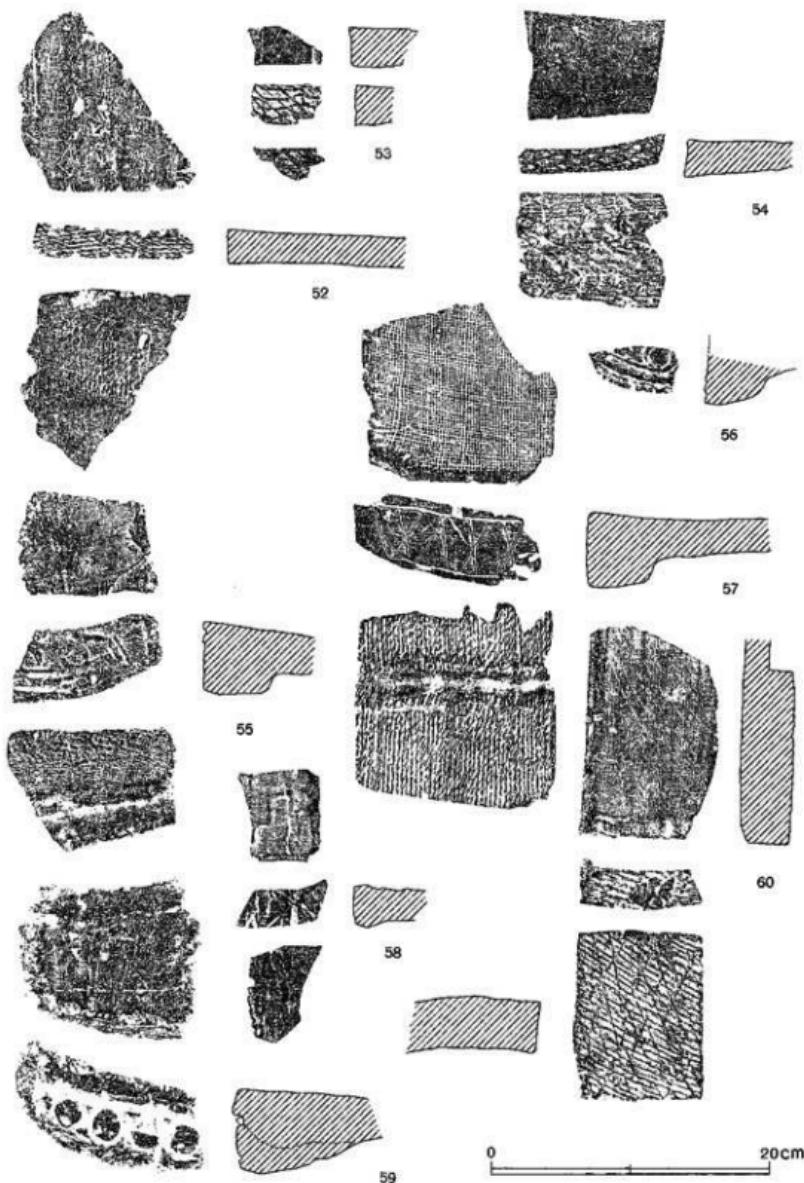
61、62はともに桶巻造りである。凸面は平行叩きの後、ナデによって磨消されている。凹面は61は3cmあたり28本、62は30本の布目痕を残す。側端部は2段の面取りがされている。色調は灰色～淡青灰色、焼成は良好である。

第2類

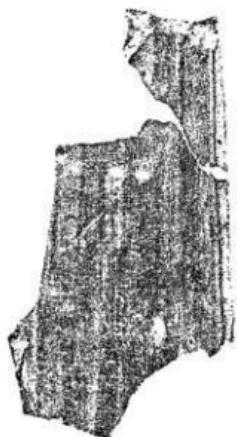
63の凸面は縄叩きされるが、一部磨消されている。凹面は3cmあたり25本の布目痕が残る。桶巻造り・色調は黒褐色、焼成良好である。

第3類

64の凸面は斜格子の叩きが施される。凹面は3cmあたり25本の布目痕を残す。桶巻造り。色調は



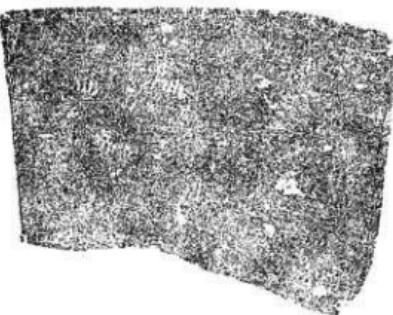
第10図 勝呂庵寺(9)



61



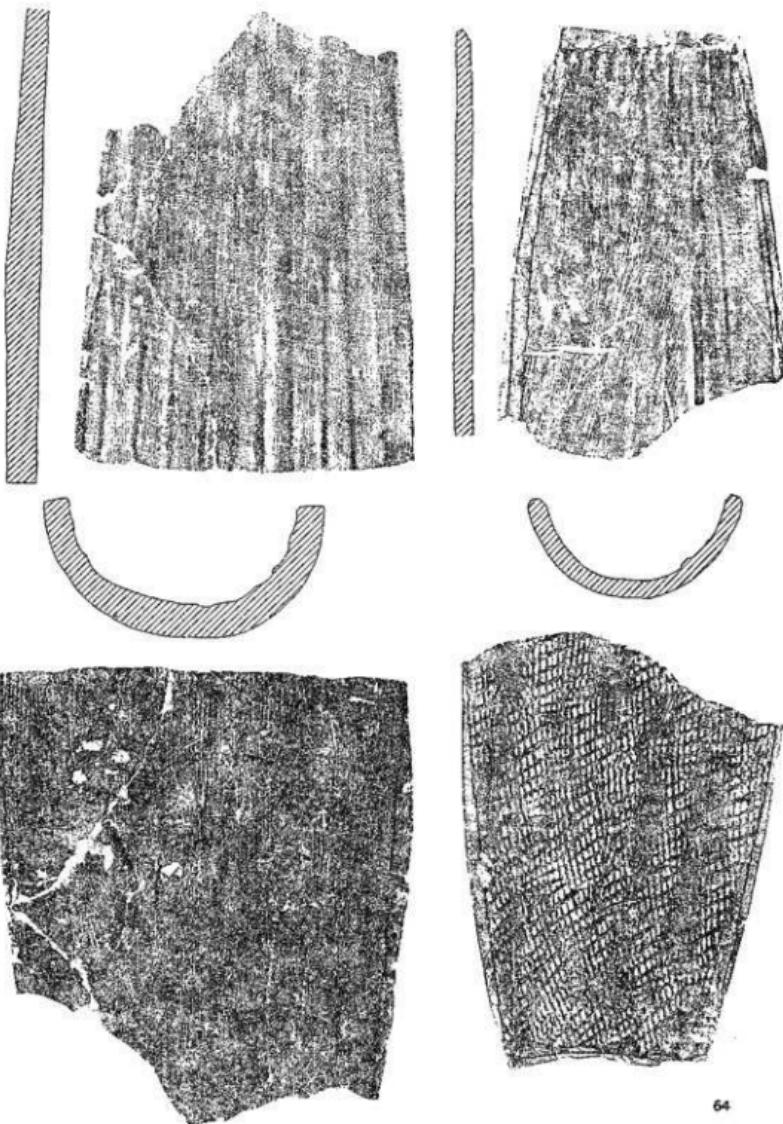
62



0

20cm

第11図 騰呂廃寺(1)



第12図 勝呂庵寺(1)

青灰色、焼成は良好である。

第4類

65は第1類とは異なるが、凸面はやや幅のせまい平行叩きのち、なでを施す。凹面は3cmあたり30本の布目痕が残る。桶巻造り。色調は暗褐色、焼成は良好である。

第5類

66の凸面は全面ナデによる調整が行なわれる。凹面は3cmあたり25本の布目痕が残る。模骨はやや広い。桶巻造り。色調は青灰色で、焼成は良好である。

平瓦

第1類

67、70、72、75は凸面を平行叩きによって調整される平瓦。67、70、71は叩き後、ナデによって磨り消されるが、70は縦方向のナデによってほぼ全面が磨消されている。凹面は布目痕上に直行する様に平行叩きが施される。72は凸面広端部が横方向にナデられているが、これはナデのちに平行叩きが加えられている。67の凹面には明瞭に糸切り痕が残る。いずれも桶巻造りで、側端部は2段の面取りがされている。色調は淡灰色～青灰色、焼成は良好なものとそうでないものがある。

第2類

68、69、77は凸面に正格子の叩き痕の残る平瓦。いずれも正格子の叩きの後、指によるナデが加えられている。桶巻き造りで、側端部は2段の面取りがされる。77の凸面は一部、縄叩きが残る。凹面には布目痕を残すが、69は大部分が縦方向のナデによって磨り消されている。色調は赤褐色～灰褐色、焼成は良好である。

第3類

74、76、80～85は凸面に縄叩きが施される平瓦。74は部分的に磨り消され、交互に叩きの位置を変えている。76は同一方向で、ともに桶巻造り。74には糸切り痕を残す。凹面には3cmあたり28本の布目痕が残る。78は凹面に「Z」の竪書きと「中」の模骨文字が残る。側端部の面取りは小さい。81も同様である。82の凹面の文字は判読不可能である。83は凸面に「中」、凹面に「L」の竪書きを残す。凹面の布目は3cmあたり27本～30本。84は凸面の叩きが斜めになり、縄の単位は細かい。85は凸面に編み物状の叩き、凹面には青海波文が残る。いずれも色調は青灰色～赤褐色、焼成は良好である。

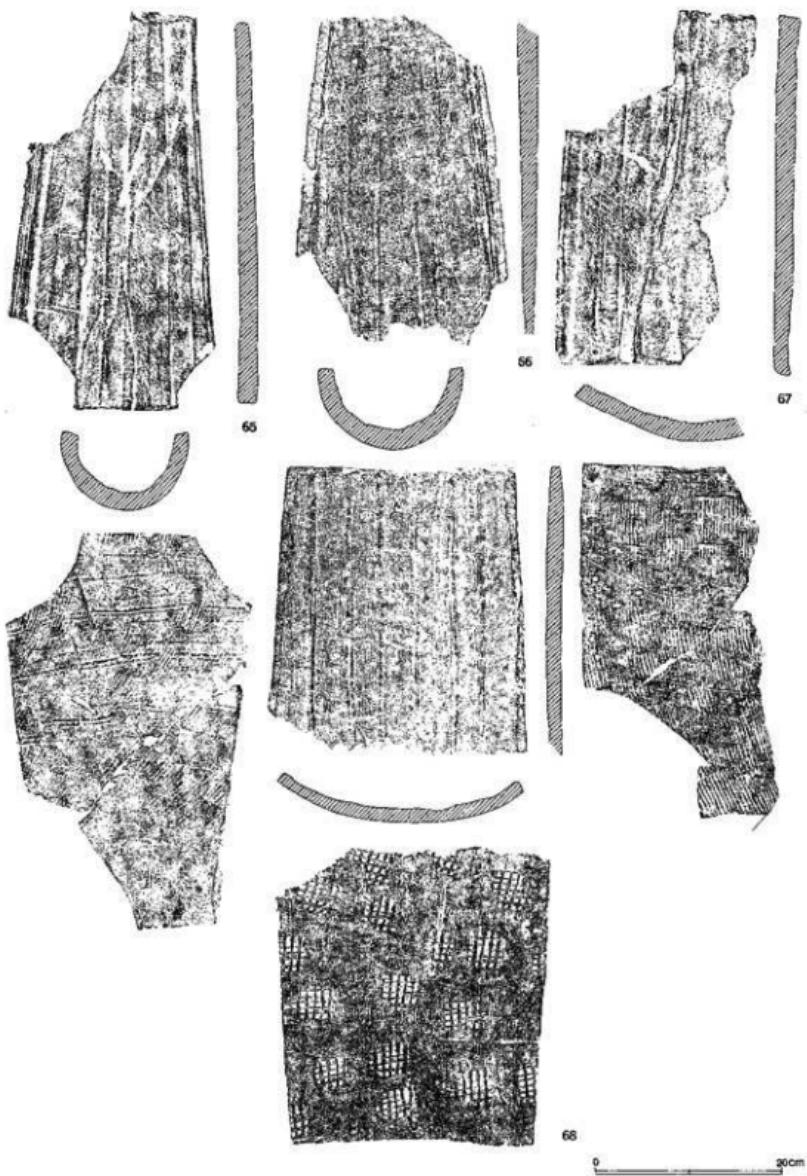
第4類

73は凸面は細い条線による平行叩き、凹面は3cmあたり28本の布目痕が残る。色調は淡青灰色、焼成は良好である。79は凸、凹面とも糸切りの痕跡を残す。凹は3cmあたり25本の布目痕が残る。凸面はヘラによって全面が磨り消される。桶巻造り。色調は淡青灰色、焼成は良好である。

第5類

86、87は凸面に文字を残す平瓦。86は竪書きによるもので凹面は布目痕が一部縦方向のナデによって磨り消される。色調は暗青灰色、焼成は良好である。87は「国」の刻印があり、他は無文である。凹面は3cmあたり16本の布目痕が残る。色調は青灰色、焼成は良好である。

年代



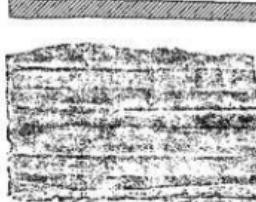
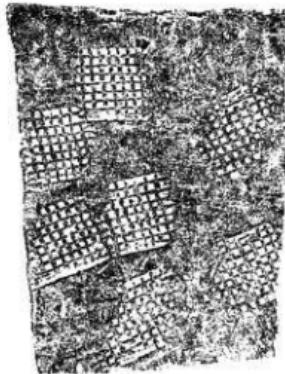
第13図 勝呂庵寺(12)



69



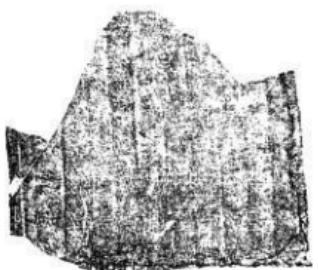
70



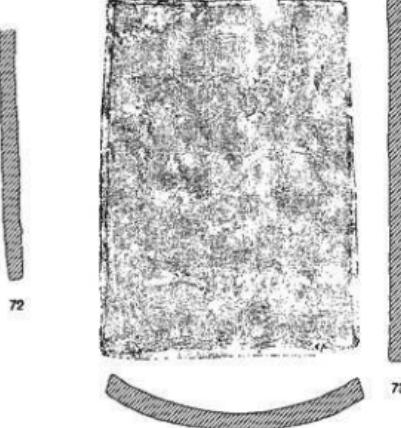
71

0 20cm

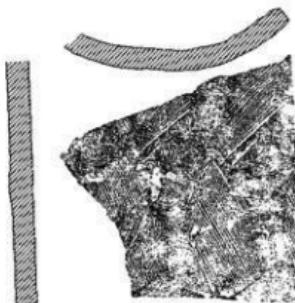
第14図 勝呂庵寺(13)



72



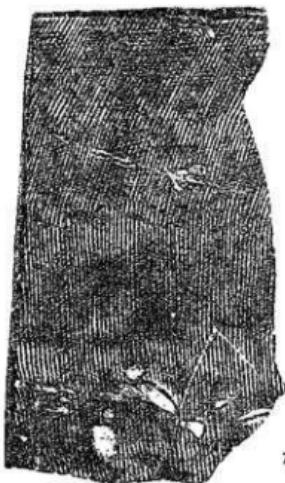
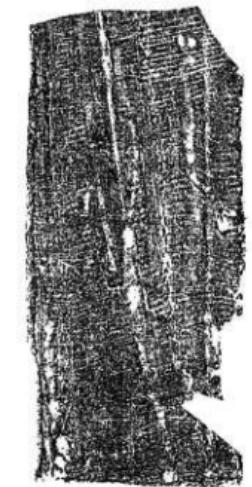
73



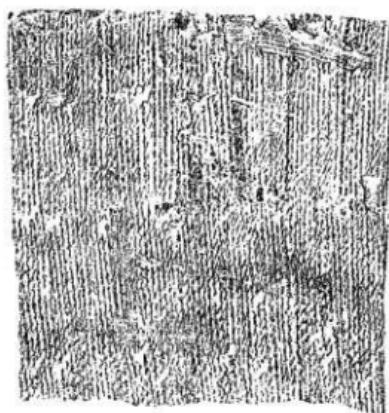
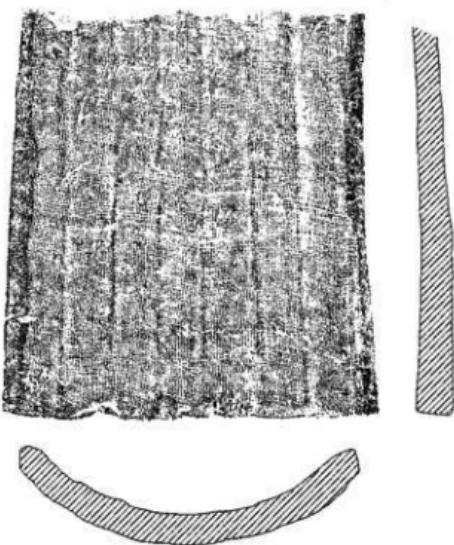
76



第15図 勝呂庵寺(14)



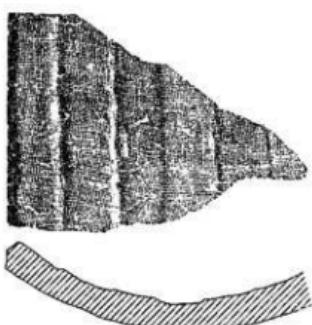
75



76

0 20cm

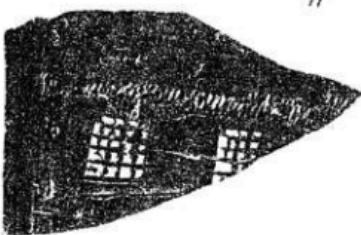
第16図 勝呂庵寺(15)



77



78

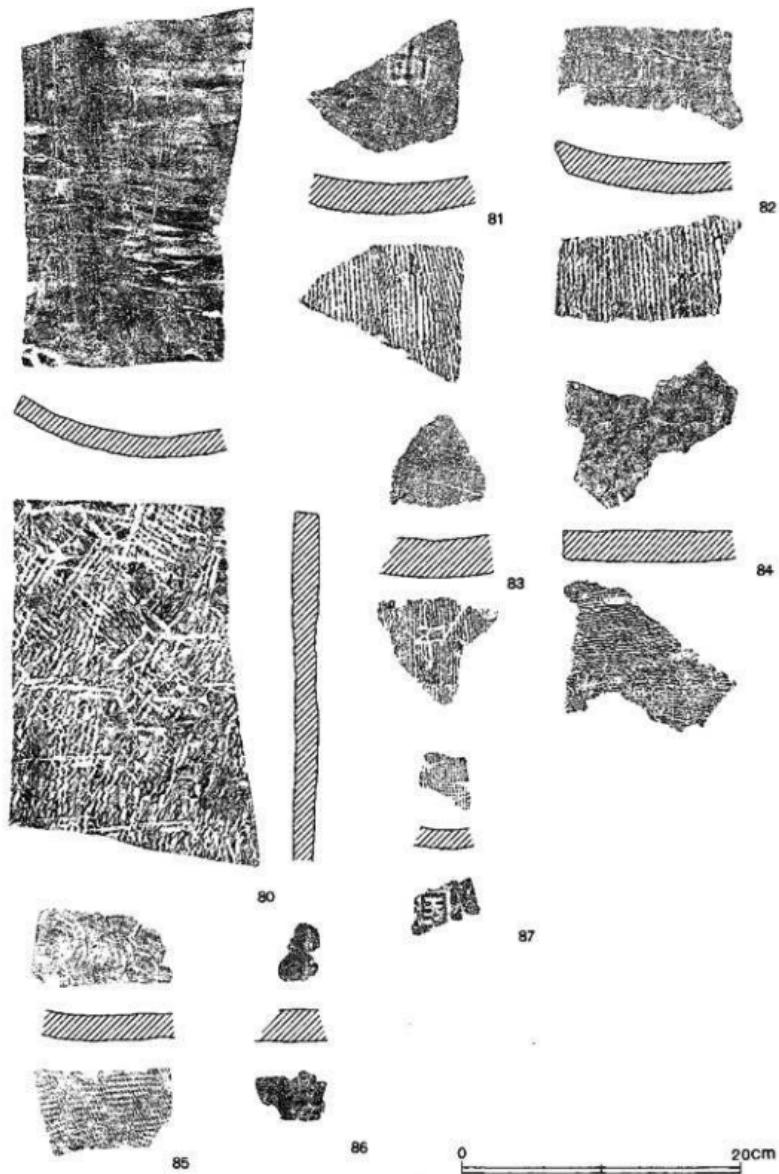


79



0 20cm

第17図 勝呂麻寺(16)



第18図 勝呂庵寺(1)

現在、勝呂庵寺出土の棒状子葉を持つ軒丸瓦は4（3）種類認められ、小用庵寺と同様の単弁12葉軒丸瓦及び単弁8葉軒丸瓦（2種類）を創建期の一群として捉えることができ、7世紀後半期と考えられる。県内では大谷瓦窯などにみらるものと同一型式の瓦で、この種の初現期のものとして捉えることができる。軒平瓦は型挽の三重弧文が古く、軒丸瓦とはほぼ同時期と考えられる。また、正格子の部分的な叩き、平行叩きを磨り消す平瓦や丸瓦も広義において軒丸瓦・軒平瓦とはほぼ同時期と見て差しつかえないであろう。勝呂庵寺の終焉の時期については10世紀前半頃には周辺の住居群が寺域内に入ってくることから26の単弁4葉軒丸瓦、59の軒平瓦等を持って9世紀後半～末頃にはその機能を停止していたものと考える。

大寺庵寺

立地と環境

大寺庵寺は、入間郡日高町大字山根字下大寺に所在する。当地は、標高800m以下の低い山々からなる外秩父山地から平野部に変わる西縁に広く展開する丘陵地帯の一つ、毛呂山丘陵南端部の標高90～100mの緩やかな斜面に位置する。南には宿谷川が東へ蛇行し、赤城と比定できる範囲の東と西に深い谷が存在し、寺域との比高差は約10mをはかる。

範囲確認調査は昭和56年度から昭和58年度にわたって行った。第1次調査では東西3間（6.9m）×南北3間（7.8m）のやや東西に長い礎石を伴なう建物跡と、東西4間（10.2m）×南北5間（12.5m）の礎石を伴う建物跡を確認した。第2次調査では雨だれ石を並べた建物跡を確認したが、開発に伴い削平された地域に係るため残念ながら建物の規模は不明であった。検出した石列の長さは東西6m、南北6mで石列の建物側の一部分に、土留めのために石を縱に配置している。（中平薰1982、1984）

昭和60年度に、寺域内に在る牛舎の一部に排水溝を掘ったところ、鬼瓦の破片が出土したと連絡を受ける。そのため、緊急に調査を実施した。そこで、長軸1.8m、短軸1.45mの小砾が、梢円形に集中する遺構を検出した。小砾の下には礎石と思われる大形の石を確認したが、造構の確認にとどめたため、詳細は不明である。（中平薰1985）

寺域は毛呂山町にもかかり、昭和59年度に毛呂山町教育委員会で、確認調査を実施した。この調査で、チャート質の大きな石を長方形に配して区画し、その内側に礎を敷きつめた方形区画配石集疊造構を検出した。規模は、東西約7.7m×南北4.7mをはかる。その遺構をとり囲むように、東西約8.4m×南北約9.3m（推定）の石列が存在する。石列遺構に伴うものは、多量の瓦と鉄製造物である。このことから、伽藍を構成する建物の1つと考えられている。方形区画配石集疊造構からは、15世紀半ばの板石塔姿を確認しており、中世の遺構と思われる。（村木功1985）

以上を総合すると、建物跡5棟（日高町で確認の集石遺構も含める）、中世の遺構を1基確認している。

寺院跡の周辺には宿谷川対岸の丘陵の北斜面に奈良・平安時代の遺跡が2ヶ所確認されているが、調査は一度も行なわれていないため詳細は不明である。当庵寺とは密接な関係がありそうである。また、当庵寺を考える上で参考となる重要な遺跡として、南西約2kmに高岡庵寺・高岡窯跡群が存

在する。さらに、南南東約2.5kmに高麗神社と聖天院が位置する。

当廃寺の創建年代は、表掲資料の複弁蓮華文8~9葉瓦が平城宮出土軒丸瓦6225型式に酷似することから、8世紀前半と考えられている。調査で出土している単弁4葉の軒丸瓦は9世紀末と捉えている。(藤原高志1982)

出土遺物(第19~22回)

軒丸瓦

第1類

1は複弁8葉蓮華文で、弁は細い凸線で、間弁はY字形の凸線で表現されている。外区は内傾し、線鋸歯文を施す。胎土は砂粒を含み、色調は灰褐色、焼成は不良である。

第2類

2~22は単弁4葉蓮華文で、間弁の一か所が不明瞭である。内区と中房は凹線で区画され、間弁の不明瞭な部分には凹線内に范キズが認められる。中房の蓮子は1+4で、外側の4個は間弁の位置に対応している。丸瓦との接合は高岡技法によるため、外区は上半分だけとなり、丸瓦部分の無い破片は垂木先瓦の様に見えてしまう。瓦当裏面はいずれもナデられている。6・7の丸瓦凸面には僅かに縄叩き痕が残り、凹面は布目痕となる。胎土は2~4・8・11~13はやや量が多い。5~7・9・10・14~16・19・21は砂粒を含み、7はやや量が多い。2・5・6・10・16~18・21は白色粒子、3・17・18は黒色粒子を含む。色調は褐色あるいは黒色気味になるものもあるが、灰色系が3~5・8・9・11~16・19~22、暗褐色が6・7・10・17・18・2は明褐色である。焼成は10・18・21がやや不良の他は良好である。

第3類

23は単弁10葉蓮華文と考えられるが、弁数が増える可能性もある。外区が無く、丸瓦との接合は高岡技法と考えられる。胎土は砂粒を含み、器面は粗い。色調は灰褐色を呈する。焼成は良好。

第4類

24は単弁6葉蓮華文と考えられるが、全体が不明である。蓮弁は管状の稍円形の盛り上りで表現されている。胎土は含有物少なく、色調は明褐色を呈し、焼成は不良である。

軒平瓦

第1類

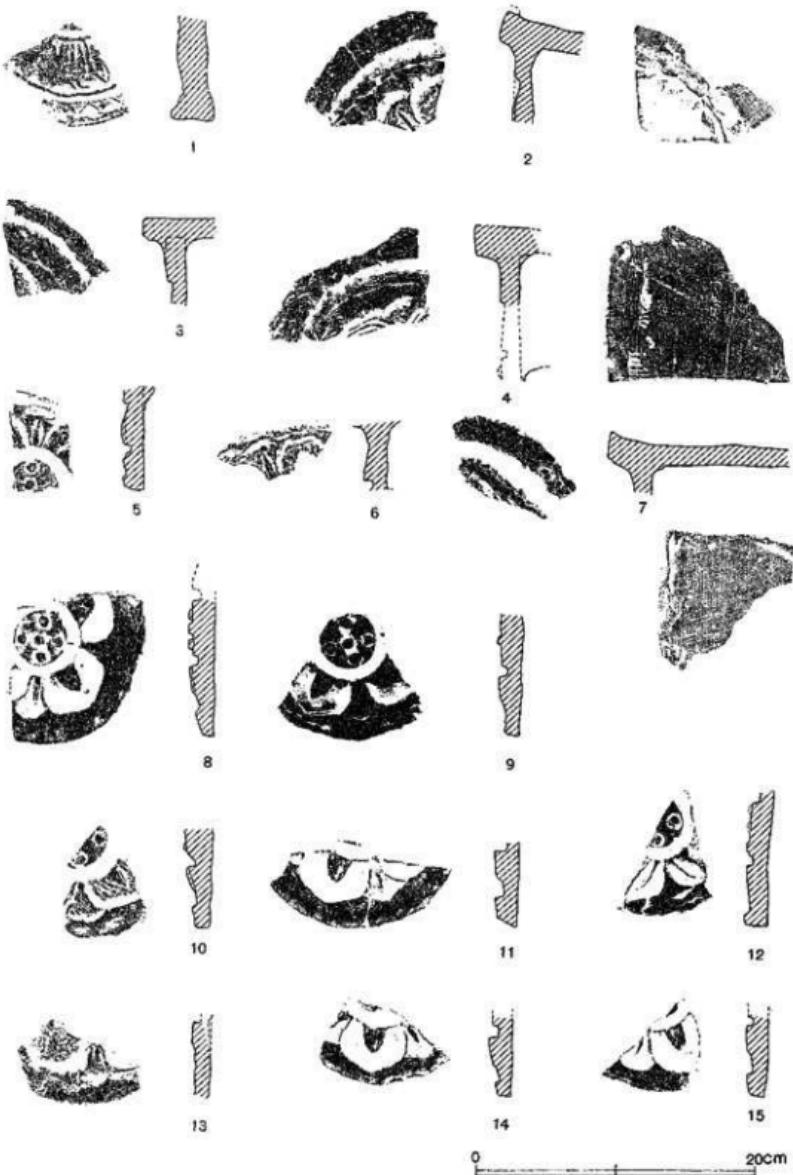
25は丸型によるX字の文様で、凸面は縄叩きを施し、凹面には布目痕(1cmあたり8本)を残す。段類で、段の接合部分は叩きの痕を横方向に指でナデ消している。胎土は砂粒・小礫・白色粒を含み、色調は淡褐色を呈する。焼成は良好である。

第2類

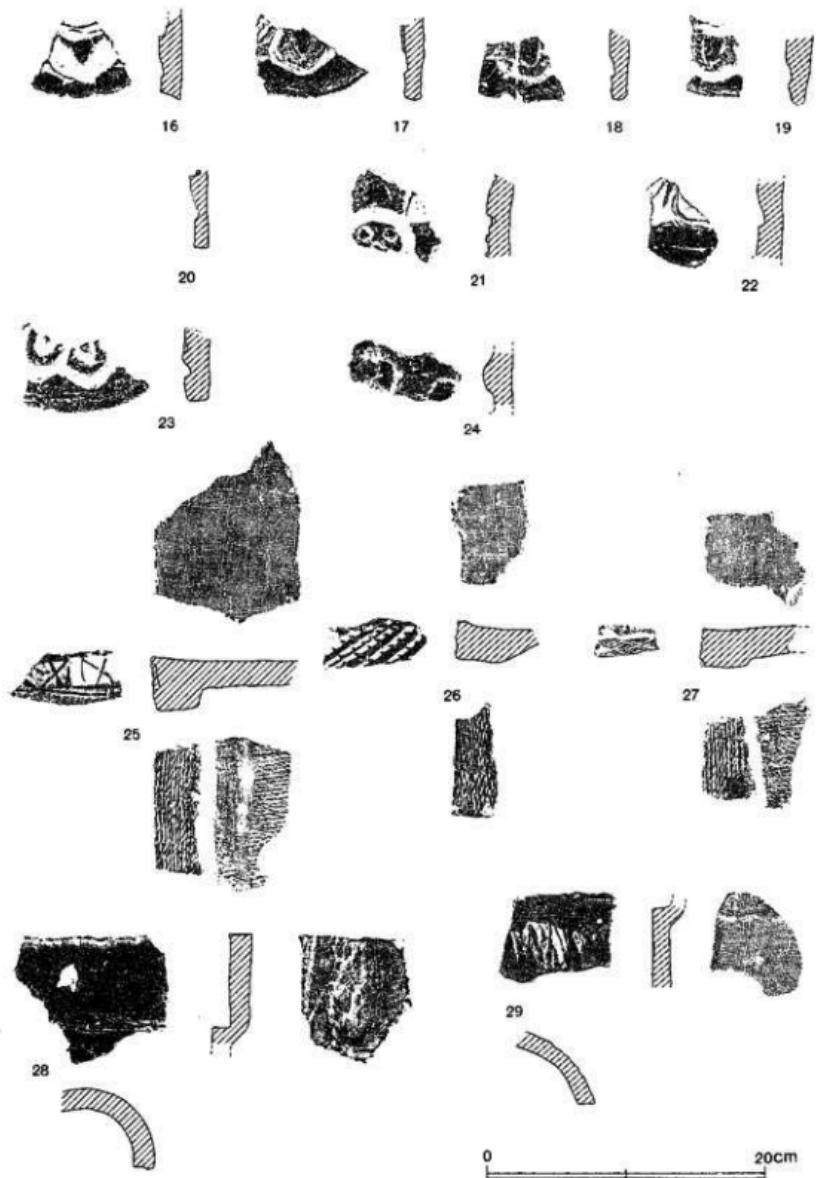
26は斜格子の文様で、凸面は縄叩きを施し、凹面には布目痕(縦8本、横6本)を残す。曲線類であるが、格子目が粗く、段類のタイプもある。胎土は砂粒を含み、色調は淡褐色を呈する。焼成は良好である。

第3類

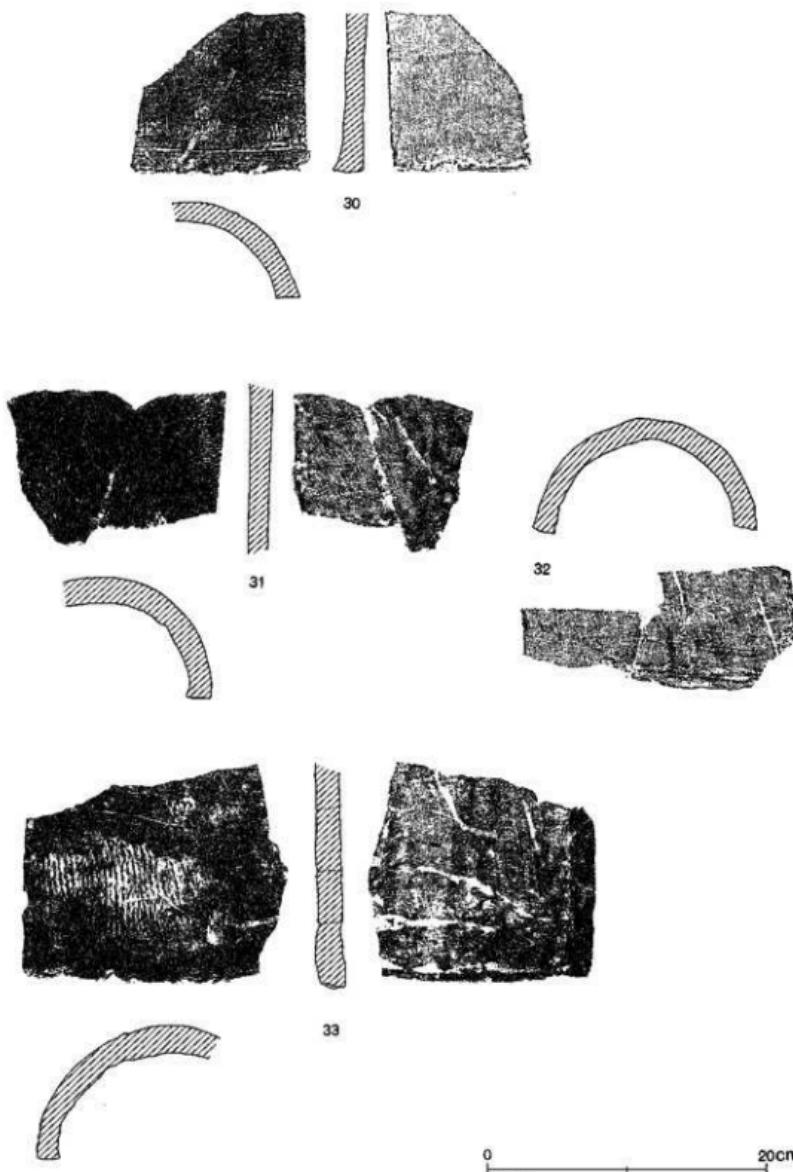
27は線刻によるX字の文様で、凸面には縄叩きを施し、凹面には布目痕(7本)を残す。低い段



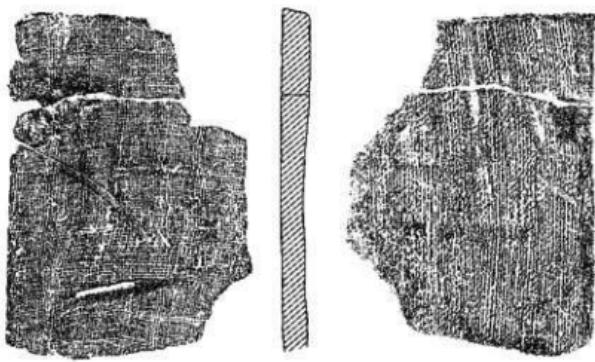
第19図 大寺庵寺(1)



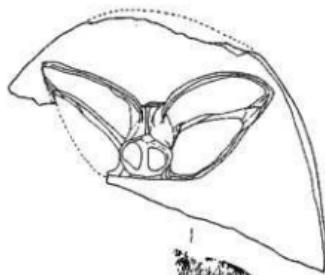
第20図 大寺庵寺(2)



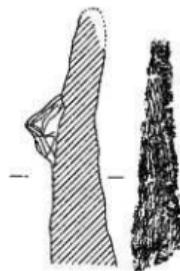
第21図 大寺鹿寺(3)



34



35



36

0 20cm

第22図 大寺磨寺(4)

頭で、接合部分との境を指で横にナデている。胎土は砂粒・小礫を含み、色調は暗褐色を呈する。焼成は良好である。

丸瓦

28・29は玉縁部分が残るが、30~33は玉縁付になるか不明。凸面は28が横方向のナデ、30~33が縄叩きの後、横方向のヘラケズリを施す。28・29の側面には分割痕が残るが、他はヘラケズリが施されている。凹面は布目痕（28・29は7本、32は8本、30は9本、31は縦9本の横8本、33は縦8本の横11本）を残す。31~33には粘土紐の接合部分が認められる。胎土は29・31・32が砂粒、28・30・33が砂粒と小礫、31~33が白色粒を含む。色調は28・33が明灰色、30~32が暗灰褐色、29が灰褐色を呈する。焼成は良好である。

平瓦

34の凸面は縄叩きを施し、凹面は布目痕（6本）を残す。凹面は部分的にナデられている。胎土は砂粒・白色粒を含み、色調は褐色を呈する。焼成は良好である。

鬼瓦

35は表面・側面に縄叩きが施され、鼻より下は部分的にナデられている。肩・口は縄叩きの後に作られ、鼻は貼り付け削られている。胎土は砂粒を含み、色調は明灰色を呈する。36は確から口端の部分で、腰の周囲は沈線を巡らしている。胎土は砂粒を含み、色調は暗褐色を呈する。焼成は良好である。

年代

軒丸瓦第1類は平城宮出土軒丸瓦6225A型式に類似していることから8世紀第2四半期に位置づけられている（藤原1982）。軒丸瓦第2・3類は高岡技法を用いているが、高岡廃寺軒丸瓦第1類との前後関係を述べる資料に乏しい。第4類の様な齒状の弁は国分寺例にみられるが、積極的な年代根拠がない。格子やX線の瓦当文様を持つ軒丸瓦は行田市旧盛徳寺や国分寺に類例があり9世紀第3四半期の年代が与えられている（坂野1982）。鬼瓦は、36が8世紀後半、35が9世紀後半の年代が与えられている（中平1985）。また出土瓦から中世まで存続していたことがわかる。

高岡廃寺

立地と概要

高岡廃寺は、入間郡日高町大字清流字ケシ坊主に所在する。寺院跡は、外秩父山地が南北企丘陵を経て関東平野に移行する場所、すなわち外秩父山地の東端に位置する。外秩父山地はその東端でいくつもの河川によって開拓されており、複雑に入りこんでいる。当寺の立地する丘陵は、東に延びる丘陵からさらに小さく南に突き出す小丘陵の南斜面に位置しており、廃寺の標高160mから170mである。この小丘陵の南には高麗川の支流である清流谷川が流れ、幅50mほどの谷は水田として利用されている。

当廃寺は、昭和51年にゴルフ場の建設に伴い発掘調査され、現在は造成されて遺構は残っていない。この調査により建物跡4棟、方形ピット遺構、石組遺構、特殊遺構、土壙が確認されている。第1建物は、調査区の最も標高の高いほぼ平坦なテラスに位置し、規模は東西17m、南北18mで、

礎石や溝、階段と思われる石組列などが確認され、この建物跡の周辺からは塑像が出土している。第2建物は、第1建物の南面に、緩やかに傾斜する岩盤を整形したテラスに位置し、石列をコの字状に配している。石列は南北6.4m、東西4.1mで、中央部には2m×2mの範囲で礫が敷かれ、ピット及び礎石と考えられる石も確認している。第3建物は、南北2間（3.6m～4.7m）×東西3間（5.4m×6.2m）の規模で、最初に建られてから3回の改築があったことが確認されている。第4建物は、東西2間（約4m）×南北3間（約5m）の掘立柱跡を伴う建物跡である。方形ピット遺構は岩盤を掘り込んでつくられており、規模は60cm×60cmで、不正方形を呈する。石組遺構の底面は岩盤まで及んでいる。規模は南北120cm×東西90cmで、楕円形を呈する。側壁に礫を組み込み、天井の石を支えている。特殊遺構は北、西壁を岩盤に掘り込み、北壁中央部に楕円形の掘り込みを有する。この遺構の周辺と覆土に焼土を有していることからカマドと推定している。

調査で出土した遺物から創建年代は8世紀中葉、終末は11世紀初頭と考えられている。（高橋一夫1978）

寺院跡の周辺の高麗川左岸の河岸段丘に、平安時代の瓦窯跡である高岡窯跡と西欠遺跡（窯跡）が存在する。さらに、東約1.1kmには高麗神社が、南東約1kmには聖天院が位置する。

出土遺物（第23図～第34図）

軒丸瓦

第1類

1～5は単弁6葉蓮草文で、弁は周辺が僅かに高くなっている。中房は隆帯で区画され、中央に1個の蓮子を配する。周縁は上半分のみで、丸瓦の端部を利用している（高岡技法）。瓦当表面の丸瓦との接合部分はナデているため弁先端が消えてしまう例がある。丸瓦部凸面は繩印き痕をケズリ消し、凹面は布目痕を残す。胎土は砂粒・礫を多く含み、色調は淡褐色を呈し、焼成時にヒビ割れが入る例が多い。

第2類

6～9は複弁で、弁数は不明である。裏面には布目痕（1cmあたり6本）が残っている。胎土は砂粒・礫を多く含み、色調は青灰色あるいは褐色を呈し、焼成はやや不良である。

軒平瓦

第1類

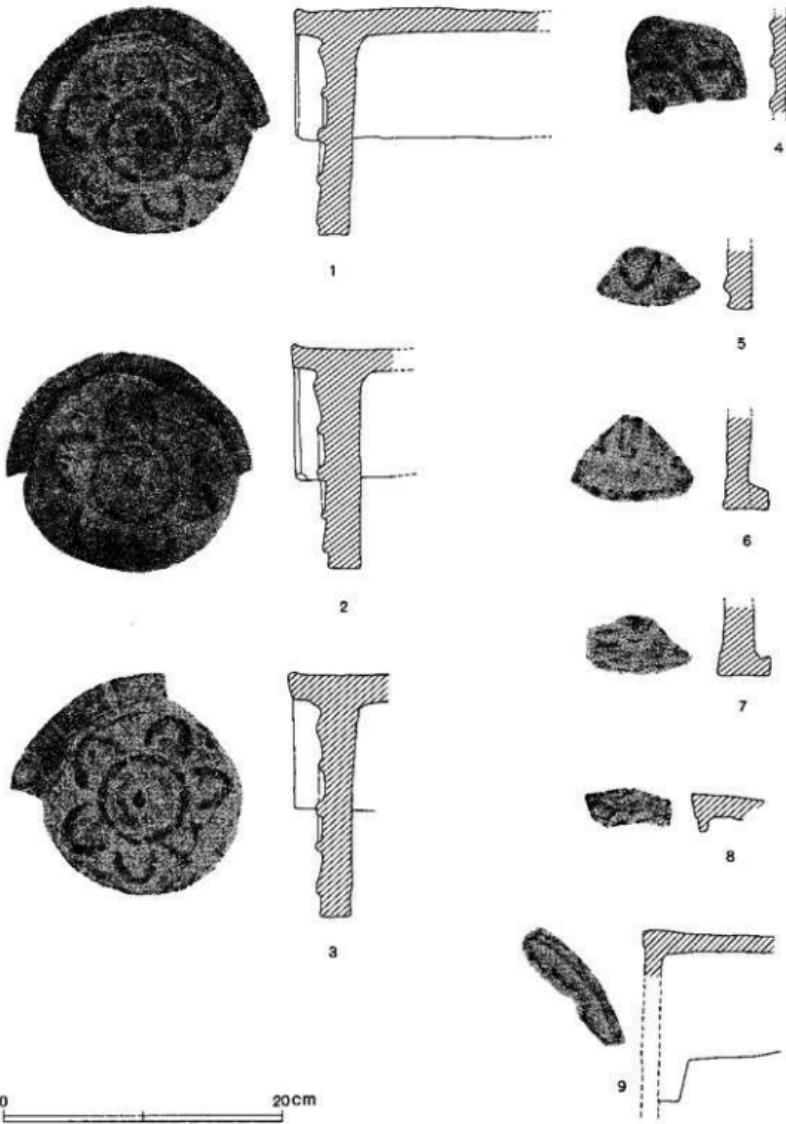
10～12は偏行唐草文で、珠文を配し、急角度の直線彫を持つ。平瓦の凸面はヘラケズリされ、凹面は布目痕（6本）を残す。胎土は砂粒・白色粒を含み、焼成はやや不良。

第2類

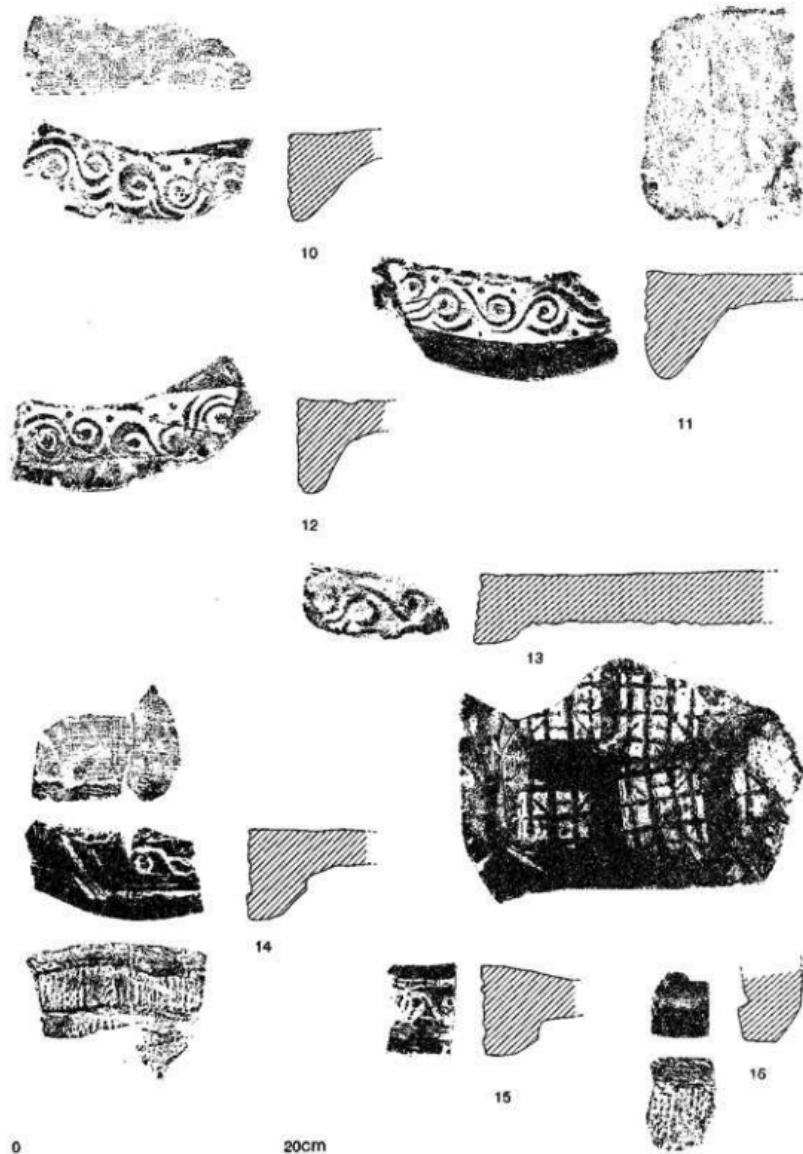
13は第1類と同様であるが、彫は段彫で、平瓦の凸面は変形格子印きを部分的に間隔をあけて施す。凹面は布目痕を残し、側端縁は第1類と同様に曲取りされている。胎土等第1類と同じ。焼成は良好である。

第3類

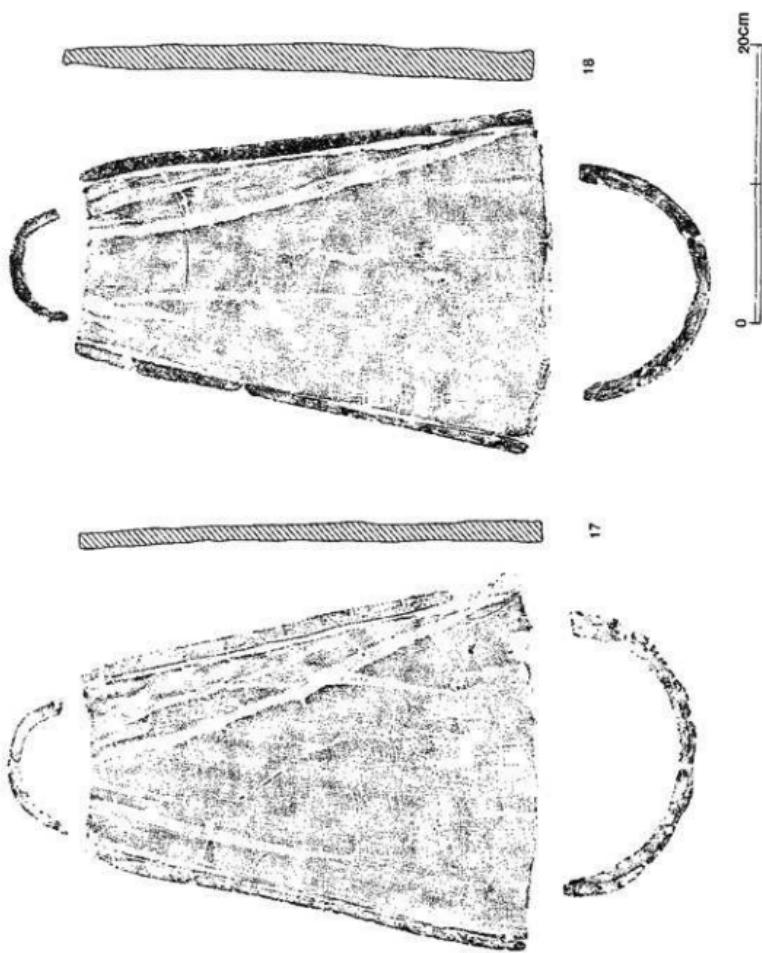
14～16は陰刻された唐草文で、彫は段彫で、平瓦の凸面部分は繩印きを施す。凹面は布目痕（5～7本）を残す。瓦当面側の凹凸面には繩印きを施した後に横方向のヘラケズリを行っている。胎



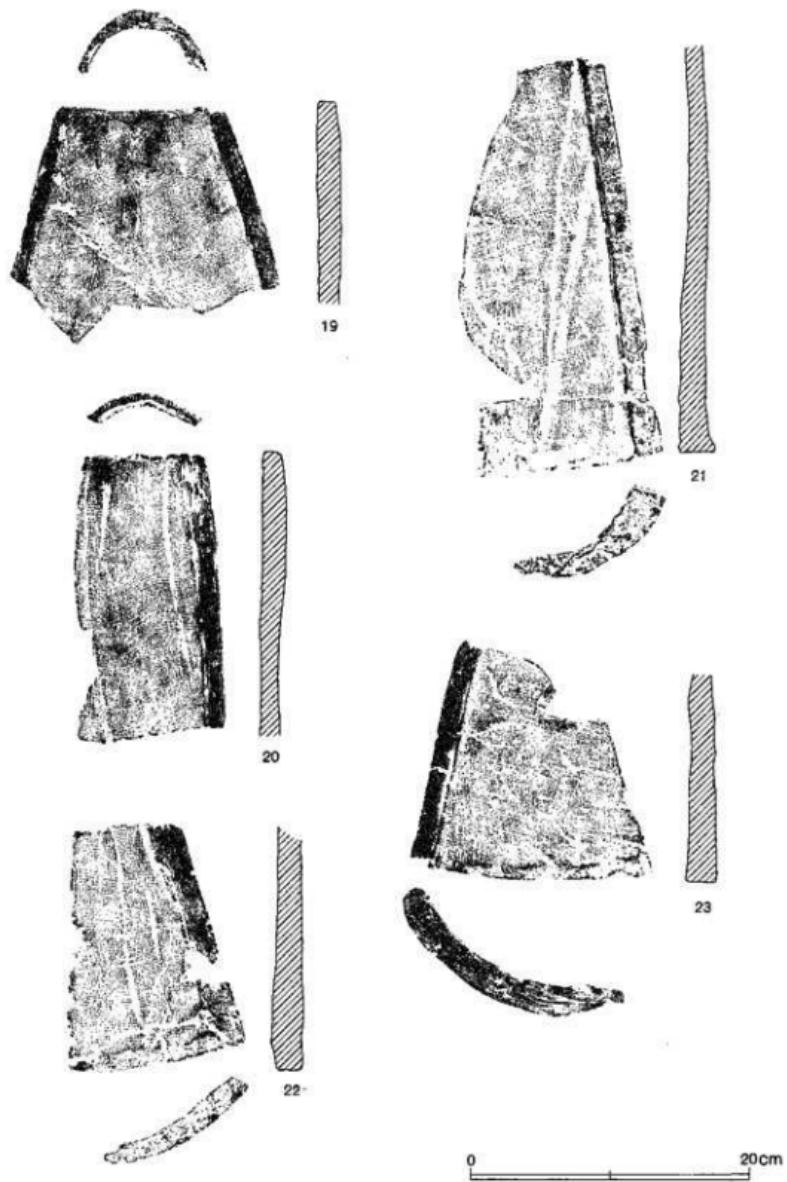
第23図 高岡廃寺(1)



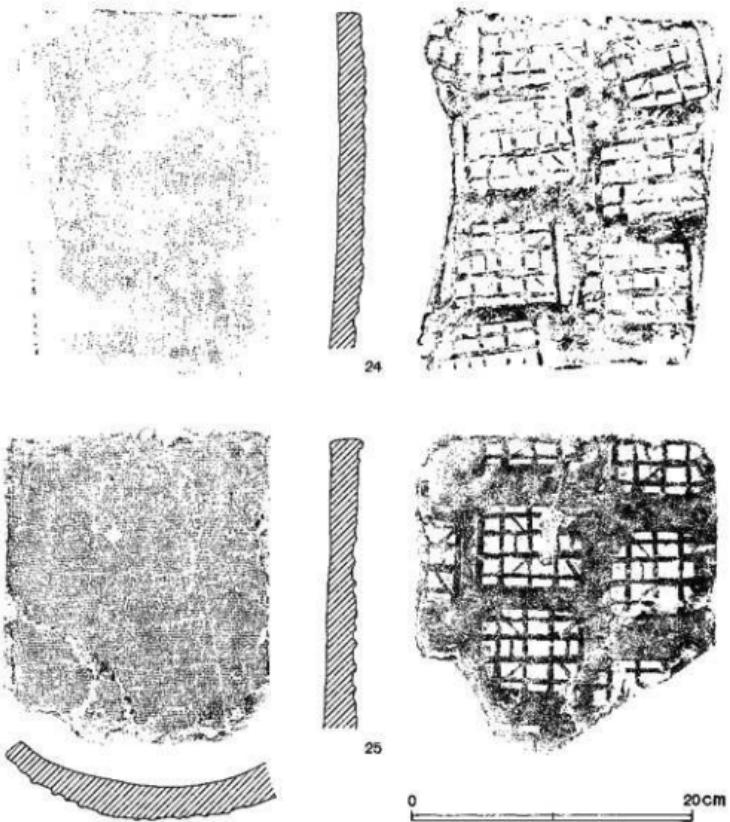
第24図 高岡廃寺(2)



第25図 高岡廃寺(3)



第26図 高岡廃寺(4)

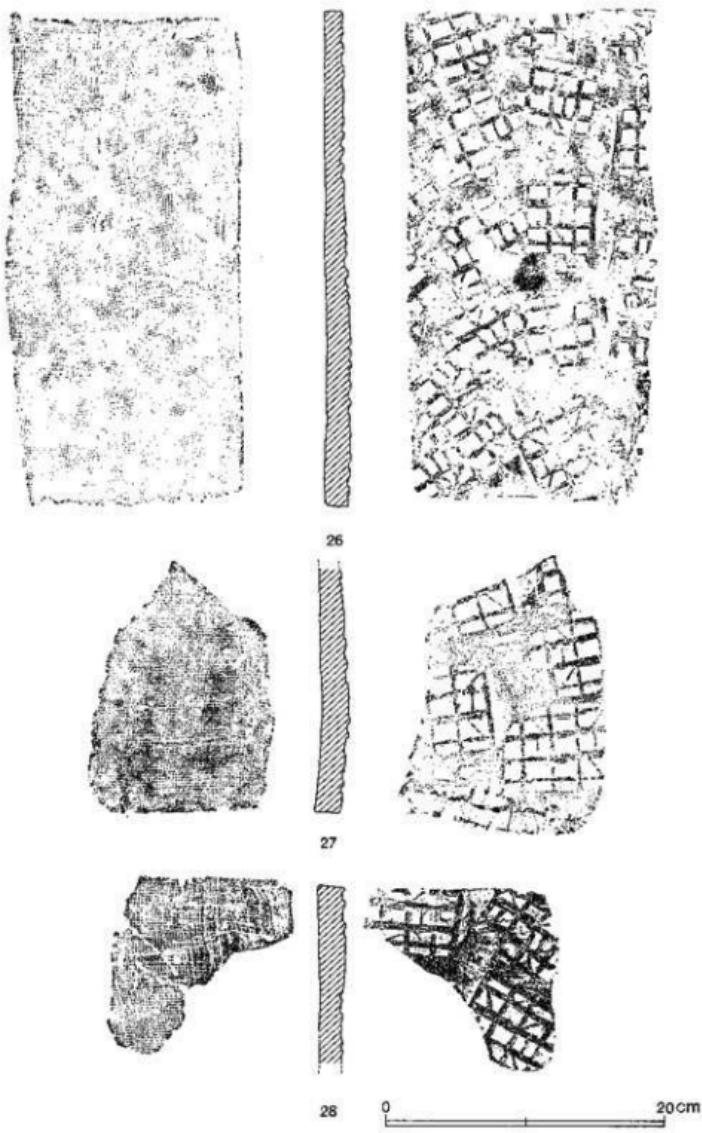


第27図 高岡廃寺(5)

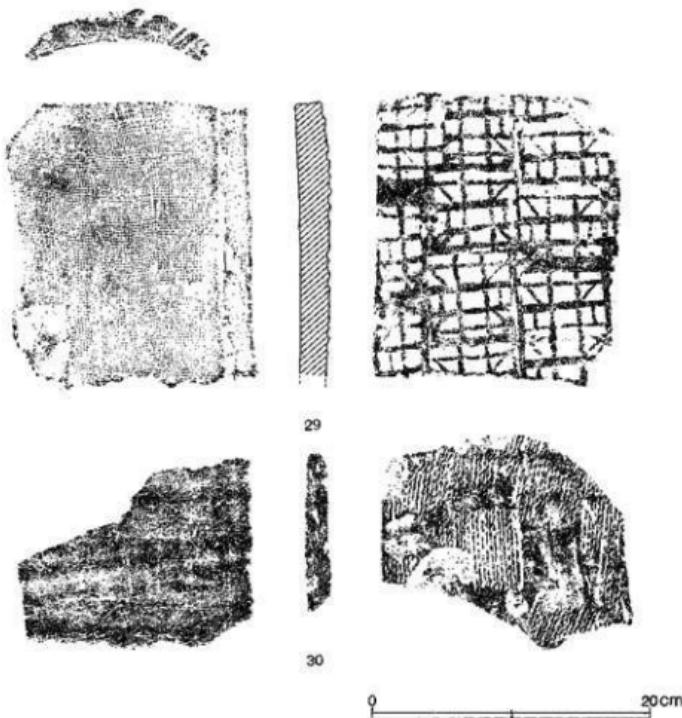
~7本)を残す。瓦当面側の凹凸面には縄叩きを施した後に横方向のヘラケズリを行っている。胎土には小豆大のチャートが僅かに入り、色調は青灰色である。焼成は良好である。

丸瓦

17~23は大きさは異なるが製作方法は同一と考えられる。凸面は縄叩きを施した後ヘラケズリを



第28図 高岡院寺(6)



第29図 高岡廃寺(7)

ほぼ全面に施す。凹面は布目痕（5～6本）を残す。胎土は砂粒・繊・白色粒を多く含み、色調は淡褐色を呈する焼成は良好である。

第1類

平瓦

24～29は凸面に縦方向のナデの後、変形格子叩きを施す。凹面は布目痕（5～6本）を残す。胎土は小礫を微量、・白色粒を多く、また小豆大のチャートを含むものがある。色調は25が灰色で他は淡褐色を呈する例が多く、灰色・黄灰色となる部分もある。焼成は25が良好の他不良が多い。

第2類

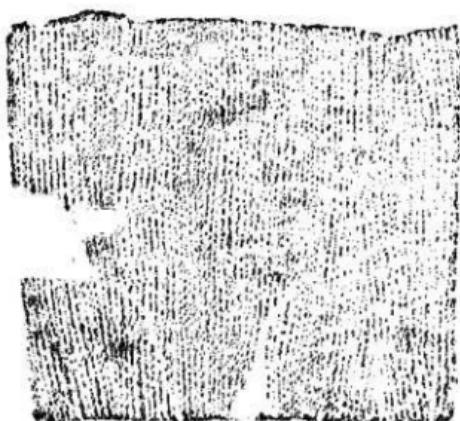
30～37は凸面に繩叩きを施し、凹面は布目痕を残し、側端縁を僅かに面取りを行う。胎土は丸瓦と同様で、色調は青灰色が多いが、褐色・灰黑色、黄褐色の製品もある。焼成はやや不良が多い。

第3類

38～41は凸面の繩叩き痕と凹面の布目痕（12本）が細かい。凹面は四隅に面取りを行う。凸面の



31

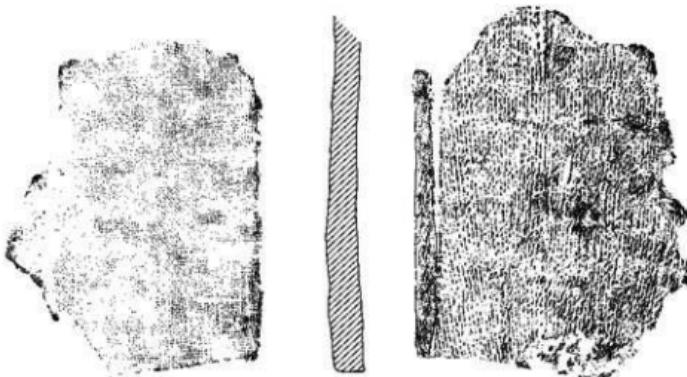
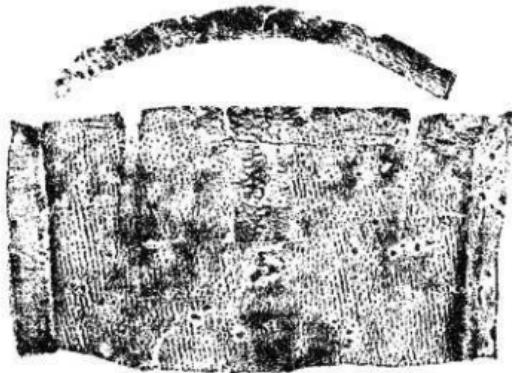


0 20cm

第30図 高岡庵寺(8)



32

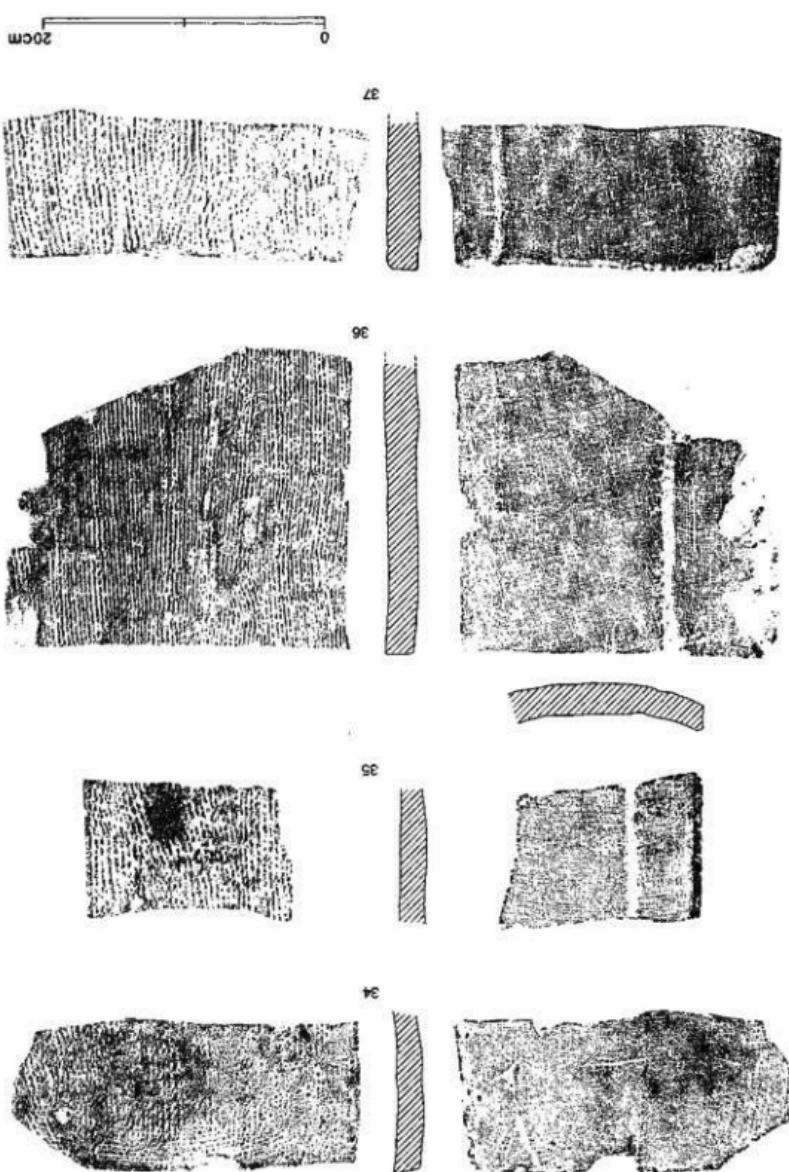


33

0 20cm

第31図 高岡廃寺(9)

第32图 莱昂斯寺(10)

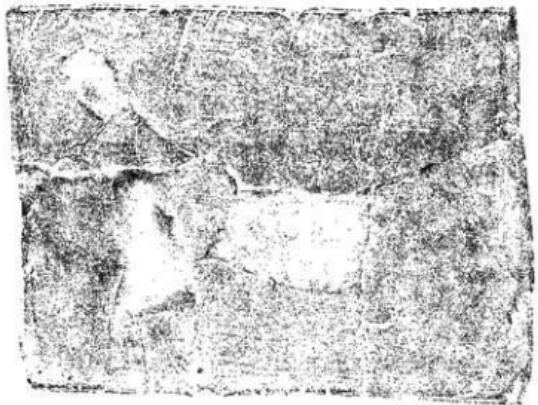




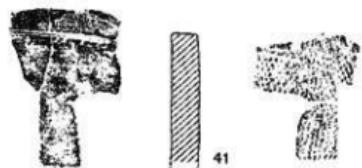
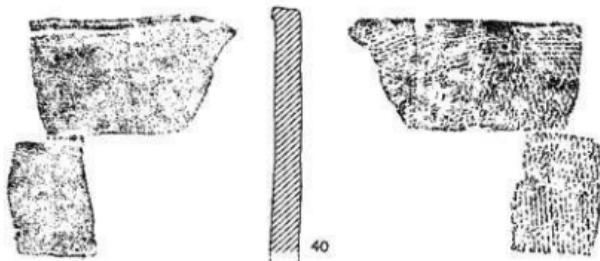
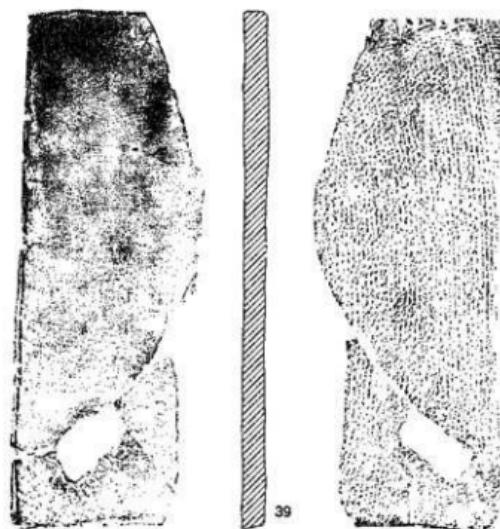
20cm
0



38



第33圖 高麗廟寺(1)



0 20cm

第34図 高岡廃寺(1)

縄叩きは上下端側で方向を変え、さらにヘラケズリを行う。またヘラ描きが認められ、報告者によると、「大」の字の細いヘラ描きが2片あり、1片にはその右に「八□□文」とあり、さらに「大」字の下にも2行の数文字がなでて消され「文」らしき文字が残っている。胎土粒子は細かく、色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

平瓦の出土比率は第1類が59.5%、第2類が40%、第3類が0.5%である。

年代

軒丸瓦第1類は乗木瓦に丸瓦を付けた様な感じで、大寺廃寺に同技法を認めるが、他遺跡での出土を知らない。軒平瓦1類は同范瓦が武藏国分寺と入間市東金子窯跡群No.20地点（有吉1986）、入間市柿の木窯（宇野1953）、国分寺市恋ヶ窪廃寺（有吉1986）で出土している。同第2類は国分寺僧寺に同范がある。変形格子叩きは類例を見ない。これらの瓦は国分寺再建の9世紀中葉以降の製品と考えられるが、軒丸瓦第2類は複弁である。複弁瓦は国分寺創建以降の時期とは考えにくい。高橋一氏は寺院の創建を出土土器から、「8世紀頃から造営を開始し、8世紀後半に完成し、9世紀中頃に瓦葺きの建物が建てられた」としているが、複弁瓦の年代的位置づけが問題として残る。

女影廃寺（若宮遺跡）

立地と環境

女影廃寺は、人支郡日高町大字女影字若宮、字宿東、字八郎間に所在すると考えられている。廃寺は、町の中央を東へ蛇行して流れる下小畔川と小畔川に狭まれた東西に長い台地の、標高62m～65mの付近に位置している。

当廃寺は、昭和6年に埼玉県史で、昭和8年にも清水嘉作氏により高萩村三十三間堂の古瓦として、埼玉史談にも報告されている。近年は、周辺も住宅建設などで開発が進んでおり、小規模な面積で、数次にわたり発掘調査を実施している。まず、昭和55年度の調査では、8世紀中葉から9世紀前半と考えられている住居址6軒と東西2間（3.9m）×南北3間（6.2m）の建物跡1棟を確認している。昭和57年度は、第2次、第3次、と調査を行った。第2次調査では、南北に走る溝1条を検出した。遺物は平瓦、丸瓦、単弁6葉蓮華文軒丸瓦、横骨文字瓦、瓦塔などが出土している。第3次調査は、南東から北西に走る溝1条と、規模は不明であるが非常に大型の土壙を確認した。土壙内からは、多量の瓦、須恵器が出土した。なかでも、軒丸軒、軒平瓦を数多く検出していることと、底部に「寺」と書かれた須恵器は、この廃寺に関係するものとして注目できよう。また溝の覆土上からは「高」と陽刻の押印を施した瓦が出土している。遺物の年代は8世紀中葉から9世紀前半とバラエティーに富む。昭和62年度の調査では8世紀後半と考えられる住居址が1軒確認されている。しかし、寺域については、瓦が広範囲に分布するために、限定することは難しい。

当廃寺の周辺の遺跡は、谷津を狭んだ西の丘陵の平坦部に、上輔遺跡があり、一度調査を行い、8世紀後半と考えられる住居址が1軒確認されている。廃寺とは直線距離で、約400mしか離れておらず、密接な関係のある集落と考えられる。

また、北方1kmに位置する道光林遺跡では、8世紀前半と考えられる住居址が3軒確認されている。高麗郡の設置及び当廃寺の創建期にも当てはまるため、廃寺との関係も考慮しなければならぬ。

いであろう。

その他にも、奈良、平安時代の遺跡が数多く分布し、瓦が表採できる遺跡も存在する。北東約1.5kmに位置する新宿遺跡もこんな集落の一つと考えられる。

出土遺物（第35—46図）

軒丸瓦

第1類

5は複弁8葉蓮華文で、周縁は段を持ち、内側の部分には面違い鋸歯文を巡らす。中房は大きく、1+8の連子を配する。側面は平行叩きが施されている。瓦が所在不明のため拓本のみ。

第2類

1~4・6・7は同形の単弁6葉蓮華文で、第1類と同様に周縁は外側に低い部分を持つ。弁は梢円形で厚く、間弁は弁を包み込む形に凸線で表現される。弁間の周縁内側には楔形の突起がみられる。瓦当はロクロ上で作られた事が4の裏面にみられる左ロクロ回転のナデで確認されるが、他はナデ消されている。凸面1が瓦当面側1cmを横方向のヘラケズリ、他は縦方向のヘラケズリとヘラナデ、2が同3cmを斜方向のナデ、他は縦方向のヘラケズリ、3が同4cmを横方向のナデ、他は縦方向のヘラケズリ、4が同5cmを横方向のナデ、他は縦方向のヘラケズリ、6が同1cmを横方向のヘラケズリ、他は縦方向のヘラケズリを施す。凹面は4が縦方向に消されている他は布目痕を残す。1cmあたりの布目は1が縦8本の横7本、2と6は6本、3は7本。1の凹面には1が所横方向のナデを、6の凹面にはヘラ状工具による沈線と、側縁に縦方向のナデを施す。1の側端面には分割痕を残す。胎土は1・3・4・6・7が砂粒と白色粒、2が砂粒と小礫を含み、色調は灰色、焼成は良好。

第3類

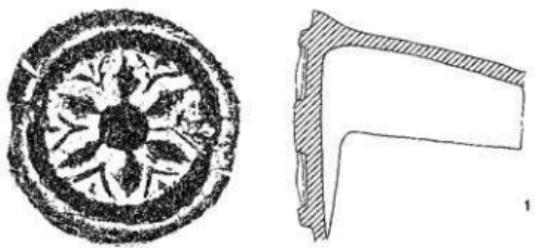
8・9は単弁6葉蓮華文で、第2類に類似するが、間弁がY字形で、弁間の突起が棒状である。瓦当裏面はナデされており、丸瓦部分の瓦当面との接合部分凸面は指を開いて順に押え付けている。凹面は一部ナデされる部分があり、8×6の布目痕を残す。凸面は縦方向のヘラケズリが施される。8の中房には列点状の刺突がある。胎土は砂粒を多く含み、色調は8が褐色、9が暗褐色、焼成は8が不良、9がやや不良。

第4類

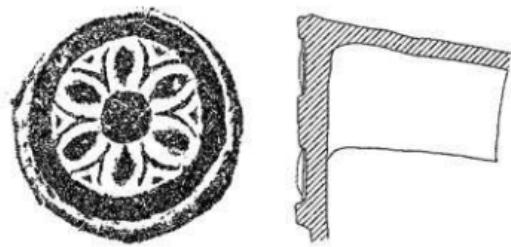
10は単弁6葉蓮華文で、凸線により外区・内区・中房を区画しており、外区には連珠文（24個？）を、中房には1+6の連子を配する。弁は梢円形の高まりの下方に小さな段を持ち、弁の延長線上に連子を配する。間弁は逆三角形で、弁よりやや高くなる。瓦当裏面はナデされている。色調は暗灰色、焼成は良好。

第5類

11は単弁6葉蓮華文で、第4類に類似するが、弁は宝珠形の一段高い部分に梢円形の高まりを持つ。間弁は細身の逆三角形で、弁よりやや高い。外区の連珠は36個と推定される。瓦当裏面は無紋りの布目痕を残し、部分的にナデを施す。裏面側縁にはヘラケズリを行う。胎土は砂粒・白色粒を含み、色調は灰色、焼成はやや不良。



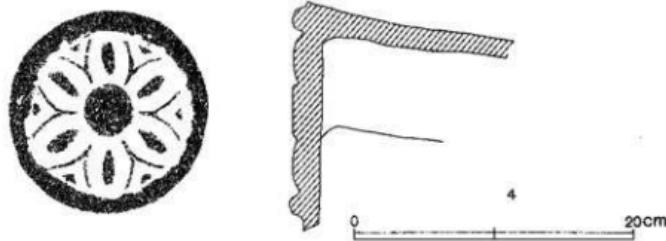
1



2



3



4

20cm

第35図 女影廣寺(1)

第6類

12は単介8葉蓮華文である。拓本のみ。

軒平瓦

第1類

13・14は左から右に流れる扁平唐草文で、唐草文を介して珠文が1個づつ対に配置されている。顎は曲線顎で、凸面部分約3cmを横方向のヘラケズリを、他は縦方向のヘラケズリを行う。側面は縦方向のヘラケズリを行う。凹面は側端縁に面取りを施し、布目は13が7×6本、14が7本であるが、14は陽刻で一辺約1cmの格子叩きが施されている。胎土は13が砂粒・小礫を、14が砂粒・白色粒を含み、色調は13が明黄褐色、14が灰褐色、焼成は13が不良、14が良好。

第2類

15は右端のみ巻き込みが逆方向の唐草文である。範の押し込みが浅く、数回押している。唐草文を介して珠文が1個づつ対に配置されている。顎は曲線顎。凸面は縦方向のヘラケズリの後、瓦当面側3~7cmを横方向のヘラナデ、折断面までをナデが施される。側面は縦方向のヘラケズリを行う。凹面は側端縁に面取りが行われ。胎土は含有物少なく、色調は灰色、焼成は良好。

第3類

16は右から左に流れる扁行唐草文で、主葉の巻き込みの中と脇に子葉を配する。外区との境は界線で区画されるが、外区には文様を施していない。拓本のみ。

第4類

17は唐草が下の界線から上方に蕨手の様にのびる。拓本のみ。

丸瓦

第1類

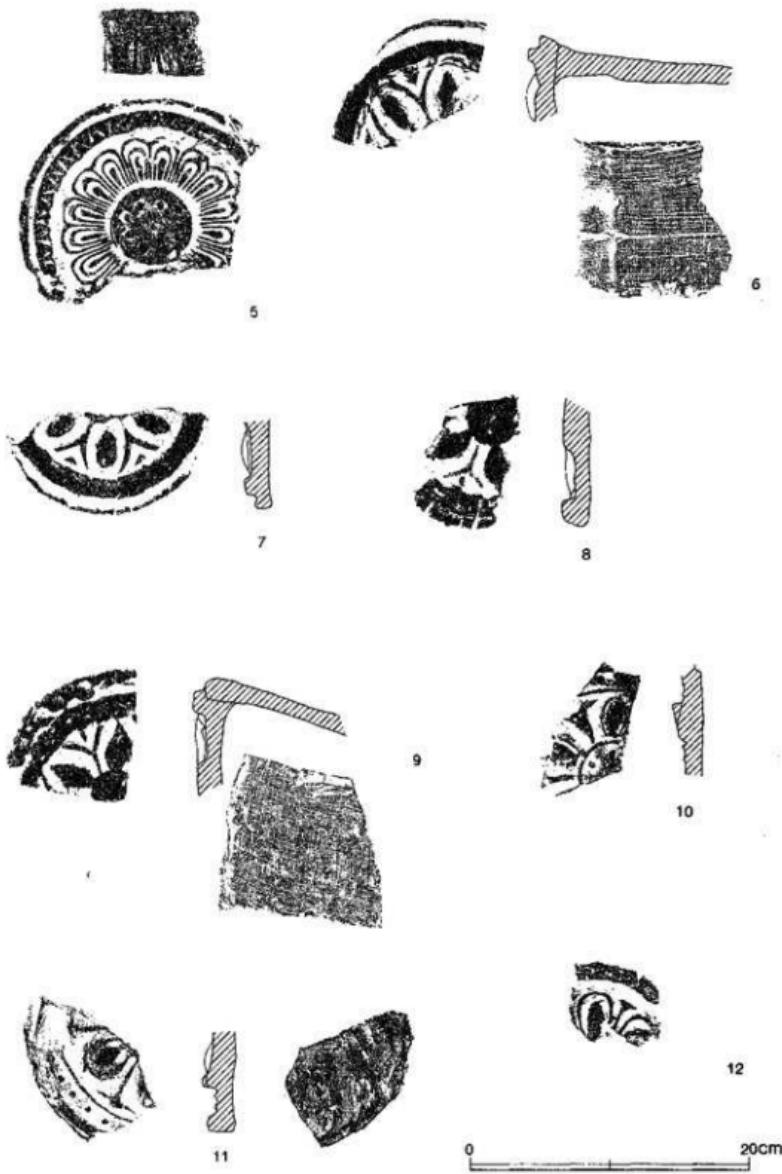
18~21は玉縁付で、いずれも側端面には分割痕を残す。凸面は横方向のヘラケズリによって叩きを消しているが、18~20は平行叩きと推定され、玉縁側は横方向にナデられている。凹面はいずれも布目痕を残す。布目は18・19が7本、20は8×7本、21は7×6本。19~21は糸切り痕を残し、18・21はナデされた部分がある。18と21は布の総合わせ目があり、「Z」型の重ね方である。18は玉縁部分と布が異なる（布目痕6本）。胎土は18・19が砂粒・小礫多く、20は白色粒、21は砂粒・小礫を含む。色調は19が明褐色、他は灰白色、焼成は良好。21は粘土紐の痕跡を残している。

第2類

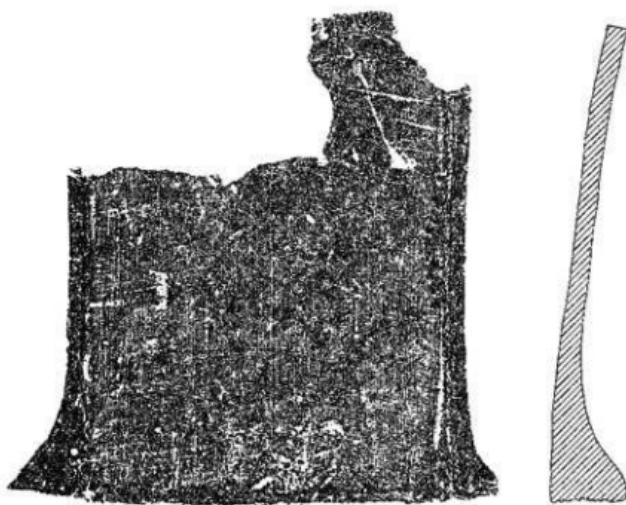
22・23は凸面に格子叩きを施す。22の格子の方がやや大きくなる可能性がある。22には凸面に縦方向のナデがみられる。凹面の布目は7×6本で、22には重ね方「Z」型の総合わせ目がみられる。側面はケズリにより分割痕は不明。胎土は22が砂粒・白色粒多く、23が砂粒を含む。色調は22が黄褐色、23が褐色、焼成は22がやや不良、23が良好。

第3類

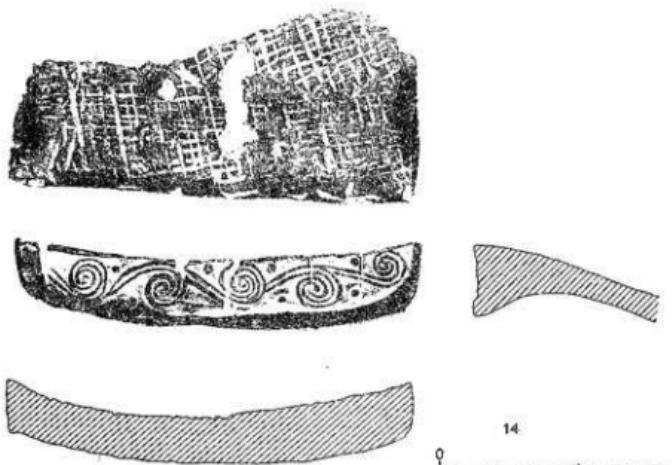
24は凸面に組み合わせた平行叩きを施す。部分的にナデ消されており、広端側は横方向にヘラケズリされる。側端面には分割痕を残すが、狭端方向にヘラケズリされている。凹面には糸切り痕と布目痕を残し、布目は7本。胎土は砂粒を含み、色調は灰白色、焼成は良好。



第36図 女影庵寺(2)



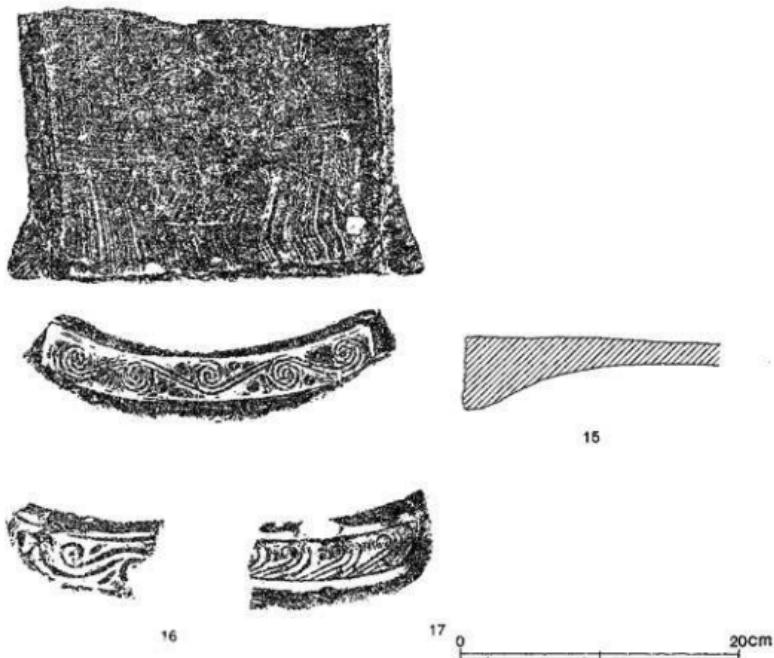
13



14

20CM

第37図 女影院寺(3)



第38図 女影庵寺(4)

布目痕を残し、布目は7本。胎土は砂粒を含み、色調は灰白色、焼成は良好。

平瓦

第1類

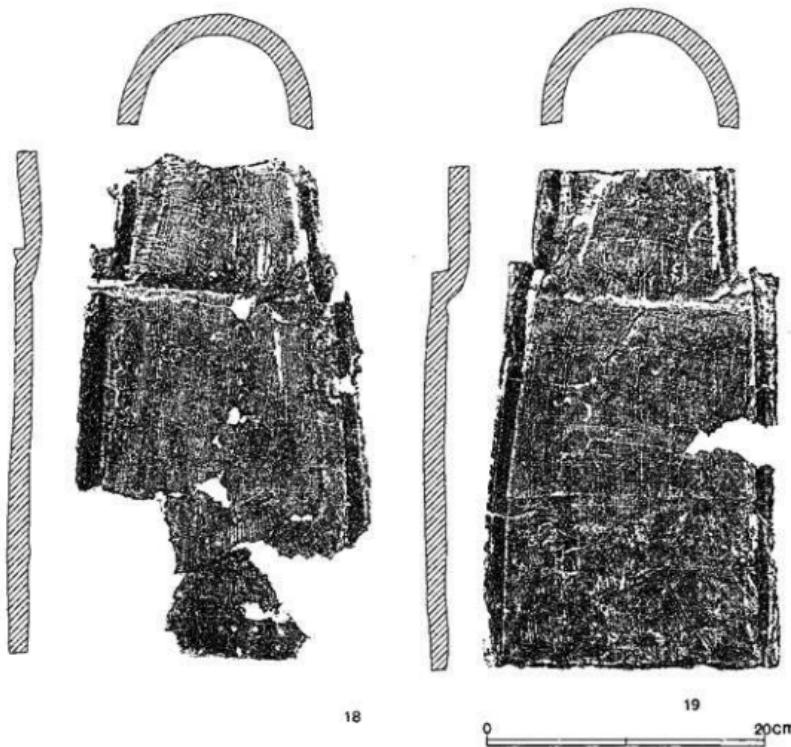
25は凸面に斜方向の綱叩きを施す。綱目は3cm四方に8本で3節入る。凹面の布目は7本である。胎土は砂粒・小砾を含み、色調は灰色、焼成は良好。

第2類

26は凸面斜方向の綱叩き（7本の5節）を施す。第1類が側面に対して僅かに斜方向に叩いてい るのに対し、狭端面側の一方から叩く事によって45°に近い角度になっている。凹面は布目痕を 横方向にナデ消しており、側端縁は僅かに面取りされている。側端面は狭端面方向にヘラケズリさ れている。胎土は砂粒・白色粒を含み、色調は明褐色、焼成は良好。

第3類

27は凸面綱叩き（10本の6節）を側面に平行に施す。凹面布目痕は細かく、横11本の横12本であ る。胎土は砂粒を含み、色調は灰褐色、焼成は良好。



第39図 女影庵寺(5)

第4類

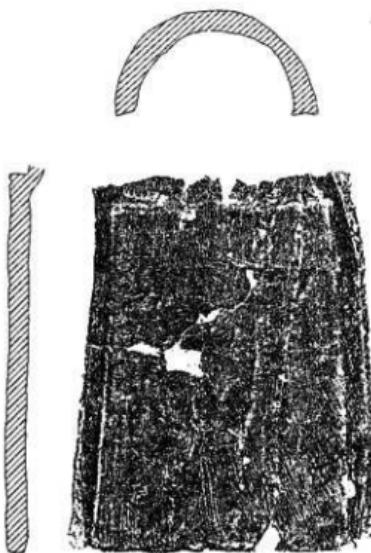
28は縄叩き痕と布目痕がともに細かく、凸面の縄叩き痕は16本の8節である。凹面の布目は縦9本の横10本である。側端縁は僅かに面取りされている。胎土は砂粒・白色粒を含む。色調は灰褐色、焼成は良好。

第5類

29は凸面に縄叩き（6本の3節）を施し、凹面の布目は縦5本の横6本でともに深い。胎土は砂粒・小砾を含み、色調は灰色、焼成はやや不良。

第6類

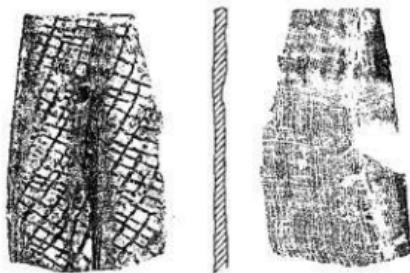
30は凸面に組み合わせの平行叩きを施す。凹面の布目は6本である。胎土は砂粒を含み、色調は灰色、焼成は良好。



20



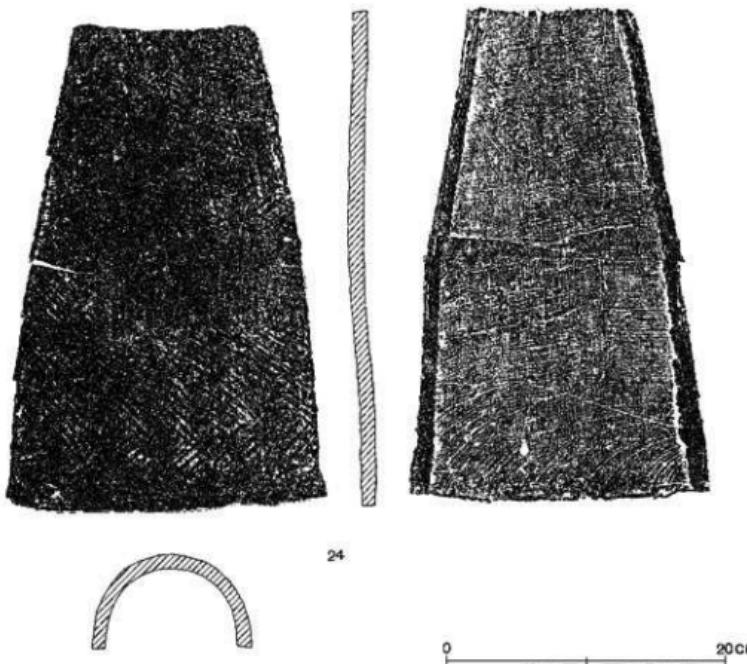
21



22



第40図 女影庵寺(6)



第41図 女影庵寺(7)

第7類

31は凸面に平行叩きを施すが、全面が押しつけられた様になっている。凹面縦5本で横8本の布

目痕を残し、狭・側端縁が面取りされている。胎土は砂粒・小礫を含み、色調は褐色、焼成は良好。

第8類

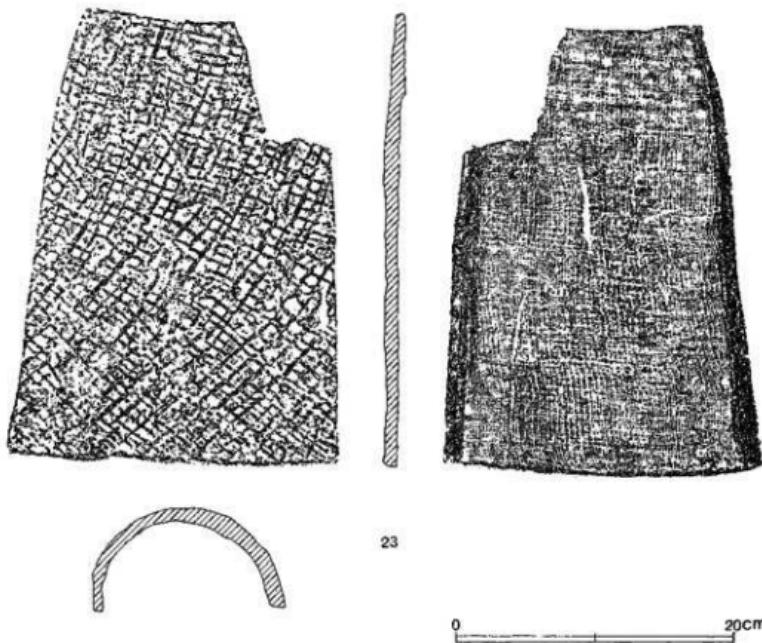
32は凸面に正格子叩き（ $1.2 \times 1.0\text{cm}$ 前後）を施す。凹面には縦7本で横6本の布目痕を残す。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡褐色、焼成は良好。

第9類

33は凸面に継・斜方向のヘラケズリの後、正格子叩き（ $1.0 \times 0.8\text{cm}$ 前後）を施す。凹面は広端側から狭端方向への糸切り痕が残るが、布目痕は見当らない。胎土は砂粒・白色粒を含み、色調は赤褐色、焼成は良好。

第10類

34は凸面を横方向のヘラケズリの後、斜格子叩き（ $1.1 \times 1.4\text{cm}$ 前後）を部分的に施している。凹面の布目は8本で、布の綴じ合せ口があるが不鮮明。凹面の側・狭端縁には面取りを施す。胎土は



第42図 女影庵寺(8)

砂粒を含み、色調は灰褐色、焼成は良好。

第11類

35は凸面斜格子叩き (0.6×0.9 cm前後) を施す。凹面の布目は7本で、部分的に粘土紐の接合部分が残る。胎土は砂粒・小蝶・白色粒を含み、色調は褐色、焼成はやや不良。

第12類

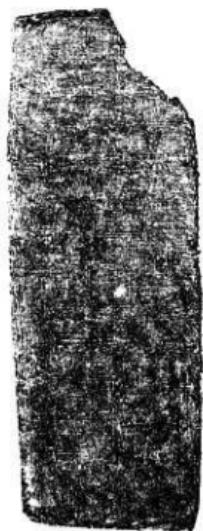
36は凸面に斜格子叩きを部分的に施す。叩きは第11類に類似している。凹面の布目は縦7本の横9本で、糸切り痕を残している。胎土は砂粒・小蝶を含み、色調は灰褐色、焼成は良好。

第13類

37は凸面に7本で3箇の縄叩きを施した後に斜格子叩き (0.5×0.9 cm前後) を行う。凹面の布目は7本で、糸切り痕を残している。拓本のみ。

第14類

38・39は凸面に布目痕を残し、布目の上に平行叩きを浅く行う。凹面は布目痕と糸切り痕を残す。布目は凸面が7本で、凹面が縦7本の横8本。胎土は38が砂粒多く、39が砂粒・白色粒、赤色粒を



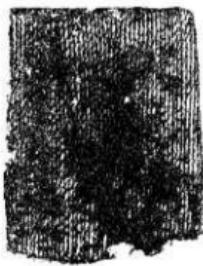
25



26

0 20cm

第43図 女影庵寺(9)



27



28



29

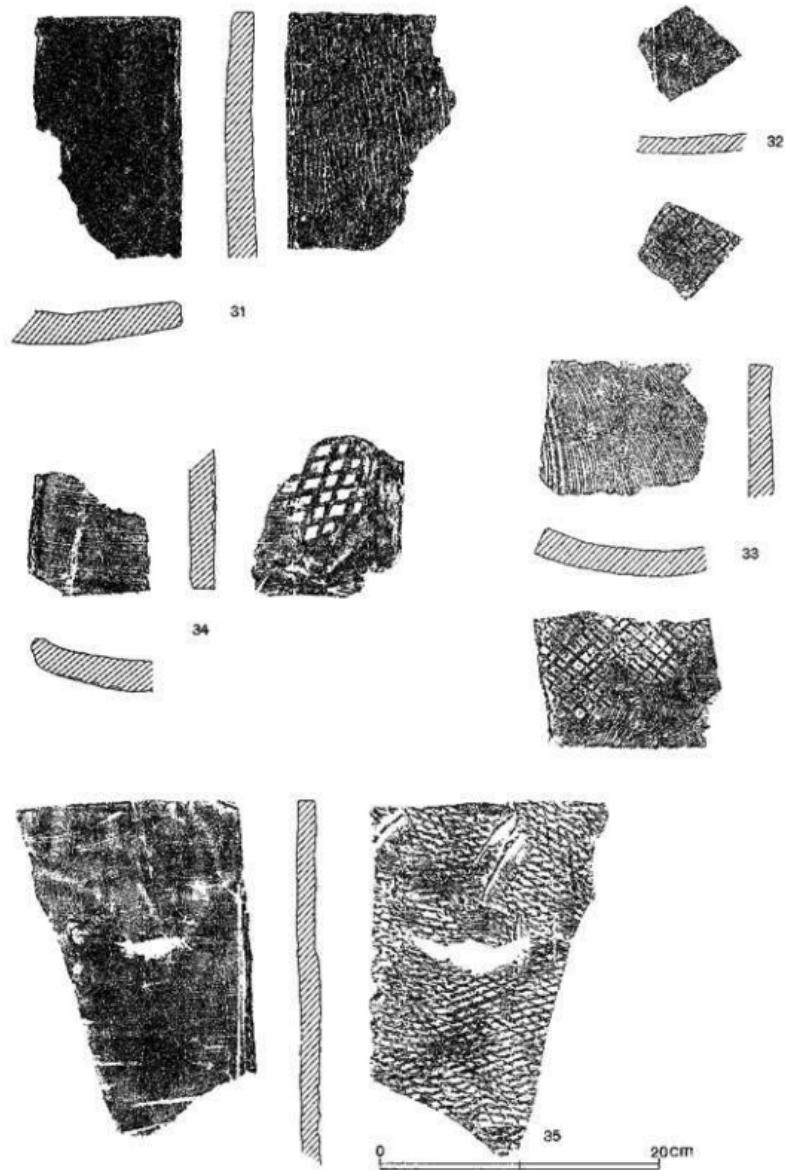


30

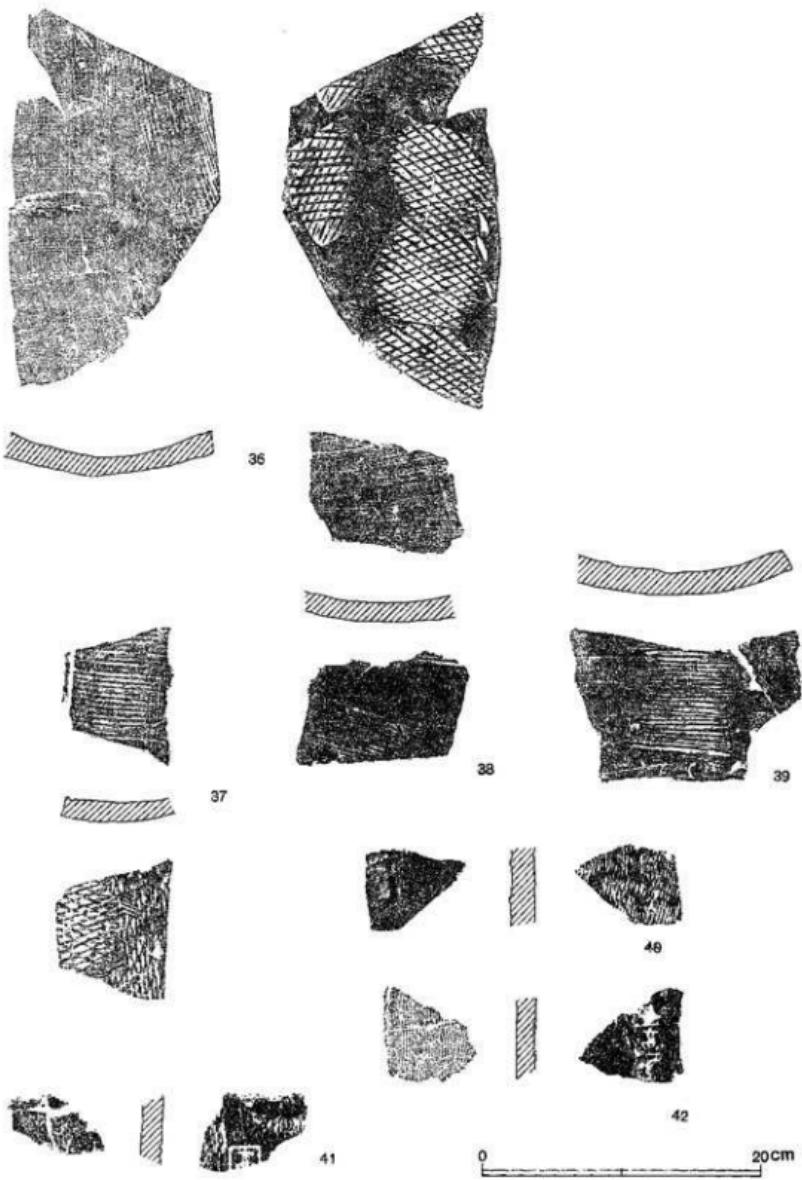
0

20cm

第44図 女影庵寺(1)



第45図 女影庵寺(1)



第46図 女影庵寺(1)

含む。色調は38が灰褐色で39が褐色。焼成は39がやや不良、38が良好。

第15類

40は凹面に「丁」の横骨部分を持つ。凸面の繩叩きは13本の6箇で、凹面の布目は縦13本の横12本。胎土は黒色粒を僅かに含む。色調は暗灰色、焼成はやや不良。

第16類

凸面に41は「高」、42は「高」印刻を持つ。凸面は41が繩叩き、42がナデ、凹面の布目は41が7本、42が6本である。胎土は小砾を僅かに含む。色調は41が黄灰色、42が暗褐色で、焼成は41が不良、42がやや不良。

年代

軒丸瓦第1類は茨城県新治廃寺と同範で、丸瓦部分の叩きも同一である。8世紀第1四半期に位置づけられるが、高麗都設置が延喜2(716)年であるので、瓦が持ち込まれた可能性も指摘されている(酒井1988)。いずれにしても都設置に近い年代と考えられる。第2・3類は第1類の丸当周縁に段を有する点が同じで、本寺院用に作られた可能性が高い。第4・5類は8世紀第3~4四半期、第2・3類は9世紀後半と考えられる。軒平瓦は第3類が国分僧寺、八坂前窯・多摩市下落合瓦窯で、第4類が国分僧寺・新久窯跡で出土している(有吉1986)。また丸瓦第3類と平瓦第6類の変形格子叩きと同一の叩き工具による瓦が前内出窯跡2号窯から出土している(酒井1988)

第2節 窯

前内出窯跡

立地と環境

前内出窯跡は入間市大字仏子前内出998に所在する。遺跡は、入間川の右岸で加治丘陵の北側に位置する。丘陵の南側には新久窯跡、八坂前窯跡、谷津池窯跡、谷久保窯跡等が存在する。

発掘調査の結果、丘陵の先端西側の2基の窯跡が検出された。1号窯は全長4.8mの半地下式無段登窯である。2号窯も推定全長3.5~4.0mの半地下式無段登窯で、ほぼ主軸を同一方向にして相並ぶ。両窯とも須恵器の杯・蓋・碗・壺を主体に焼成しており、瓦片を数点検出した。

出土遺物(第47図)

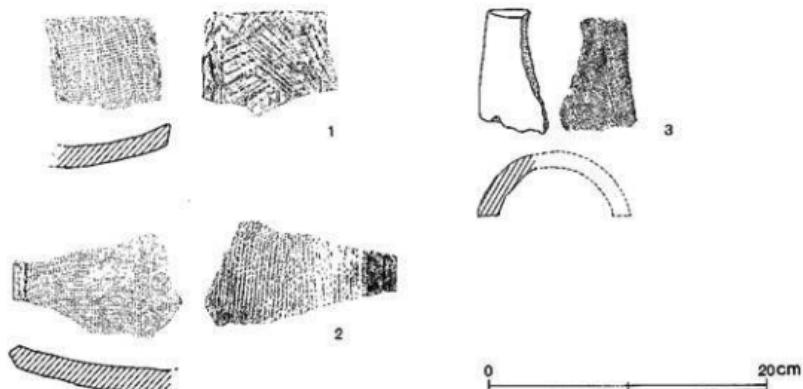
平瓦

第1類

1は凹面には3cm単位当たり縦21本×横14本の布目痕をもつ。側面にはヘラケズリを施している。凸面には平行叩きを施す。粘土紐の一枚造りと考える。焼成良好。色調は一部赤褐色の青灰色を呈する。(2号窯跡出土)

第2類

2は凹面には3cm単位当たり縦17本×横23本の布目痕をもつ。側面にはヘラケズリを施している。凸面には3cmに12本の繩叩きを施す。粘土紐の一枚造りと考える。胎土は白色砂粒子を多く含み、焼成良好。色調は青灰色を呈する。(2号窯跡出土)



第47図 前内出窯跡

九瓦

3は凹面布目痕をもつ。胎土は砂粒子、石英粒子を多量に含む。器はだは薄い感じを受けるもので須恵質である。(1号窯跡出土)

年代

前内出窯跡生産の須恵器年代から考えて、8世紀中葉としておきたい。

八坂前窯跡

立地と環境

八坂前窯跡は入間市大字新久字八坂前に所在する。当地は飯能市の南、秩父の山地が西の方から高度を落した。標高180mを測る加治丘陵の東部南側の、南から約250mの長さで北に湾入する谷戸奥の東の斜面に位置し、合計8基の窯跡が確認され発掘調査されている。本窯跡の標高は135m～138mを測る。

この加治丘陵の北側に入間川が、南側に霞川がそれぞれ東から西に流れしており、この丘陵は両河川に挟まれた形となっている。またこの丘陵には無数の開析谷が発達し、複雑な等高線を描いている。東金子窯跡群は主としてこの丘陵の南半部中心に分布し、丘陵の北側及び南側の台地の縁辺にも及び、長さ250～400mほどで丘陵に湾入する合計5箇所の谷戸を中心（小林昭彦1984）総計14技群の窯跡が確認されている。これらの東金子窯跡群を構成する14技群の立地には次の三形態を認めることがある。すなわち新久、八坂前、谷津池に代表される加治丘陵中にあって、樹枝状に刻まれた谷に面する斜面に立地するグループと、谷久保窯跡、中畠遺跡のように霞川の右岸、金子台地の北緩斜面に立地するグループと、前内出、東八木窯跡、下谷ヶ戸遺跡のように加治丘陵の北側に位置し、台地緩斜面に立地するグループである（中島宏・水村孝行1986）。窯跡群の操業時期は、

8世紀後半に位置づけられている前内山2号窯跡が最も古く10世紀代に比定される新久窯跡E、F地点では、D地点1、2号窯跡に後出すると考えられる遺物が出土しているが、窯跡は検出されていない。したがって現在までの調査成果から東金子窯跡群の操業期間は途中ブランクがあるが、8世紀後半～10世紀代とすることができよう。最も盛期となるのは新久窯跡A地点1、2号窯跡に代表される武藏国分寺再建時の9世紀中葉である。(中島宏・水村1986)

八坂前窯跡は3次にわたって発掘調査され8基の窯跡と1基の粘土探査坑が検出された。これらの窯跡は9世紀中頃以前の須恵器生産の第Ⅰ段階、9世紀中頃の瓦生産の第Ⅱ段階、9世紀中頃以降の須恵器生産の第Ⅲ段階に分けられる。第1、2次調査の第3、4、5号窯跡と第3次調査の第1、2号窯跡は第Ⅰ、Ⅱ段階に比定される地下式無階無段窯跡であり第1、2次調査の第1、2、5号窯跡は第Ⅱ、Ⅲ段階に比定される半地下式大寺廐寺階無段登窯跡であった。

これらの8基の窯跡は、新久窯跡A地点1、2号窯跡、谷津池窯跡とともに最盛期の9世紀中葉に操業されていたと考えられる。

また「八坂前・新久・谷津池の三窯は、八坂前を中心として同范・同系の瓦当文をもつ鐘・字瓦を同時生産しているものであり、三窯の有機的関係を窺うことができる。」(坂詰秀一・斎藤祐司1984)のである。

(斎藤 祐司)

出土遺物（第48図～第53図）

今回掲載する遺物は現在入間市教育委員会が所蔵しているもので、私達が実現できたもののみである。したがって、報告書（坂詰秀一1984）と遺物の数、内容において違いがあることをおこわりしておく。

軒丸瓦

単弁6葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当面の直径は約20cmである。内径は12.4cmである。中房は凸線で表現される。直径は4.8cmである。中心に菱形の蓮子が1個配される。蓮弁は小形で薄い、周縁は直立縁である。周縁の外側はヘラケズリりされる。瓦当裏面は接合部に補強粘土を入れナデられている。丸瓦凹面は布目痕が残る。布目は3cmあたり16×18本の糸によって構成される。凸面はかるくヘラケズリされる。側面はたて方向にヘラケズリされる。胎土は石英、長石を含む。焼成は良好である。色調は灰褐色である。なお、この軒丸瓦は報告書（前掲書、以下この項において「報告書」と使うときはすべて同じ。）においてⅣ類に分類されている。

軒丸瓦ではこの他にもう1点瓦当面のみ残存するものがある。今回残念ながら掲載できなかつたが、単弁6葉蓮華文軒丸瓦である。蓮子は1+4で、蓮弁は先端が界線に接するものである。瓦当面には范の木目痕が全面に残り范のキズも観察されるなど、かなり使い込まれた范を使用したものであることがわかる。報告書ではⅢ-2類に分類されている。

軒平瓦

第1類

2は均整唐草文軒平瓦である。左側3分の1を欠失している。中心飾りから左右に3単位反転する。3単位目は主葉のみで枝葉をもたない。上下外区には珠文を配する。頭は曲線頭である。平瓦凸面の残存部にはわずかに繩印痕が見られる。胎土は砂粒、小礫を含む。焼成は良好である。色調

は灰色である。報告書ではⅠ—1類に分類されている。5も同じものと考えられるが左に範キズが認められる。平瓦凹面には布目痕の下に糸切痕がある。凸面には6~7cm間隔で正格の叩きが施されている。胎土は黒色粒、白色粒を含む。焼成は軟質である。色調は灰白色である。

第2類

3は右半分を欠失している。均整唐草文と考えられるがシャープさに欠ける。中心飾りから2単位目は枝葉が退化している。上下外区には珠文を配する。顎は曲線顎である。平瓦凹面は3cmあたり20本の布目痕が残る。広端部は横方向にナデられている。凸面繩叩き痕が残る。側面は縦方向のヘラケズリである。胎土は砂粒、小礫を含む。焼成は軟質で、色調は灰白色から淡橙褐色。

第3類

6は均整唐草文軒平瓦であるが、かなり範がいたんでいる。上下外区部分はぎりぎりまで分窯跡出土)で削られている。下外区にも珠文は認められない。顎は直線に近い曲線顎である。平瓦凹面は広端部は横方向にヘラケズリされ他は布目をナデ消している。凸面は正格子の叩きが見られるがこれも横方向にヘラケズリされ他は布目をナデ消している。凸面は正格子の叩きが見られるがこれも横方向にヘラケズリされている。胎土は砂粒・石英、長石を含む。焼成は良好である。色調は乳白色である。

第4類

4は同じく均整唐草文軒平瓦であるが全体に扁平で押し潰されたような印象を受ける。外区及び脇区はない。顎は曲線顎である。平瓦凹面広端部は横方向に削られる。凸面広端部は同じく横方向に削られる。また3×3.8cmの正格子の叩きが認められる。側面はヘラケズリされる。胎土は砂粒、礫を含む。焼成は良好である。色調は灰色である。報告書ではⅠ—4類に分類されている。

第5類

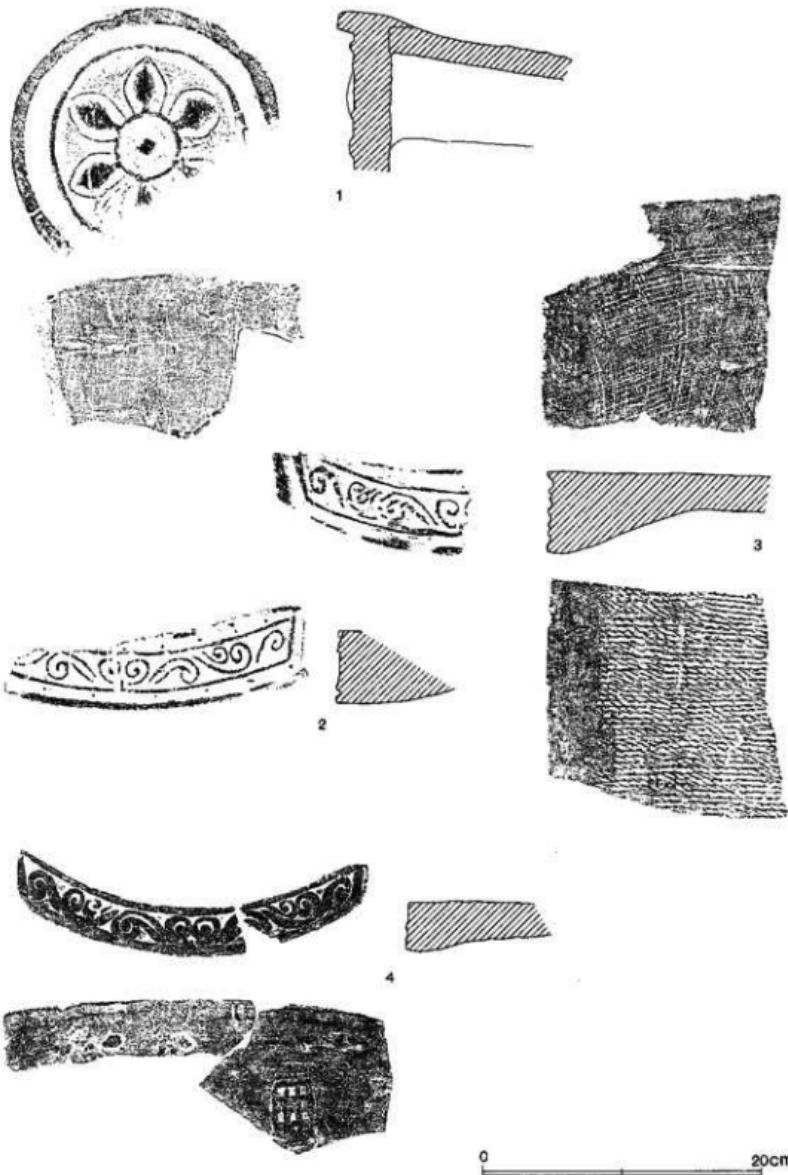
7は唐草文が全て上向きになる均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは上向きに左右に開き、唐草文は反転せず上向きに左右に展開する。顎は曲線顎である。平瓦凹面は布目痕が残り、広端部は横方向に削られる。凸面は顎部分が横方向に削られ他は繩叩き痕が残る。胎土は白色微砂粒を含む。焼成は良好で軟質である。色調は灰色である。報告書ではⅣ類に分類されている。

第6類

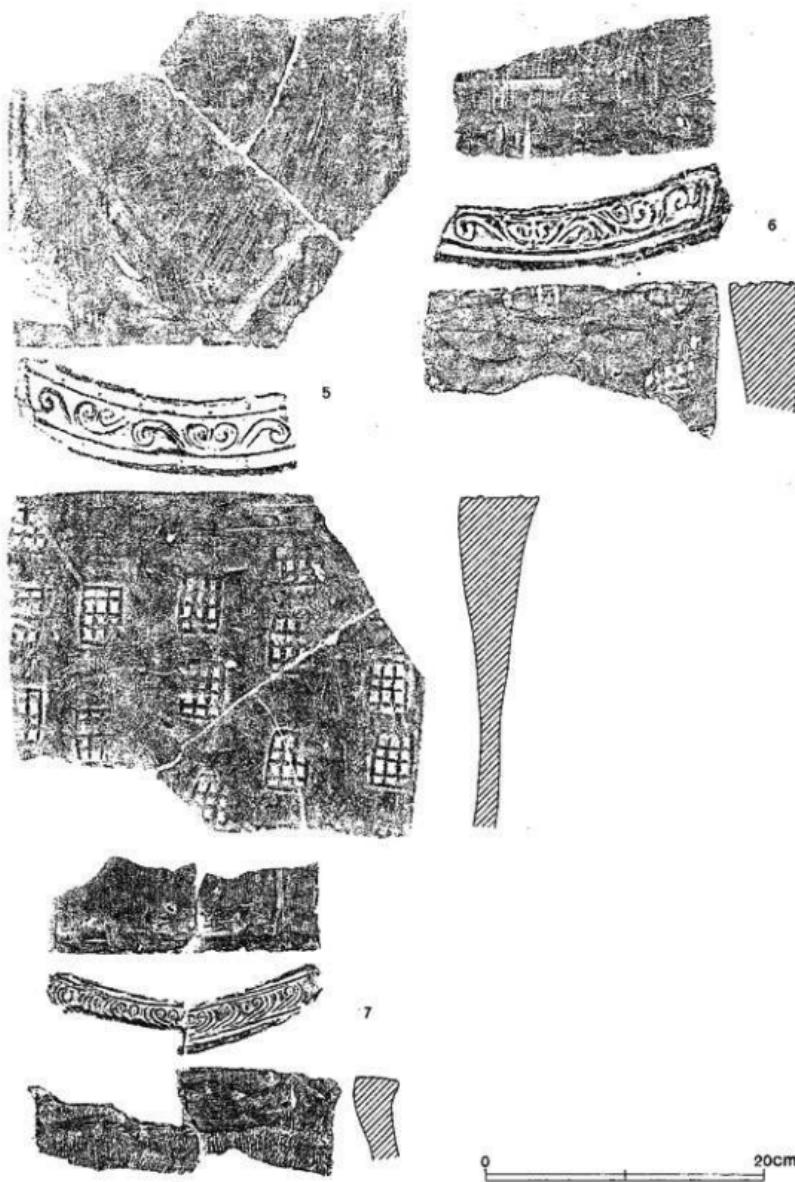
8は左半分を欠失しているが、一応均整唐草文と考えられる。中心飾りは逆ハート形で、唐草文は連続せずやや変則的な配置である。上部にのみ界線状の凸線が認められるがいわゆる外区及び脇区にあたるものは見られない。顎はやや傾斜のある曲線顎である。顎の先端部は横方向に削られる。平瓦凹面は3cmあたり21本の布目痕が残る。また一部指頭痕が残る。凸面は顎部分まで繩叩きが行なわれている。側面はヘラケズリによって面取りされている。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。色調は暗灰色である。報告書ではⅢ類に分類される。

第7類

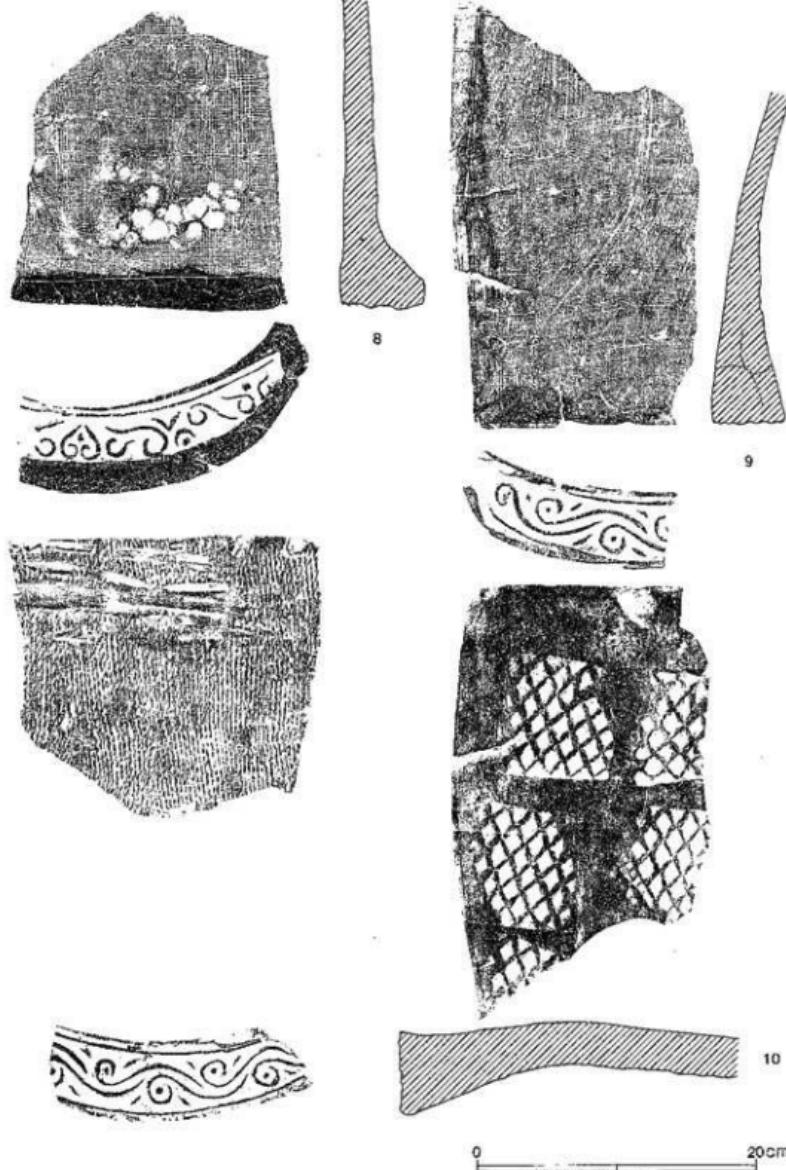
9~11は偏行唐草文である。唐草は連接せずそれぞれ独立して左方向へ流れる。顎は曲線顎である。平瓦凹面は3cmあたり20本の布目痕が残る。広端面と側面はヘラケズリされる。また布目の下には糸切痕がみられる。凸面は斜格子の叩きが間隔をおいて施されている。広端側は横方向にヘラ



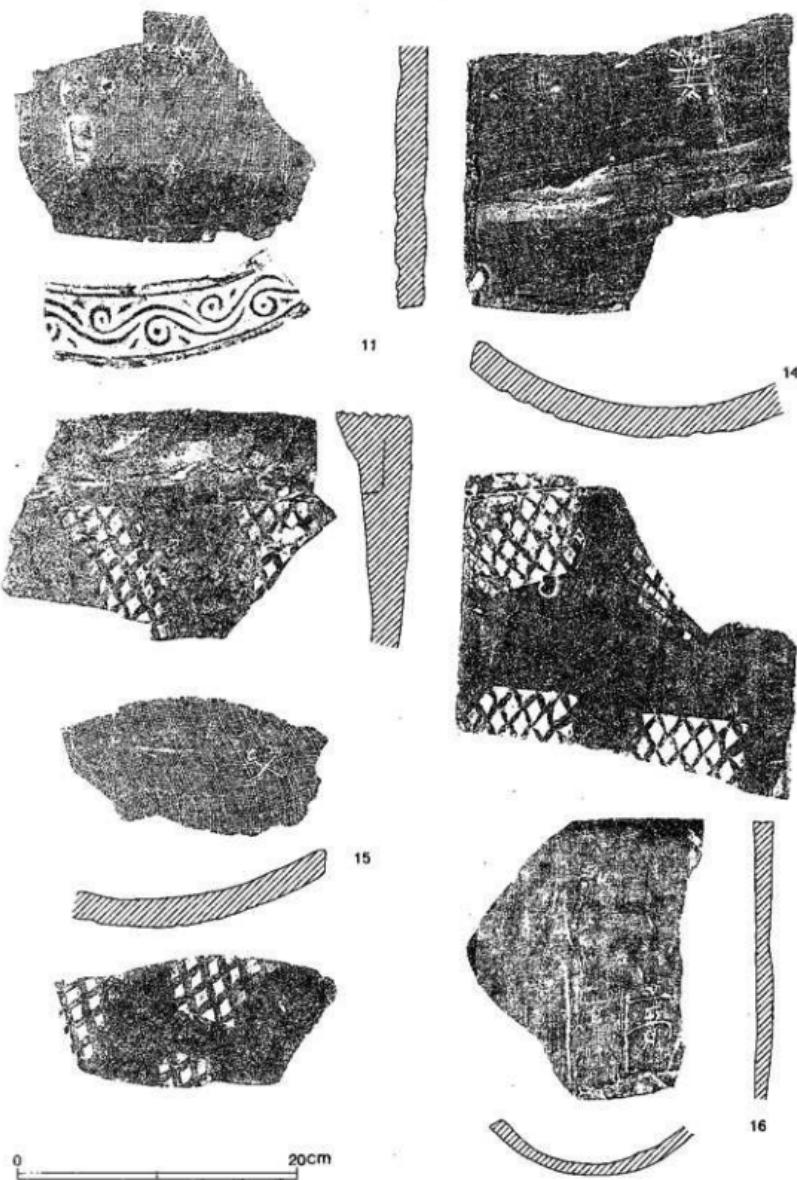
第48図 八坂前窯跡(1)



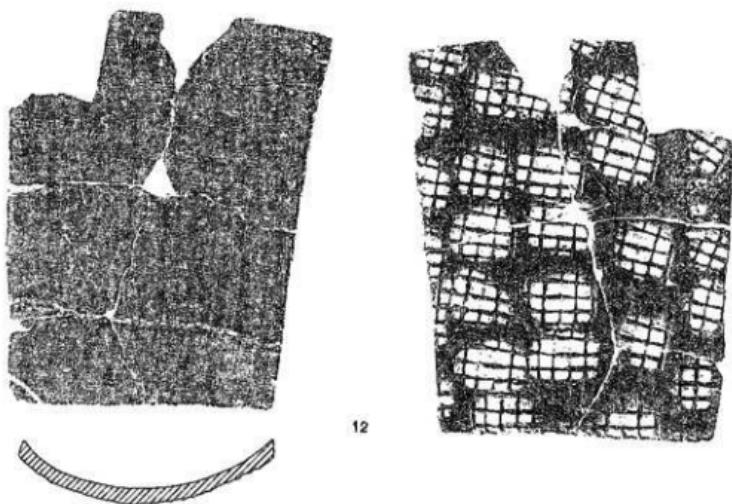
第49図 八坂前塚跡(2)



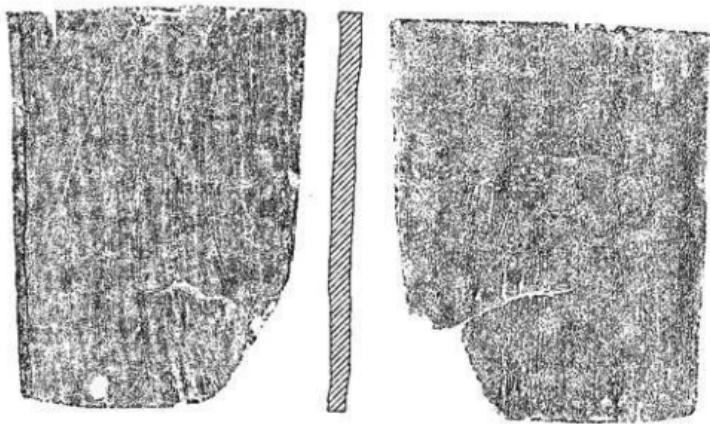
第50図 八坂前窟跡(3)



第51図 八坂前窯跡(4)



12



13



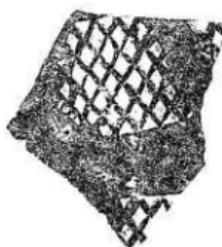
第52図 八坂前窯跡(5)



17



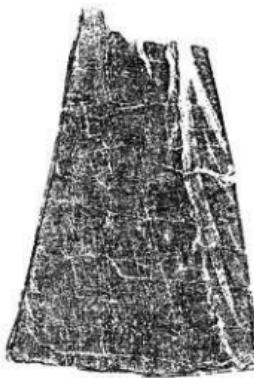
18



0 20cm



19



20

0 20cm

第53図 八坂前縄跡(6)

ケズリされる。側面は縦方向にヘラケズリされる。胎土は砂粒・白色微細粒・石英等を含む。焼成は良好である。色調は灰色から暗灰褐色である。報告書ではV類に分類されている。

九瓦

20は凸面は全面ヘラケズリされる。凹面は布目痕及び布とじ痕が残る。布目は3cmあたり15×20cmある。更に粘土縫痕が明瞭に残る。広端面はヘラケズリされる。側面もヘラケズリされている。胎土は白色粒子、石英粒を含む。焼成は良好で硬質である。色調は灰色である。

平瓦

第1類

12は凸面に正格子の叩きを施すものである。凹面には3cmあたり20本の布目を残している。更に狭端から9cm程のところには横方向に布の縫合せがみられる。端面および側面はヘラケズリされる。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。色調は暗青灰色である。

第2類

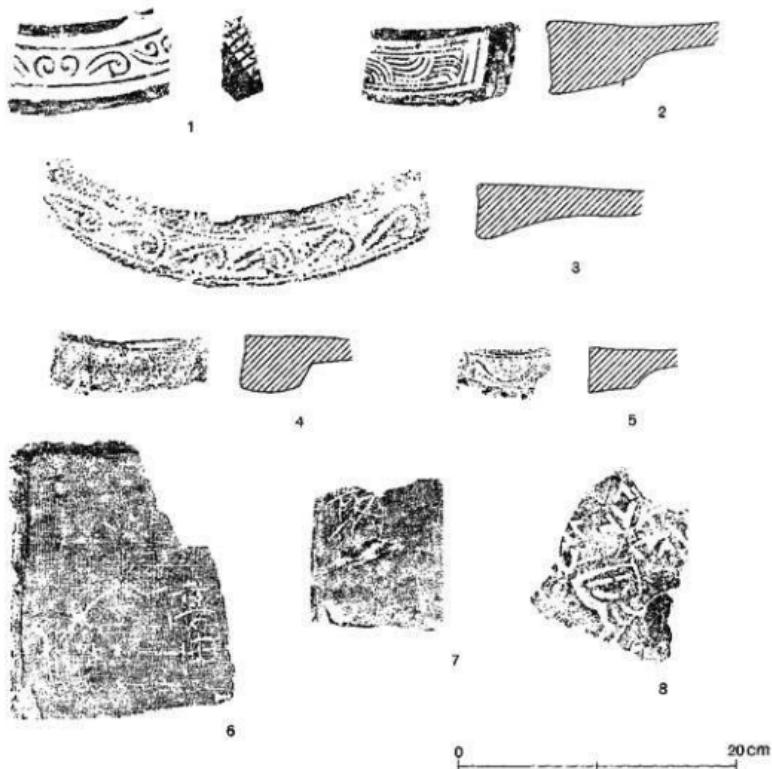
13は凸面に縄叩き痕が残るものである。凹面には3cmあたり15×21本の布目がありその下には糸切痕が認められる。端面及び側面はヘラケズリされる。胎土は石英、長石を含む。焼成は良好である。色調は灰褐色である。

文字瓦

14は平瓦凹面に「高」の文字が範描きされる。布目は3cmあたり29×31本である。縦方向に指ナデ痕と横方向に布とじ痕が残る。凸面は横方向にヘラケズリされる。端面は横方向に削られる。厚さは1~1.5cmと薄い。15は「父」の文字が範描きされる。凹面3cmあたり20×18本の布目、凸面は斜格子の叩きが残る。側面はヘラケズリされる。胎土は砂粒、小礫を含む。焼成は良い。色調は暗橙褐色である。16は「美」の文字を平瓦凹面に範描きしている。布目は3cmあたり26本である。一部よくナデによって布目が消されている。また布の縫合せ痕が観察できる。凸面斜格子の叩きがまばらに施される。叩きと叩きのあいだはナデられる。端面及び側面はヘラケズリである。胎土は砂粒、小礫、白色粘土粒を含む。焼成は良好である。色調は淡褐色から暗灰褐色である。17は「父」のスタンプ文字である。枠の大きさは横が22.7cm、縦が2.8cmである。なお、「父」の文字は左右逆字になっている。瓦は平瓦で凹面に刻印されている。布目は3cmあたり20×24本で、下に糸切り痕が見られる。凸面は斜格子の叩きである。胎土は砂粒と小礫を含む。焼成は良好である。色調は灰色である。18は「子」の文字の範描きである。布目は3cmあたり20×18である。凸面は全面縄叩きされる。端面及び側面はヘラケズリされる。胎土は石英、長石、砂粒を含む。焼成は良好である。色調は青灰色である。19は「住」の文字を範描きする。凹面は布目痕の下に糸切痕が明瞭に残る。凸面縄叩きである。端面及び側面はヘラケズリされる。胎土は白色砂粒を含む。焼成は良好である。色調は灰黒色である。

年代

八坂前窯跡の瓦は操業された第Ⅱ段階に焼成されたものである。これらの瓦は武藏国分寺再建の時に供給されたもので、年代は9世紀中葉と考えられている。



第54図 谷津池窯跡

谷津池窯跡

立地と環境

谷津池窯跡は加治丘陵中の谷津池畔に位置している。位置的には加治丘陵の東部南側で八坂前窯跡、新久窯跡と同じグループに属している。この三窯跡の中では一番東にあたる。標高125m前後である。

調査は昭和25年から昭和41まで3次にわたって行われている。その結果池の南西部と北東部の2地点から窯跡7、瓦工房跡1、住居跡1が検出されている。

出土遺物（第54図）

遺物については実見することができなかつたので、ここに掲載した瓦はすべて『人間市史』より転載したものである。

軒平瓦

第1類

1は均整唐草文軒平瓦である。新久窯跡、八坂前窯跡で同型式のものが出土している。内側に巻き込むややハート形をした中心飾りから唐草が左右に反転するものである。

第2類

2は翻波文軒平瓦である。

第3類

3は偏行唐草文軒平瓦である。瓦当面は完形である。左から右へ6単位の唐草が配される。

第4類

4は箆描きの軒平瓦である。箆描きは直線で斜格子状に表現される。

第5類

5は同じく箆描きの軒平瓦である。文様は曲線で波状に表現される。文字瓦

6、7は平瓦の凹面に箆描きされたものである。6は「高田」、7は「取」の文字である。平瓦にはそれぞれ布目痕がみられる。8は「男」の文字が型押しされたものである。

年代

瓦は国分寺再建時に焼成されたもので9世紀中葉に比定される。

谷久保窯跡

立地と環境

谷久保遺跡は入間市大字小谷田字谷久保に所在する。霞川の北台地にあって高野屋敷遺跡、霞川遺跡のほぼ中間に位置する。

この霞川は東京都青梅市から東へ流れ、この北側には秩父山地から舌状に突出した加治丘陵が延びている。また、この北側には西から東へ入間川が流れている。

本遺跡は古くから谷津遺跡と呼ばれ、東金子窯跡群を構成する一支群である。この東金子窯跡群は加治丘陵の南部を中心に、北側、南側の台地縁辺にも及び、5箇所の谷戸を中心総計14支群の窯跡が確認されている。窯跡群を構成する。14支群の立地には、三形態が認められ、谷久保遺跡はこのうち霞川右岸、金子台地の北斜面に立地している。東金子窯跡群の主体は、加治丘陵中の樹枝状に刻まれた谷の斜面に立地している。本遺跡は立地にやや特異性をもっている。

現在のところ窯本体は調査されたことがなく、灰原が調査されたのみである。検出された灰原は東西38m、南北20mであったが、さらに南へ延びるようである。窯本体は灰原の南斜面に位置していると考えられ、検出した灰原の規模から数基の存在が想定されている。灰層から検出された遺物は壺、壺、蓋、坏、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦などがあった。時期は遺物から9世紀中葉と考えられる。

(斎藤 祐司)

出土遺物（第55・56図）

軒丸瓦

1は単弁6葉軒丸瓦の下半部の破片と考えられる。瓦当の厚さは1.9cmを測る。中房は4個の連

子が配されている。範型の彫り込みは極めて浅く、化弁は剣菱型の凸線で表現され盛り上がっている。周縁は素文の直立線である。瓦当裏面は中央付近に未調整部分が見られ、丸瓦との接合部分及び回りはナデを施し下端の外縁部はヘラケズリを施す。印籠接ぎである。丸瓦は欠損している。胎土は黒色粒、白色粒、砂粒を含みきめ細い。焼成良好。色調は灰色を呈する。

軒半瓦

第1類

2は偏向唐草文軒半瓦の破片である。瓦当面から頸部の一部にかけて残存する。凹面は欠損し、頸部にわずかに繩叩きが観察できる。胎土は石英、長石をやや多く含む。焼成良好。色調は黒褐色を呈する。

第2類

3・4は流水文風の軒半瓦の破片であり、范は浅く押されている。3は曲線瓶の形態である。頸部分に3cm単位当たり6×13本の繩叩き、軽いナデを施す。側面はヘラケズリを施す。胎土は石英、砂粒子を混在し粘性もつ。焼成良好。色調は褐色を呈する。4は段瓶の形態である。側面はヘラケズリを施す。胎土は石英、砂粒子を混在し粘性やや弱い。焼成良好。色調は淡灰色を呈する。

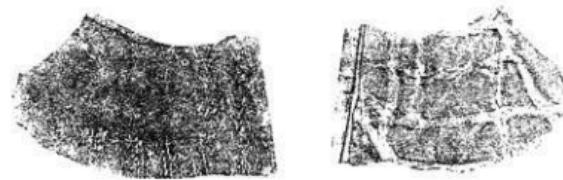
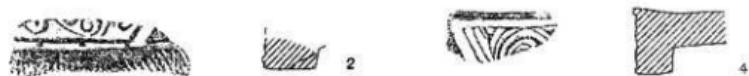
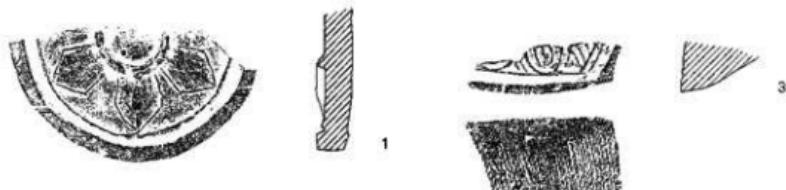
丸瓦

5は、厚さ1.4cm前後を測る。凸面には繩叩きの後、丁寧なナデが施されて部分的に消されている。凹面には3cm単位当たり縦23×横27本の布目痕をもつ。中央部分には縦方向に綴じ形「Z」の布目の重ねが観察される。また、粘土の緊ぎ目を消しているのが不明であるが、横方向のナデが施されている。側面にはヘラケズリを施している。胎土は石英、砂粒子、石をやや多く含む。焼成良好。色調は青灰色を呈する。

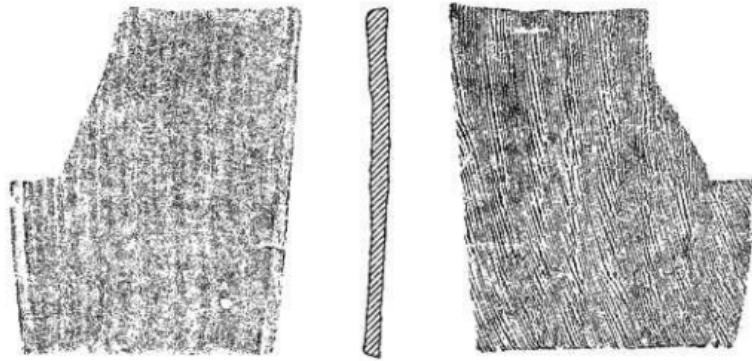
平瓦

第1類

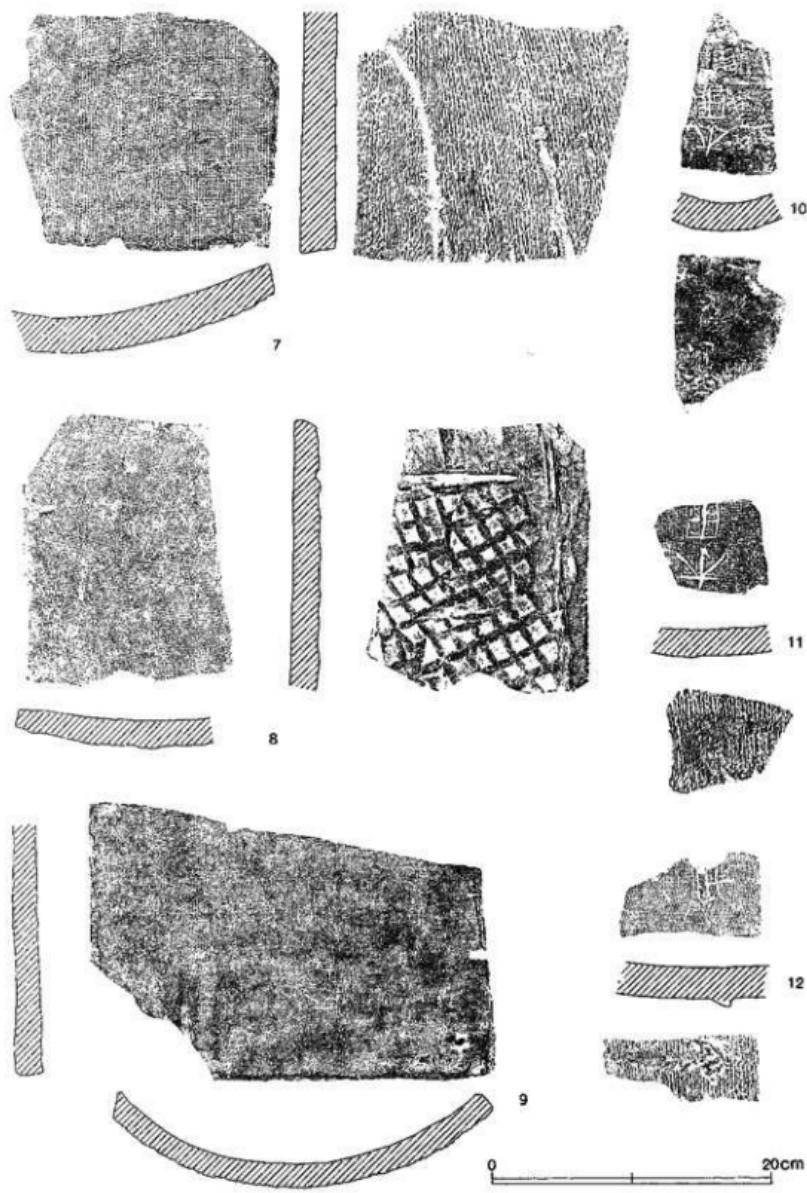
6・7・9～11はいずれも凸面繩叩きを施している。6は厚さ1.4～2.1cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦18本×横18本の布目痕をもつ。広端部寄りに「本田」と記した箋書きの文字をもつ。広・狭端部および側面にはヘラケズリを施している。凸面には3cm単位当5本×8本の繩叩きを施す。粘土紐一枚造りである。胎土は石英、砂粒子、長石を混在する。焼成良好。色調は灰褐色を呈する。7は厚さ2.4cm前後を測る。凹面には3cm単位当たり縦14本×横18本の布目痕をもつ。中央部分には「我」と記した箋書きの文字をもつ。広端部および側面にはヘラケズリを施している。凸面に3cm単位当たり10本×6本の繩叩きを施す。粘土板の一枚造りであると考える。胎土は比較的精製され砂粒子を若干含む。焼成良好。色調は淡褐色を呈する。9は厚さ1.6cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦20本×横25本の布目痕をもつ。広端部寄りに「大井」と記した箋書き文字をもつ。広端部および側面にはヘラケズリを施している。凸面には3cm単位当たり6本×6本の繩叩きを施す。粘土板の一枚造りであると考える。胎土は石英を若干混在する。焼成良好。色調は灰黒色を呈する。10は厚さ1.8cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦16本×横19本の布目痕をもつ。広端部寄りに「本田」と記した箋書きの文字をもつ。広端部にはヘラケズリを施している。凸面には3cm単位当たり推定11本×8本の繩叩きを施すナデ消されている。粘土紐の一枚造りであると考える。胎



0 20 cm



第55図 谷久保窯跡(1)



第56図 谷久保窯跡(2)

土は細砂粒、白色鉱物粒子を含む。焼成良好。色調は淡灰色を呈する。11は厚さ1.9cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦17本×横20本の布目痕をもち、「木田」と記した筆書きの文字をもつ。凸面には3cm単位当たり推定13本×10本の繩叩きを施す。胎土は砂粒、白色・黒色鉱物粒子を含む。焼成良好。色調は淡灰色～淡褐色を呈する。12は厚さ2.1cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦24本×横25本の布目痕をもち、「田」もしくは、「甲」と記した筆書きの文字をもつ。凸面には3cm単位当たり推定6本×15本の繩叩きを施す。胎土は白色鉱物粒子、小礫を含み全体にきめ細かい。焼成良好。色調は暗赤褐色を呈する。

第2類

8は凸面斜格子の叩きを施している。厚さ1.8cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦25本×横38本の布目痕をもつ。狹端部および側面にはヘラケズリを施している。凸面には3本単位当たり縦5.2cm×横5.0cmの斜格子の叩きを施す。粘土板の一枚造りと考えられる。胎土は砂粒、白色・黒色鉱物粒子を含む。焼成良好。色調は濃灰色を呈する。

年代

単弁6葉軒丸瓦の破片は、国分寺再建期の瓦であることがら9世紀中葉と考えられる。

第3節 集落・その他の遺跡

山田遺跡

立地と環境

山田遺跡は、坂戸市大字芋柳新田字山田に所在する。遺跡は、外秋父山地の裾に広がる坂戸台地上に位置する。標高30mを測る。

遺跡の概要としては、歴史時代の堅穴式住居跡が40軒、井戸跡4基、建物遺構1棟が検出され、瓦は、いずれも、住居跡内から検出された。

周辺には古墳時代の遺跡として、中小坂・塚越道路・新町・石渡町・浅羽・峯・東山・善能寺愛宕・善能寺・成願寺古墳群等が存在する。また、芦山遺跡・千代田遺跡・花影遺跡等が存在する。

出土遺物（第57回）

軒平瓦

1は偏面唐草文軒平瓦の破片である。瓦当部から顎部・平瓦の一部にかけて残存する。凹面は細かい布目痕をもち、顎部および平瓦凸面に亘って繩叩きが観察できる。胎土はあまり良くない。器面には軸がかかっている。（25号住居跡出土）

2は唐草文軒平瓦の破片である。瓦当部から顎部の一部にかけて残存する。凹面は欠損している。顎部はナデられ、平瓦凸面に繩叩きが観察できる。（24号住居跡出土）

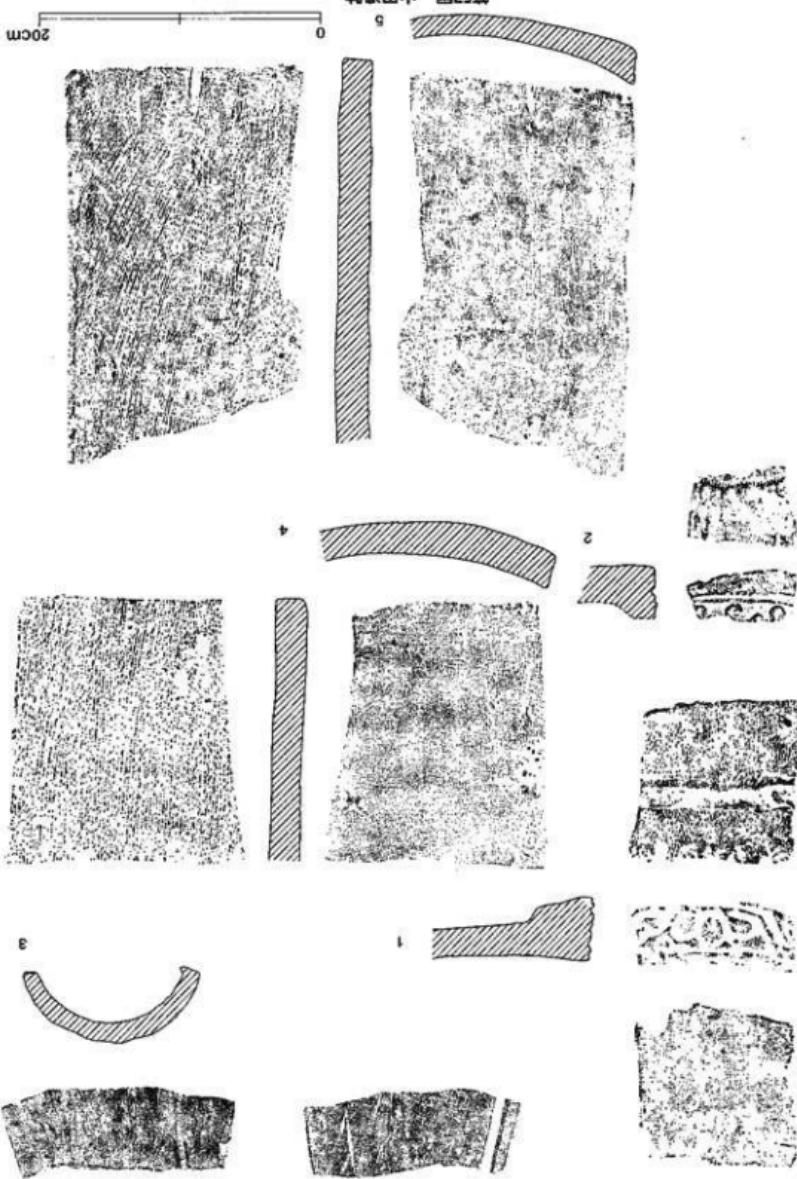
丸瓦

3は厚さ1.3cm前後を測る。凸面には繩叩きの後丁寧なナデが施されて全体的に消されている。凹面には細かい布目痕をもつ。粘土紐一段部分で、粘土紐の幅6.5cmを測る。（29号住居跡出土）

半瓦

4は凹面には布目痕をもつ。側面は、鋭角的に切り整形はヘラケズリを施している。凸面には繩

第57図 山田遺跡



叩きを施している。粘土紐の一枚造りと考える。(14号住居跡出土)

5は凹面には布目痕をもつ。側面は鋭角的に切り整形はヘラケズリを施している。凸面には縦叩きを円弧を描いて左右に打ち分けられている。粘土紐の一枚造りと考える。(14号住居跡出土)

年代

稻荷前遺跡

稻荷前遺跡は、坂戸市大字竹ノ内字稻荷前130番地他に所在する。遺跡は、越辺川と高麗川に挟まれた毛呂山台地の北南端に位置し、標高は約30mを測る。昭和61年度から発掘調査され現在までに検出された遺構は古墳時代から平安時代にわたって堅穴住居跡125軒・掘立柱建物跡・井戸跡・溝のほか、古墳時代前期の方形周溝墓群を確認した。瓦は台地の北端部寄りの確認面で検出された。

出土遺物（第58図）

軒丸瓦

1・2ともに小型で焼成温度はあまり上がらないが、堅緻な造りである。瓦は比較的浅く凸線で区画し瓦当文様を表現している。1は、直径10.2cmを測る。瓦当面は単弁4葉の退化形態のようである。中房は径2cmを測り、蓮子はない。弁は凸線で区画され界線から三角状の突起をもつ。瓦当裏面はナデ、丸瓦部分はヘラケズリを施す。印籠つぎ技法である。胎土は白色針状物質、砂粒、白色鉱物粒子、金雲母を含む。色調は淡灰白色である。焼成はやや悪い。瓦当面及び裏面に火を受けたような痕跡を留める。2は、厚さ1cmを測る。瓦当面は単弁4葉の退化形態のようである。中房は欠損している。弁は凸線で区画され界線が巡る。瓦当裏面はナデ、丸瓦部分はヘラケズリを施す。印籠つぎ技法である。胎土は白色針状物質、砂粒、白色鉱物粒子、金雲母を含む。色調は淡灰白色である。焼成はやや悪い。

丸瓦

3・4ともに小型の丸瓦である。3は厚さ1cm、径7.3cmを測る。凸面は3本当たり縦0.6cmを測る。凹面は3cm単位当たり縦26本×横30本の布目痕をもつ。側面は縦方向のヘラケズリを施し、狹端面は横方向のヘラケズリを施している。全体に摩滅著しい。胎土は白色針状物質、砂粒、長石、片岩、雲母を含む。焼成やや不良。色調は淡灰白色～淡茶褐色を呈する。4は、厚さ1cm前後を測る。凸面は3本当たり0.5cmを測る。凹面は布目痕をもち布縞じが見られる。側面は縦方向のヘラケズリを施し、狹端面は横方向のヘラケズリを施している。全体に摩滅著しい。胎土は白色針状物質、砂粒、長石、片岩、雲母を含む。焼成はやや不良。色調は淡灰白色を呈する。

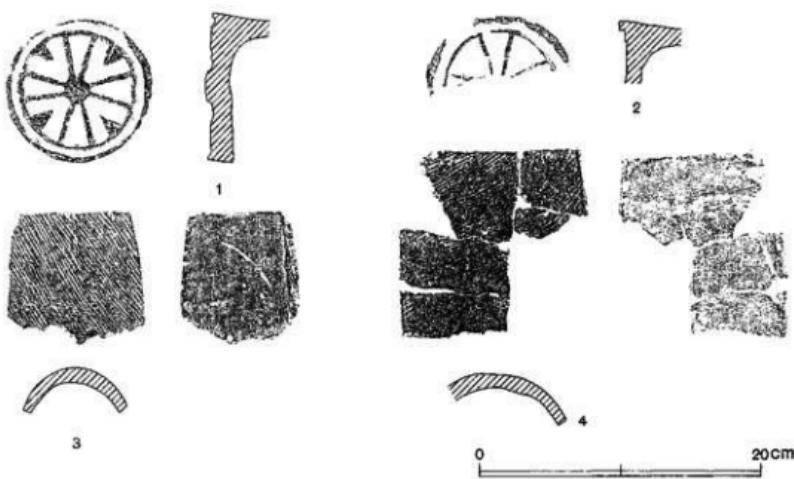
年代

単弁4葉軒平瓦は弁の表現が退化しており、旧盛徳寺・宮ヶ谷戸遺跡出土の単弁4葉より後出と考えられ石原山窯跡段階と同じ9世紀末と推定する。

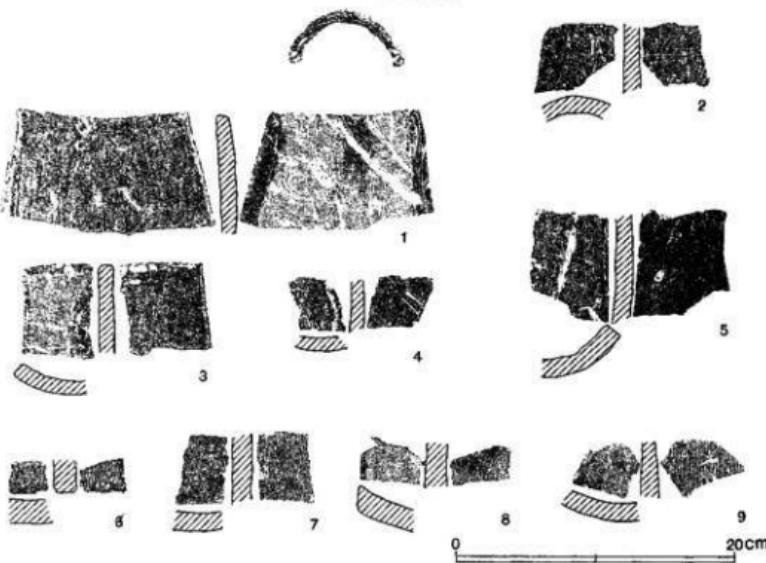
附島遺跡

立地と環境

附島遺跡は、坂戸市大字小沼字附島と西谷一帯に広がりをもつ。遺跡の位置する坂戸台地は東へ



第58図 福荷前遺跡



第59図 附島遺跡

緩やかに傾斜をもち、この坂戸台地の東北端に、台地から切り離されたような島状の部分が附島遺跡である。標高は約16~19mで周辺は水田が巡っている。平安時代の遺跡として周辺には勝呂遺跡をはじめ、山田遺跡、若葉台遺跡、住吉中学校遺跡等が知られる。

出土遺物（第59図）

丸瓦

1は狭端部の破片である。凸面は縦方向のナデを施している。凸面は布目痕をもつ。胎土は砂粒を多く含む。還元炎焼成である。色調は灰色を呈する。K-8号住居跡カマド出土、2は、凸面は縦方向のヘラナデを施している。凸面布目痕をもつ。胎土は粗砂粒を含み白色針状物質が少量みられる。還元炎焼成である。色調は表面は黒色で断面白灰色を呈する。K-5号住居跡出土

平瓦

第1類

3・4は凸面に縦方向のヘラナデを施している。凸面は布目痕をもつ。胎土は砂粒を多く含み、4には白色針状物質を含む。還元炎焼成である。色調は灰色を呈する。K-8号住居跡出土、5は、凸面は横方向のヘラナデを施している。凸面布目痕を明瞭にもち。枠板の痕跡であろうか凹線状に凹んだ部分をもつ。胎土は精選され均一である。還元炎焼成である。色調は明灰色を呈する。K-5号住居跡出土。

第2類

6~9は凸面に繩叩きを施し、凸面に布目痕をもつ。胎土は精選され均一である。還元炎焼成である。7・8の色調は灰色で9は緑黄色を呈する。6はK-9号住居跡出土。7~9は遣唐出土。

年代

瓦を出土した5・8号住居跡の共伴遺物から9世紀前半と考えられる。

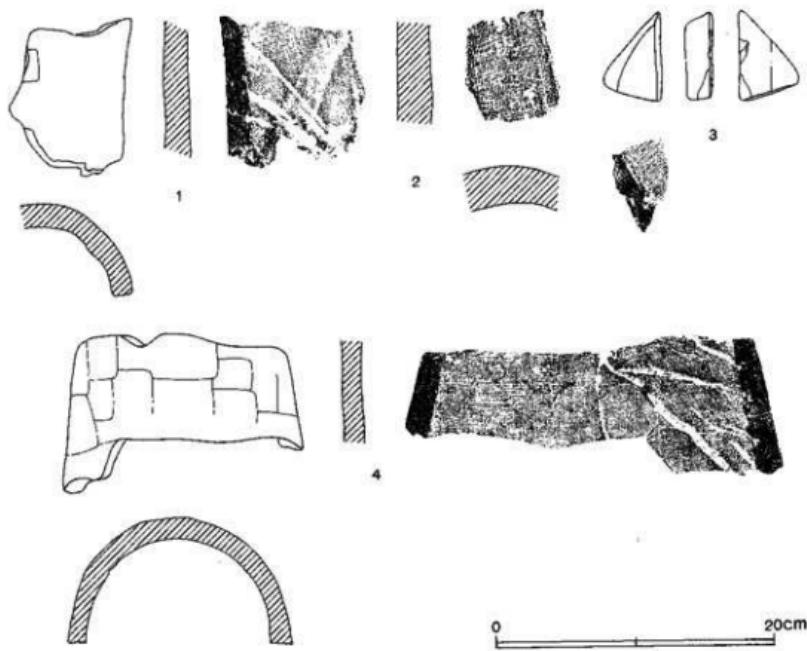
宮ノ越遺跡

立地と環境

宮ノ越遺跡は狹山市柏原字宮ノ越に所在し、入間川左岸台地上に位置する。現在は柏原ニュータウンとなっているが、発掘調査により竪穴住居跡65軒、掘立柱建物跡18棟からなる8世紀後半から10世紀前半まで営まれた集落跡であることが確認された（小河ほか1982）。遺跡に隣接して北に宇尻遺跡、南に城ノ越遺跡がある。

出土遺物（第60図）

1は第7号住居跡北カマドから出土した丸瓦である。凸面はヘラケズリ調整し、凹面は布目痕および布の合せ目痕が残る。厚さ1.8cm。橙色を呈し、胎土は小石を若干含む。2はA区1号土壙より出土した瓦片であるが丸瓦と思われる。厚さ2.4cmと比較的厚手である。凸面はヘラケズリ調整。灰色を呈し、小石・砂粒を大量に含む。3は第62号住居跡覆土中から出土。厚さ1.8cm。平瓦片である。凸面、側面ともヘラケズリ調整。灰白色を呈し、砂粒を含む。4は第4号住居跡床直上から出土した丸瓦である。厚さ1.4cm。凸面は本方向にヘラケズリ調整を施す。凹面には布目とともに縦状压痕が見られる。にぶい黄橙色を呈し、胎土に砂粒を含む。報告によれば第4号住居跡は9世



第60図 宮ノ越遺跡

紀後半に属する。

小山ノ上遺跡

立地と環境

狹山市は、埼玉県西部の山地から流れだす入間川、不老川の2河川によって開析された台地上に位置する。入間川は、武藏野台地を開析して南岸の市街地をのせる段丘と、北岸の水富・柏原地区をのせる段丘を形成している。入間川の流れは、南西から北東に向いており水富地区から開析谷の幅を徐々に広げ、川越市の落合橋付近で南東流してくる越辺川と合流する。河岸段丘は南岸で3段、北岸であり、上流の笛井では3段となっている。当市南部では、入間川とはほぼ同方向に流れる不老川に開析された地形を呈しているが、この川は冬の渇水期には流れがなくなり、開析の度合は進んでいない。

入間川と不老川に挟まれた部分で市の西部地区は丘陵地形を呈しているが、飛行場（現航空自衛隊入間基地）造成の時に削平されて平坦となっている。

段丘上はほぼ平坦であるが、微地形は複雑で入間川の流れと同方向に埋没谷がいくつかみられる。段丘崖は急傾斜を呈し、湧水が認められる所もいくつかある。

当市には、66か所の遺跡が所在する。時代別の遺跡数は、旧石器時代4、縄文時代44、古墳時代6、奈良・平安時代41である。遺跡の大半は、入間川の両岸段丘上に立地する。

小山ノ上遺跡は、西武新宿線狭山市駅から北西へ直線距離で約2.5kmの地点に所在し、入間川左岸台地上の縁辺に位置している。標高は西端が61m、東端が54mで、人間川沖積地との境いは急崖を形成し、比高差は11mを測る。台地上はおおむね平坦で、北東に向けてゆるく傾斜して低くなってしまっており、部分的に南から谷が入り込んでいる。

分布調査による遺跡の範囲は、480×300m、面積にして101,000m²を測る。縄文時代中期・後期と奈良・平安時代の集落遺跡である。昭和63年までに6次にわたる調査を実施して、住居跡23軒、掘立柱建物跡15棟、掘跡1条、柵列1基を検出した。掘跡を除いた残りは奈良・平安時代のものである。

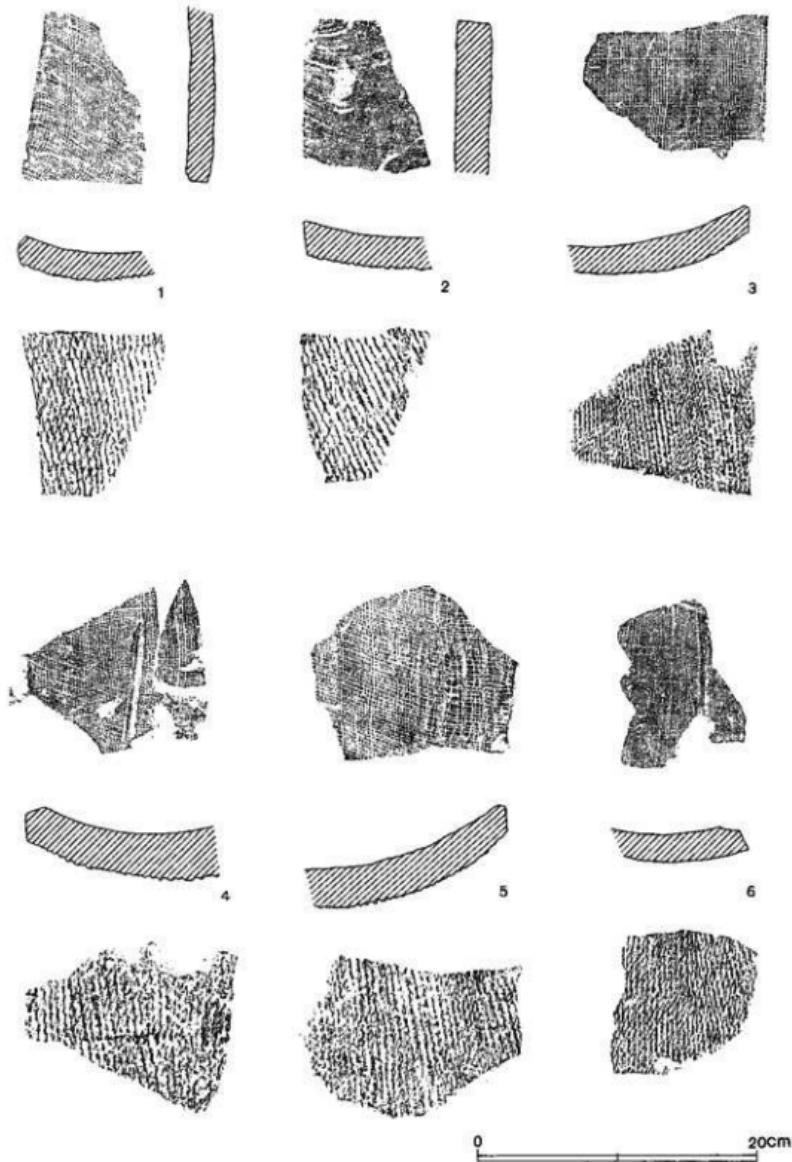
掘立柱建物跡は、群を形成して南から入ってくる谷の底部分に検出された。この群を囲むように柵列が巡っている。この中に、竪穴住居跡が3軒所在するが、その主体は谷の両側の高地である。

出土遺物は多きにわたっているなかで、2次調査1号掘立柱建物跡P1から「小山」と流れる須恵器窯の墨書き器、5次調査から「小山」、「山」と読める須恵器窯・蓋が出土している点が特筆できる。他に3次調査区の1号住居跡から鉄製鉢具、木製の柄などが出土している。

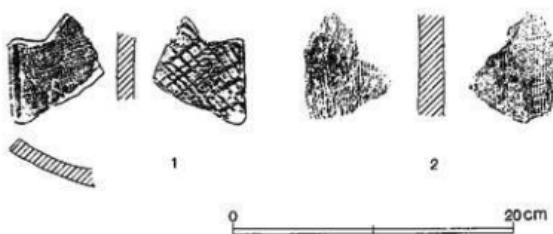
瓦は、3次調査区の1・2号住居跡で出土した。いずれも覆土中であった。 (小瀬 良樹)

出土遺物 (第61図)

1~6はすべて平瓦である。1は厚さ1.7cm。凸面に3cm単位当たり4×7本の繩叩きを施す。叩きの方向は対向して左から右へ、広端から狭端へと行う。凹面は3cm単位当たり17×15本の布目痕が残る。側面には縦方向、端面には斜め方向のヘラケズリ調整を施す。端部は凹面側を面取りする。一枚造りと推定される。灰白色を呈し、胎土は若干の砂粒を含む。2は厚さ2.4cm。凸面は3cm単位当たり4×6本の繩叩き。凹面糸切り痕が明瞭に残り、布目痕は3cm単位当たり28×27本である。側面、端面ともにヘラケズリ調整。灰白色を呈し、胎土は0.2~0.4cmの小礫を含み、器表面は荒れている。3は厚さ2.3cm。凸面は3cm単位当たり7×8本の繩叩き。凹面は3cm単位当たり18×17本の布目痕が明瞭に残る。側面にヘラケズリを行い、凹面はやや面取り状を呈する。褐色で、胎土は緻密である。4~6はすべて第1号住居跡からの出土である。4は厚さ3.1cm。凸面には3cm単位当たり4×6本の比較的太めの繩叩きが施される。凹面は3cm単位当たり18×15本の布目痕が残る。部分的に横方向の糸切り痕も観察できる。側面はヘラケズリ調整。凹面側を面とりする。明褐色を呈し、0.2~0.7cmの小礫を若干含む。5は厚さ2.8cm。凸面は3cm単位当たり10×17本の布目痕。側端に向って布目は荒くなる。側面はヘラケズリ調整。凹面側にもわずかにヘラケズリを施す。褐色を呈し、砂粒を若干含む。器厚が側端に向って薄くなることや、布目が粗くなっていることなどから一枚作りと考えられる。6は厚さ2.1cm。凸面は3cm単位当たり4×8本の繩叩き。凹面は3cm単位当たり23×25本の比較的細かい布目痕が残る。欠けていて不明だが、ヘラ描きの文字が認められる。側面は端面とも欠失している。灰色を呈し、長石粒、微砂粒を含む。



第61図 小山ノ上遺跡



第62図 今宿・城ノ越遺跡

今宿遺跡

立地と環境

今宿遺跡は狹山市大字上広瀬字今宿に位置する。南東に入間川を望む台地にあり、標高60~66mを測る。発掘調査により奈良・平安時代の住居跡48軒が検出された。

出土遺物（第62図1）

瓦は第7号住居跡から平瓦と思われる小片が出土した。厚さ1.0cm。凸面には格子叩きをもち、凹面には布目痕が残る。色調は黄橙色。

城ノ越遺跡

立地と環境

城ノ越遺跡は狹山市柏原字城ノ越に位置する。入間川左岸台地上にあり、北で宮ノ越遺跡に隣接する。遺跡東西の沖積地との比高差は約10mである。発掘調査により住居跡9軒、掘立柱建物跡1棟が検出されている。時代は8世紀後半から10世紀初頭までにわたる。

出土遺物（第62図2）

瓦は第3号住居跡から出土した。細片であるため詳細は不明だが、厚さ1.9cmを計る。凸面繩叩き、凹面布目痕が残る。

狹山市域においては瓦片の採集地が数多く分布する。東八木窯跡、設ヶ丘遺跡、富士塚遺跡、鳥ノ上遺跡、上広瀬西久保遺跡、西久保遺跡などであり、いずれも入間左岸に集中する。表探資料ではあるが、左岸台地上での瓦需要が高かったことを物語る。また瓦塔も東八木窯跡で屋根破片1点、宮地遺跡第24号住居跡床面から屋根破片1点、第32号住居跡から同じく屋根破片1点が出土している。特に宮地第32号住居跡のものは降棟を持つ人母屋造りの表現であり、瓦（余）堂を想定させる資料である。

掲櫓木遺跡

立地と環境

狹山市は、埼玉県西部の山地から流れだす入間川、不老川の二河川によって開析された台地上に位置する。入間川は、武藏野台地を開析して南岸の市街地をのせる段丘と、北岸の水富・柏原地区をのせる段丘を形成している。入間川の流れは、南西から北東に向いており水富地区から開析谷の幅を徐々に広げ、川越市の落合橋付近で南東流してくる越辺川と合流する。河岸段丘は南岸で3段、北岸であり、上流の笛井では3段となっている。当市南部では、入間川とほぼ同方向に流れる不老川に開析された地形を呈しているが、この川は冬の渇水期には流れがなくなり、開析の度合は進んでいない。

入間川と不老川に挟まれた部分で市の西部地区は丘陵地形を呈しているが、飛行場（現航空自衛隊入間基地）造成の時に削平されて平坦となっている。

段丘上はほぼ平坦であるが、微地形は複雑で入間川の流れと同方向に埋没谷がいくつもみられる。段丘崖は急傾斜を呈し、湧水が認められる所も数か所ある。

当市には、66か所の遺跡が所在する。時代別の遺跡数は、旧石器時代4、縄文時代44、古墳時代6、奈良・平安時代41である。遺跡の大半は、入間川の西岸段丘に立地する。

堤櫛木遺跡は、西武新宿線狭山市駅から北東へ直線距離で約2.3kmの地点に所在し、入間川右岸台地上の縁辺に位置している。標高は台地肩部で49m、奥まった地点で54m、入間川沖積地との比高差は8mをそれぞれ測る。台地は北に向けて標高を下げていくが、東側2m、西・南側は1mほど高くなり半円形の窪地を呈している。遺跡はその窪地のなかに占地していて、分布調査による遺跡の範囲は600m×450m、面積にして270,000m²である。

入間川右岸は狹山市の市街地をのせ、早くから開けた地区で遺跡の所在が不明の部分も多い。当遺跡の北に坂上遺跡、稻荷上遺跡、南に戸張遺跡が所在する。

1次調査は、昭和57年に県立清陵高校の建設に先立ち実施した。その結果、縄文時代前期（関山・黒浜期）の住居跡9軒、同中期（加曾利EⅣ期）の住居跡2軒（このうち1軒は敷石住居）、奈良・平安時代の住居跡79軒、同掘立柱建物跡12棟、同土壙塗3基、時期不詳の土壙26基、溝跡2条、ピット群3か所が検出された。

住居跡の分布は、ある程度のまとまりをもつ群が散在している。重複するものは少ないが第17号住居跡は5軒が重複している。住居跡の規模はおおむね3m～4m程度である。掘立柱建物跡は12棟あるものの、時期を明確に決定できるものはない。規模は、最大2×5間、最小で2×2間で、3棟は2×2間の組柱式である。12棟のうち6棟が集中しており、調査区の西側に所在する。他は散在している。

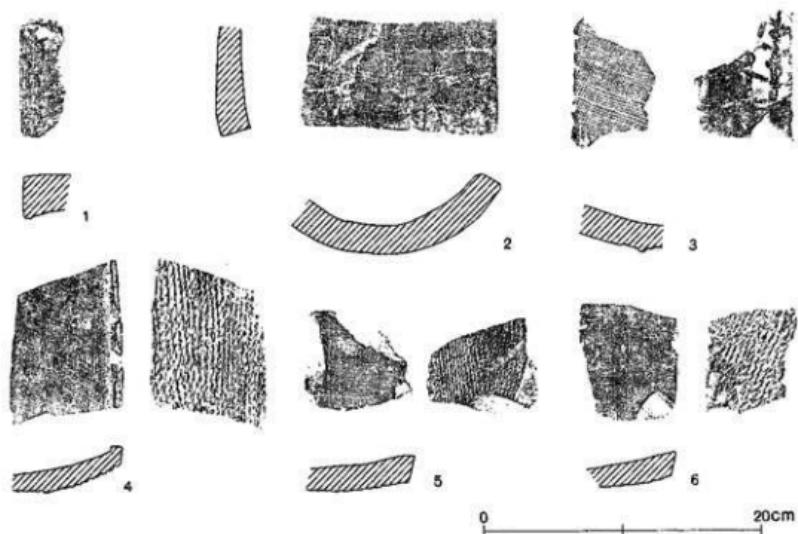
出土遺物で特筆されるのは、第88号住居跡から和同開珎が1枚出土している。

当遺跡は、9次にわたって調査を実施したが6次調査で掘立柱建物跡が1棟検出されたのみで、1次調査で遺跡の中央部分をおおむね調査しつくしたと思われる。

（小潤 良樹）

出土遺物（第63回）

1は軒平瓦である。瓦当面の高さは3cm。ヘラケズリを施し、無文である。小片のため判断が容易ではないが、曲線頭であると思われる。顎面はナデ調整され、凹面端部はヘラケズリ調整が施される。3cm単位あたり14×27本の布目痕を残す。酸化焼成で、灰色を呈す。2は第39号住居跡から



第63図 損壊木遺跡

出土した。丸瓦である。厚さ2.1cm。凸面は縦方向にナデ調整、凹面は3cm単位当たり 22×26 本の布目痕を残す。側・端面ともにハラケズリが施される。暗青灰色を呈し、胎土は砂粒、白色鉱物粒を含む。3~6は平瓦である。3は第17号住居跡から出土。厚さ2.0cm。凸面に正格子の叩きをもち、凹面は3cm単位当たり 16×19 本の布目痕を残す。黄灰色を呈し、白色粒子を含む。4は第73号住居跡から出土。厚さ1.5cm。凸面は3cm単位当たり 8×7 本の繩叩きを施し、凹面は3cm単位当たり 37×41 本の比較的目的の細い布目痕を残す。側面はハラケズリ調整する。成形は粘土板による一枚造りである。青灰色を呈し、細砂粒、白色鉱物を含む。5は凸面に3cm単位当たり 12×8 本の繩叩きを持ち、凹面は3cm単位当たり 24×23 本の布目痕を残す。側面はハラケズリ。粘土板による一枚造りと思われる。暗赤褐色を呈し、小蝶、白色鉱物粒を含む。6は凸面に3cm単位当たり 4×8 本の繩叩き、凹面の布目痕は3cm単位当たり 31×30 本である。淡褐色を呈し、胎土は細砂粒、小蝶を若干含む。1、5、6の3点は表採である。

宮地遺跡

立地と環境

遺跡は、狹山市大字笠井字宮地上に位置する。西武池袋線入間市駅から北西方向へ約 kmの地点、入間川左岸台地上に位置している。この台地は、南西から北東に向かって流路をとる入間川に開析され

ている。入間川は、笛井地区で蛇行して多くの段丘をつくりだし、そこから流路を扇状に広げて北東流する。段丘は、遺跡付近で4段、下流では2段となる。

段丘上はほぼ平坦で、東に向けてゆるく傾斜して低くなっていく。下位段丘との比高差は、14mを測る。

段丘上には、奈良・平安時代の上広瀬上ノ原遺跡、今宿遺跡、森ノ上遺跡、小山ノ上遺跡、宮ノ越遺跡が帶状につながり、下位段丘には縄文時代中期の八木遺跡、奈良・平安時代の八木北遺跡が所在する。この両段丘にまたがり、半地下に石室を持つ笛井古墳群が所在する。さらに下位の段丘には、須恵器を焼成した東八木窯跡群が所在する。対岸には丘陵が広がり、頂部に縄文時代中期の坂東山遺跡、やや西奥に須恵器、瓦等の生産地である東金子窯跡群が立地している。

遺跡の範囲は、分布調査によると630m×280m、面積にして141,000m²である。縄文時代中期と奈良・平安時代の複合集落遺跡である。昭和63年までに4次にわたる調査を実施して、縄文時代中期の住居跡62軒（敷石住居2軒）、土塙約200基、奈良・平安時代の住居跡16軒、土塙2基を検出した。

縄文時代の住居跡は、円形にならび環状集落を呈している。奈良・平安時代の住居跡は、近接して存在するものもあるが、重複するものはない。

奈良・平安時代の出土遺物は、須恵器壺・壇・蓋・鉢・豆・甕・土師器壺・甕・瓦塔、ふいごの羽口、鐵製刀子・鎌・釘・瓦がある。煮沸形態の土器は土師器を使用し、その他は須恵器である。

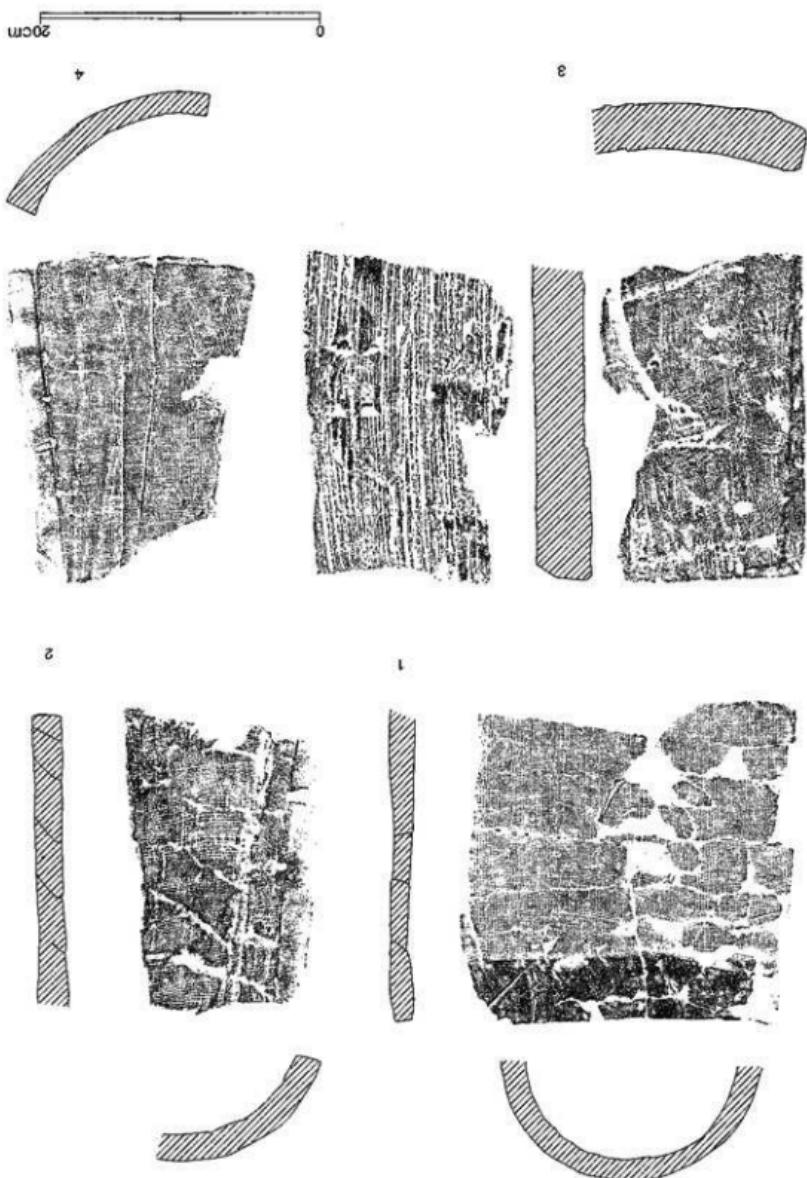
現在、整理中のため詳細は不詳だが、8世紀代～10世紀にかけての集落と考えられる。住居跡は一般的な堅穴式であるが、ふいごの羽口、鐵鋤が出土した住居跡もあり、鍛冶に関係すると思われる。

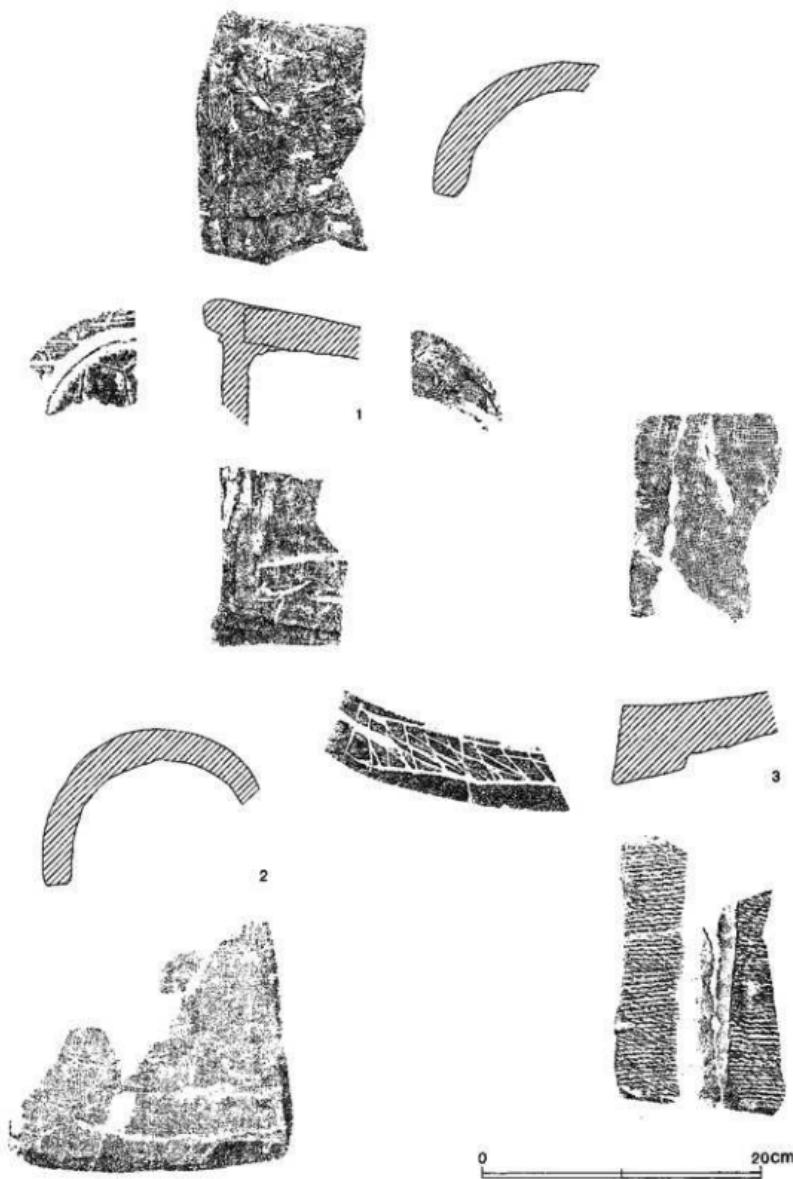
(小瀬 良樹)

出土遺物（第64回）

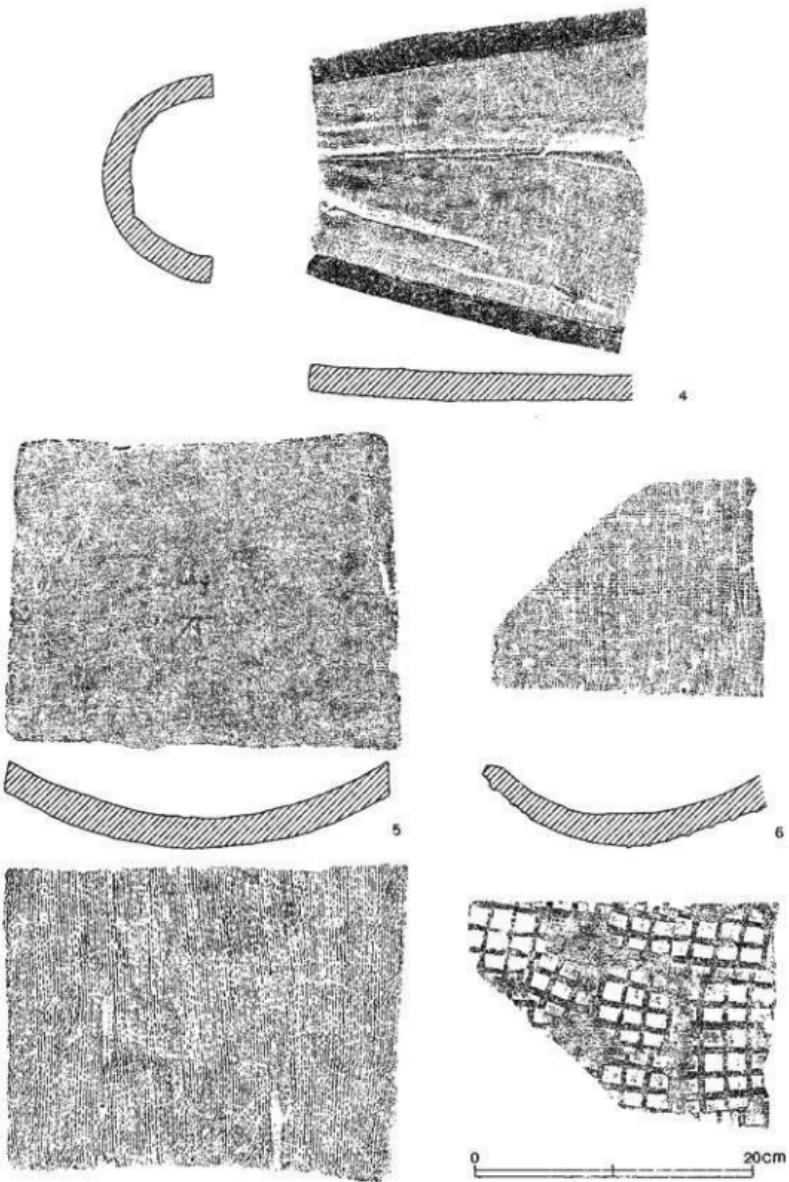
1と2は丸瓦、3と4は平瓦である。1は第4号住居跡から出土。両側端と広縁側が欠けている。狭端の形状から行基葺丸瓦である。凸面は横方向にナデ調整を施し、凹面は3cm単位当り22×21本の布目痕が残る。端部を幅約4cmにわたり布目をナデ消している。成形は紐土紐により幅3.5～4.5cmの痕跡が明瞭に観察できる。赤褐色を呈す。厚さ1.4cm。胎土に若干の砂粒子を含む。2は第49号住居跡から出土。厚さ1.9cm。凸面は縦方向にナデ調整。凹面は3cm単位当り15×20本の布目痕とじあわせの粗痕が残る。幅約4cmの紐土紐の痕跡も明瞭に読みとれる。側面はヘラケズリ調整。青灰色を呈し、白色鉱物粒を含む。3は第32号住居跡からの出土である。凸面は3cm単位当り12×9本の縄叩きが施される。凹面は3cm単位当り20×21本の布目痕が残る。布目は狭端方向に向って荒くなっている。側面はヘラケズリ、狭端面もヘラケズリを施すが、さらに凹側をヘラケズリにより面取りする。厚さ3.6cmと比較的厚手である。黄灰色を呈し、小礫を多く含む。4は第49号住居跡からの出土。厚さ1.6cm。縦半分に叩き削っており、何らかの道具瓦かもしくは再利用されたと考えられる破片である。凸面は縄叩き痕をナデ消し、凹面には3cm単位当り18×26本の布目痕を残す。側面はヘラケズリ。暗緑灰色を呈し、胎土は小礫、白色針状物質を含む。

第64圖 宜地遺跡

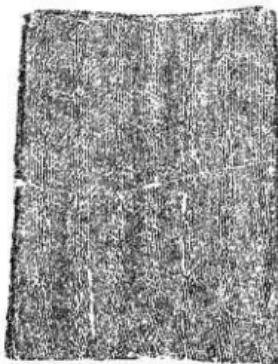
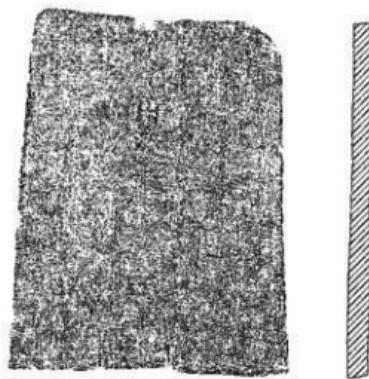




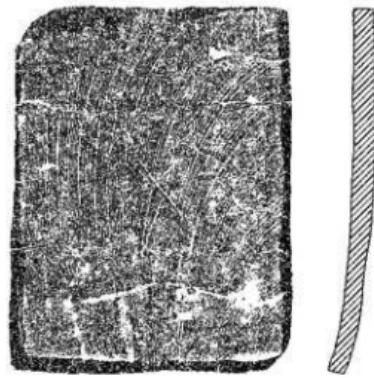
第65図 霧川遺跡(1)



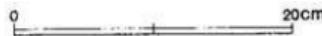
第66図 霧川遺跡(2)



7



8



第67図 犬川遺跡(3)

霞川遺跡

立地と環境

霞川遺跡は入間市大字新久字霞川に所在する。当地は東京都青梅市から入間市内を東に流れる霞川の南側台地の標高124~131mを測る緩やかな北斜面に位置する。この台地は標高124~140mの緩やかな等高線を描いており、また、霞川の北側には秩父山地から舌状に突出した加治丘陵が西から東へと延びている。

霞川流域の台地上には先土器時代、縄文時代、奈良・平安時代の遺跡が点在している。このうち平安時代の遺跡は4箇所を数える。また、加治丘陵には現在14箇所の窯跡が確認されている東金子窯跡群が所在しており、これらは霞川を挟んで霞川遺跡の北側に対峙している。この窯跡群は8世紀第三、四半期以降、須恵器供給窯として開始され、9世紀中葉の武藏国分寺七重塔再建期にあたり、その供給瓦窯として発展し、10世紀前半まで続いたことが広く知られている。(鹿島英明1988) これら窯跡のうち5窯跡が発掘調査されており、新久A地点第1・2号窯跡、八坂前窯跡第1~6号窯跡が七重塔再建の9世紀中葉に位置づけられている。

霞川遺跡は縄文時代中期と平安時代の集落跡であった。検出された遺構は縄文時代中期加曾利E期前半の住居跡5軒、平安時代の住居跡10軒、歴史時代の井戸(明代の青磁を出土)1基である。平安時代の集落は第1号住居跡でやや古い傾向をもつが、10軒とも新久A地点第1・2号窯跡、八坂前窯跡と同時代の9世紀中葉と考えられる。

平安時代の各住居跡からは瓦が出土しており、なかでも第1~4、6、7、10号住居跡にはカマドの構築に瓦を用いている。特に、第2、4号住居跡のカマドには多量に用いている。

東金子窯跡群は8世紀後半から10世紀前半の長期にわたり操業されているが、工人たちの住居跡はこれまで新久E地点より発見された1軒だけであった。本遺跡平安時代の集落は、東金子窯跡群の生産拡大の時期前後に形成され、その役割の終焉とともに集落も縮小していった(鹿島英明1988)ものであり、また各住居跡とも瓦を出土しており、さらにカマドに意識的に用いているものが大半であることから、東金子窯跡群を支えた工人たちとの強い関連を示唆している。(斎藤祐司)

出土遺物(第65図~第67図)

軒丸瓦

1は単介6葉軒丸瓦の破片と考えられる。瓦当の厚さは1.8cmを測る。弁の彫り込みは極めて浅く、剣菱型の凸線で表現されている。周縁は素文の直立縁である。周縁の表面には木目痕が観察される。瓦当裏面は中央付近に叩きの痕跡が見られ、丸瓦との接合部分はナデを施し印籠造りである。丸瓦は、厚さは1.8cmを測る。凸面に3cm単位当たり13×4.5本の撻叩きを施し、後に縱方向のヘラケズリを施す。凹面は3cm単位当たり縦36本×横34本の非常に細かい布目痕をもつ。丸瓦部は粘土総造りである。胎土は、白色粒子を多く含み、黒色粒子、砂粒子を混在。焼成良好。色調は灰色を呈する。

軒平瓦

2は区画された中を縱方向と斜めの不規則な線刻が付されている。瓦当厚さ5.3cm、平瓦部厚さ3.2cm、頭部の幅は5.1cmとやや狭い。凹面は3cm単位当たり縦17本×横15本とやや粗雑な布目痕

をもつ。額は段額で縄叩きを施し、接合に横ナデが施される。凸面に3cm単位当たり8×4.5本の縄叩きを施す。側面は横ナデが施される。胎土は、砂粒、白色鉱物を含む。焼成良好。色調は淡灰色を呈する。

丸瓦

3は厚さ2.4cmを測る。凸面には丁寧なナデが施されており、凹面には3cm単位当たり縦22本×横21本の布目痕をもつ。広端部および側面にはヘラケズリを施している。胎土は、砂粒、白色鉱物を含む。焼成良好。色調は黒灰色を呈する。4は厚さ1.4cmを測る。凸面には横方向のヘラケズリが施され、凹面には3cm単位当たり縦26本×横21本の布目痕をもつ。中央部分には縦方向に緩じ形「S」の布目の重ねが観察される。狭端部および側面にはヘラケズリを施している。胎土は、白色粒子を多く含み、黒色粒子、砂粒子を混在。焼成良好。色調は黒灰色を呈する。

平瓦

第1類

5・7・8はいずれも凸面縄叩きを施している。5は、厚さ2.2cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦25本×横24本の布目痕をもつ。中央部分には「山万」と記した模骨文字をもつ。狭端部および側面にはヘラケズリを施している。凸面に3cm単位当たり12本の縄叩きを施す。粘土板の一枚造りである。胎土は、白色粒子を多く含み、細砂粒子を混在。焼成良好。色調は濃灰色～淡赤褐色を呈する。7は、厚さ2.5～1.6cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦24本×横24本の布目痕をもつ。中央部分には「山万」と記した模骨文字をもつ。狭・広端部および側面にはヘラケズリ後、ナデを施している。凸面に3cm単位当たり9本の縄叩きを施す。粘土板の一枚造りである。胎土は、石英、長石を含みきめ細かい。焼成やや良好。色調は褐色を呈する。8は、厚さ2.1～2.4cmを測る。凹面には広端から入って狭端に抜ける糸切り痕が観察され、3cm単位当たり縦26本×横22本の布目痕をもつ。狭端寄りには「山」と記した施書き文字をもつ。狭・広端部および側面にはヘラケズリ後、ナデを施している。凸面に3cm単位当たり8本の縄叩きを円弧状に施す。粘土板一枚造りである。胎土は、3cm～1cm程の白色砂礫を含む。焼成良好。色調は黒灰色を呈する。

第2類

6は凸面正格子の叩きを施している。厚さ1.2～2.3cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦13本×横18本の布目痕をもつ。狭端部および側面にはヘラケズリを施している。凸面には3本単位当たり縦5.4cm×横4.3cmの正格子の叩きを施す。粘土板一枚造りと考えられる。胎土は、砂粒、白色鉱物を含む。焼成良好。色調は青灰色を呈する。

年代

単介6葉軒丸瓦の破片は、国分寺再建期の瓦であることから9世紀中葉と考えられる。

引用・参考文献

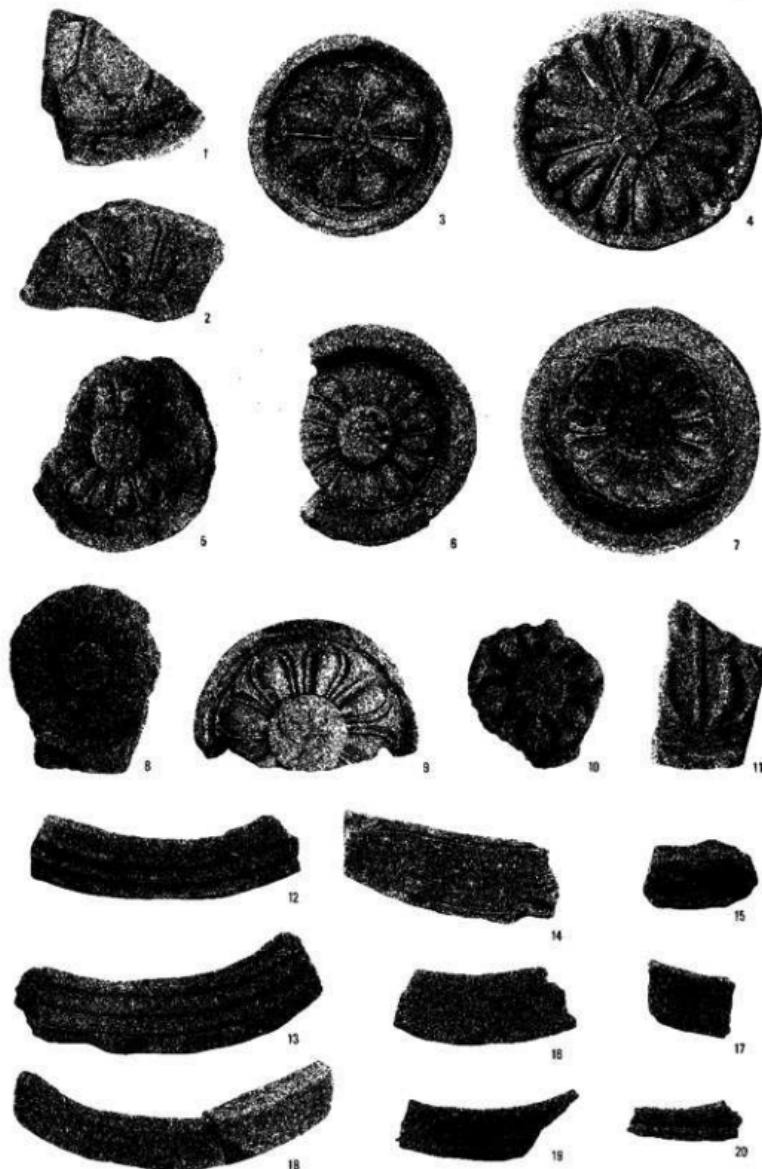
- 有吉重蔵 1986 「遺瓦からみた国分寺」『国分寺市史』上巻
伊藤研志他 1987 「附島遺跡発掘調査報告書Ⅱ」坂戸市教育委員会
入間市 1986 『入間市史』原始・古代資料編

- 入間市教育委員会 1984 「八坂前窯跡」
- 宇野信四郎 1978 「埼玉県入間郡東金子村窯跡とその出土瓦について」『西勃文化』 6
- 加藤基朗他 1981 「勝呂廃寺」坂戸市教育委員会
- 京都国立博物館 1988 「畿内と東国一躍もれた律令国家ー」
- 小渕良樹他 1982 「宮ノ越遺跡」埼玉県遺跡調査会報告第44集
- 小渕良樹他 1986 「揚竿木遺跡」狹山市埋蔵文化財調査会報告書 4
- 小渕良樹他 1987 「今宿遺跡」狹山市埋蔵文化財調査会報告書 5
- 埼玉県 1984 「新編埼玉県史」史料編 3 古代 1 奈良・平安
- 狹山市 1986 「狹山市史」原始・古代資料編
- 狹山市史編さん係 1983-1984 「狹山市遺跡分布調査報告書」第1・2集
- 酒井清治 1982 「日高町女影廃寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県県史編さん室
- 酒井清治 1988 「高麗郡の郡寺と氏寺—前内出窯跡出土瓦との関連から—」『研究紀要』10号 埼玉県立歴史資料館
- 高橋一夫 1974 「前内出窯跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第24集
- 高橋一夫 1978 「高岡寺跡発掘調査報告書」高岡寺跡発掘調査会
- 高橋一夫 1982 「日高町高岡廃寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県県史編さん室
- 谷井 鮎 1973 「山田追跡・柏撲場追跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第18集
- 中平 薫 1982 「大寺廃寺」第1次発掘調査概報 日高町埋蔵文化財調査報告第二集
- 中平 薫 1983 「若宮」第3次発掘調査概報 日高町埋蔵文化財調査報告第五集
- 中平 薫 1984 「大寺廃寺」日高町埋蔵文化財調査報告第八集
- 中平 薫 1985 「宮久保・上の条・大寺廃寺」日高町埋蔵文化財調査報告第九集
- 坂野和信 1982 「北武藏における古代瓦の変遷」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』
- 藤原高志 1982 「日高町大寺廃寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県県史編さん室
- 宮 昌之 1982 「勝呂廃寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県県史編さん室
- 村木 功 1985

最後に、本稿をまとめにあたり、狹山市教育委員会の小渕良樹氏、入間市教育委員会の斎藤祐司氏、日高町教育委員会の中平薰氏には執筆をお願いいたしました。また、坂戸市林茂美氏、坂戸市教育委員会の加藤恭朗氏には資料掲載にあたって多大な御便宜をおはかりいただきました。

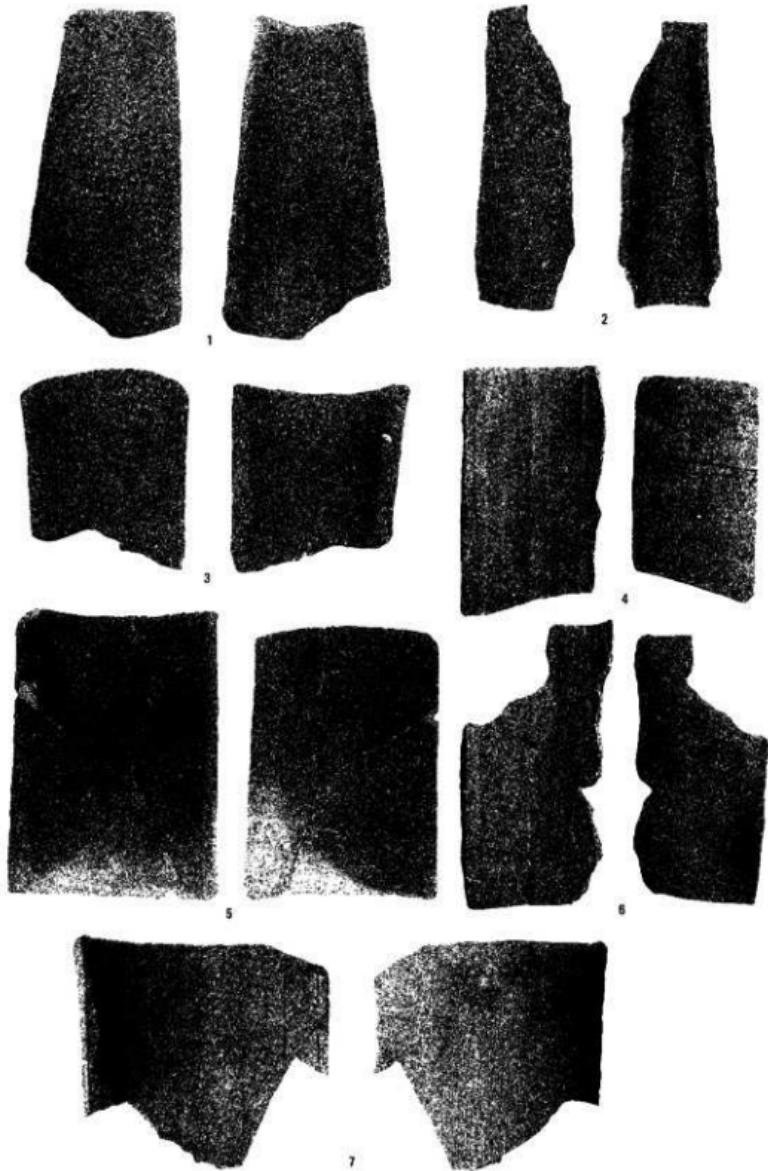
末筆ながら厚くお礼申しあげます。

図版 1



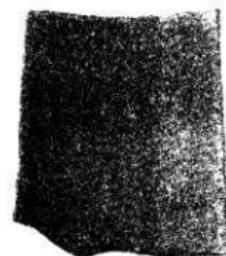
勝呂廃寺 1

図版 2



勝呂廃寺 2

図版 3



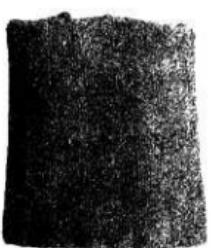
1



2



3



4



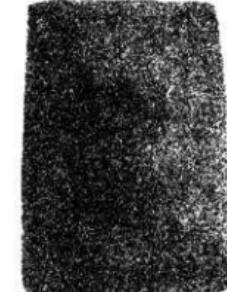
5



6



4



5



6



勝呂廃寺 3

図版 4

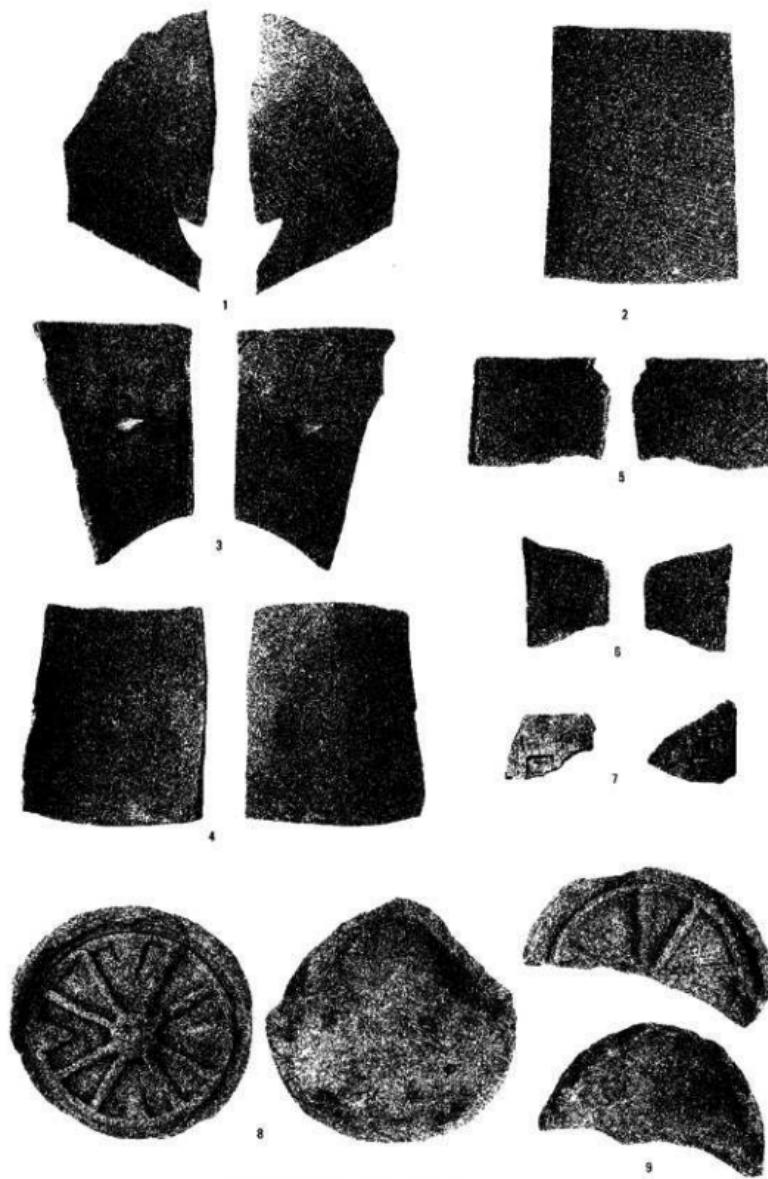


大寺廃寺(1~10)、若宮遺跡Ⅰ(11~18)



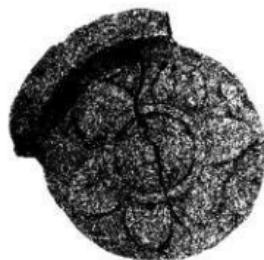
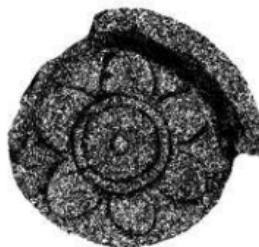
若宮遺跡 2

図版 6



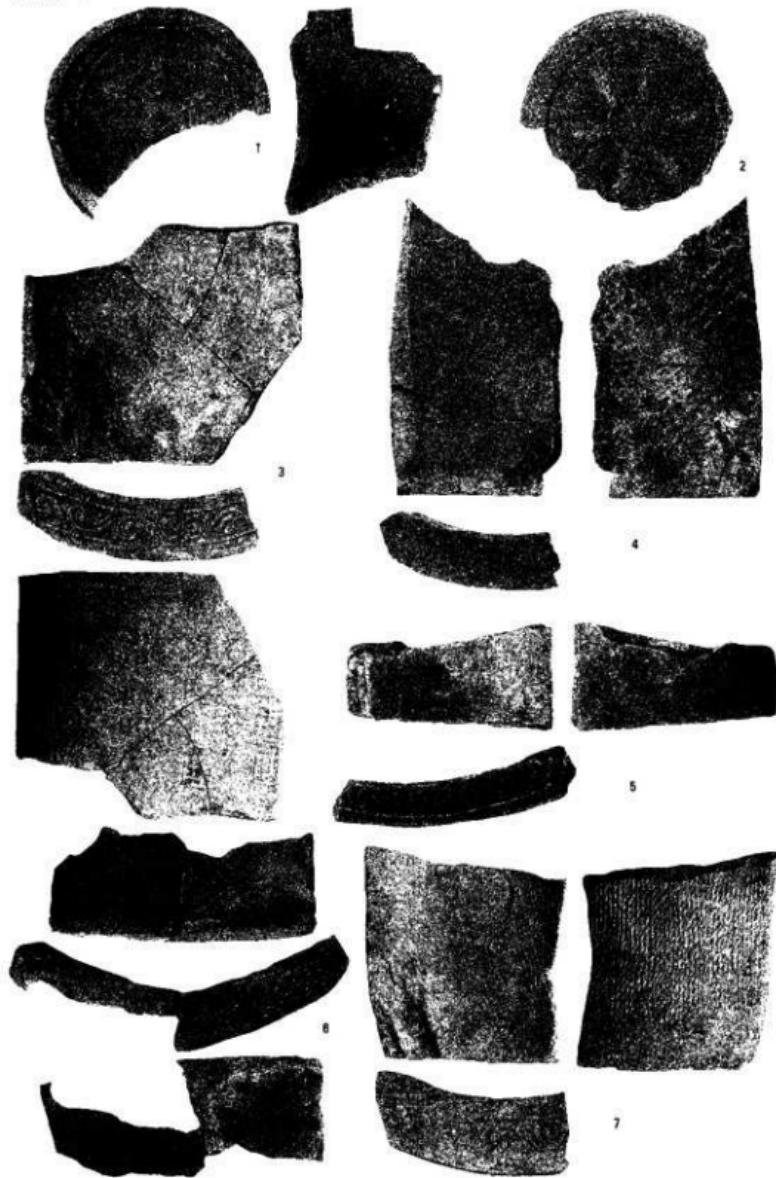
若宮遺跡 3 (1~7)、植荷前遺跡 (8~9)

図版 7



高岡廃寺

図版 8

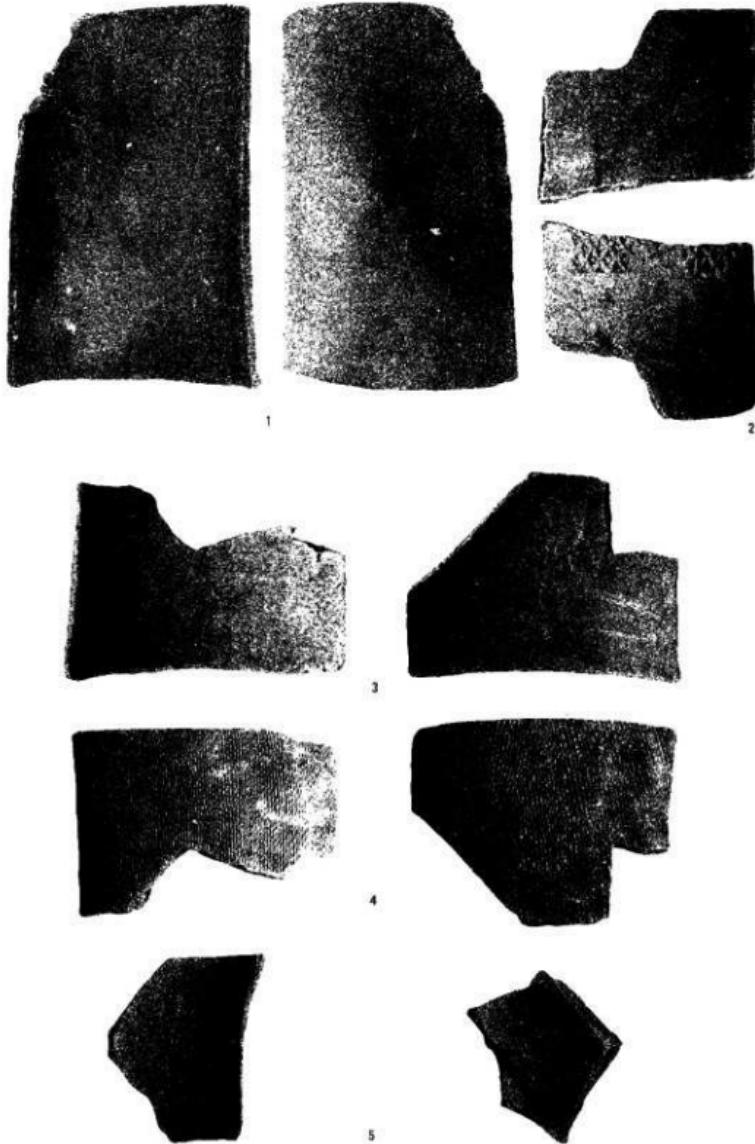


八坂前窯跡 1

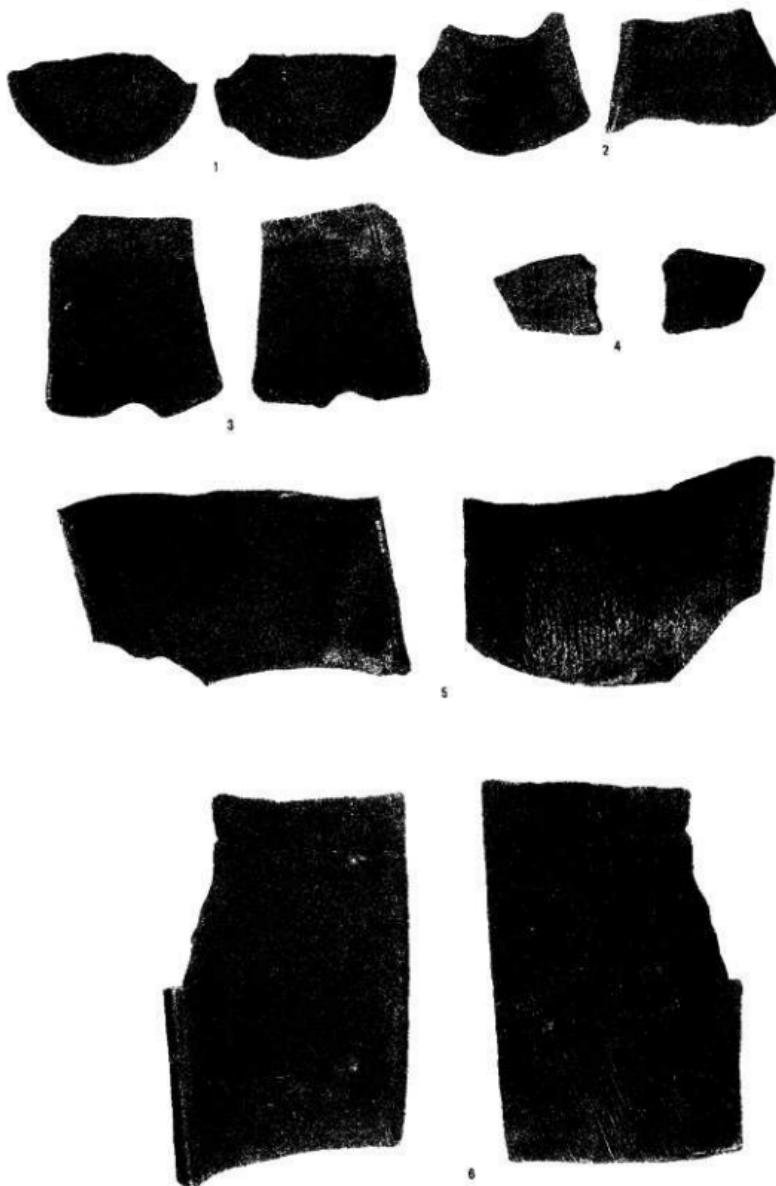


八坂前窯跡 2

図版 10

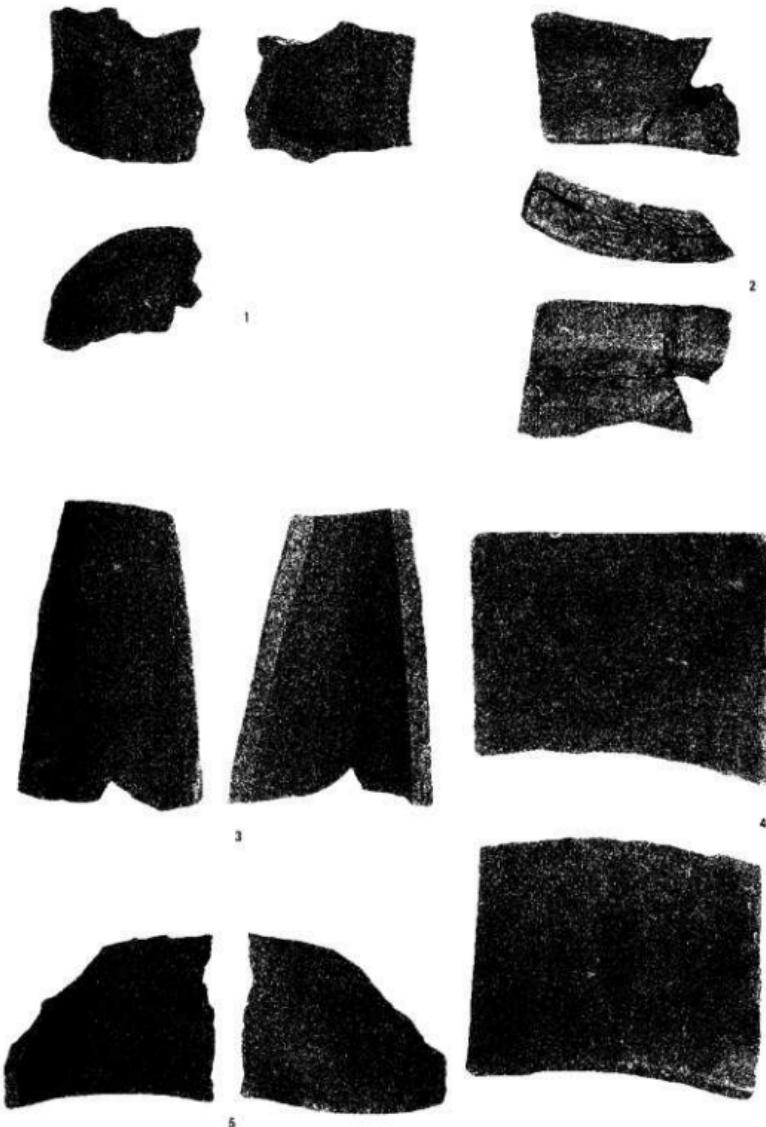


八坂前窯跡 3

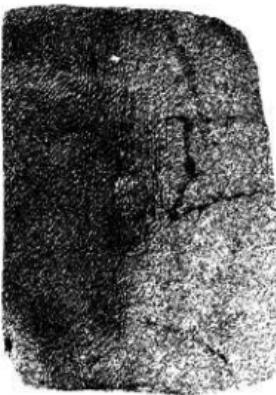
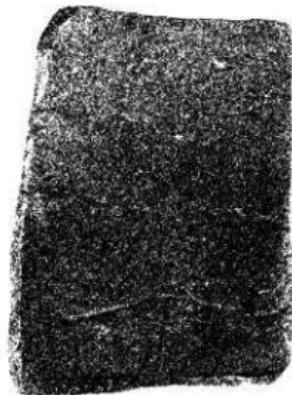


谷久保窯跡

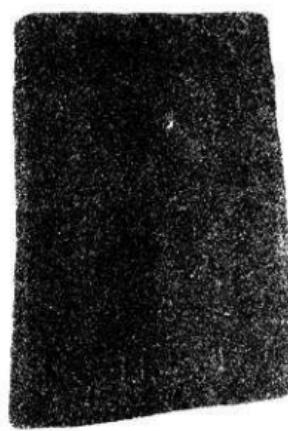
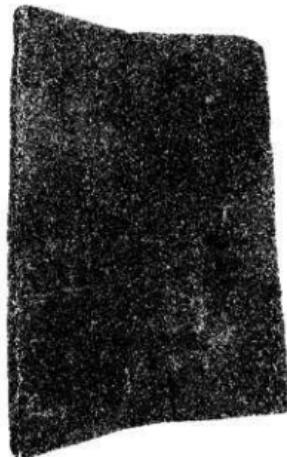
図版 12



霞川遺跡 1



1



2



3



4



5



霞川遺跡 2 (1~2)、小山の上遺跡 (3)、宮地遺跡 (4~5)

研究紀要 第6号

1989

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒331 大宮市柳町2-499 048-652-2231

印刷 新日本印刷株式会社